青森県埋蔵文化財調査報告書　第194集

羽黒平(1)遺跡

―主要地方道青森・浪岡線建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成7年度
1996年3月

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書　第194集

羽黒平（1）遺跡

— 主要地方道青森・浪岡線建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 —

序

浪岡町には、国史跡に指定されている浪岡城跡をはじめとして多くの遺跡が分布しています。

この報告書は、主要地方道青森・浪岡線建設に先立ち、路線内に所在する浪岡町羽黒平（1）遺跡を平成５・６年度の２箇年にわたり発掘調査した結果をまとめたものです。

調査では土師器、須恵器を伴う平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、製鉄炉跡等が多数検出され、特に製鉄炉跡は県内では最古のものとして注目されています。

この度の調査によって、当時の人々の生活を復元するうえで貴重な資料を得ることができました。

今後、この調査によって得られた成果が、地域社会の文化財として活用されるところがあれば幸いに思います。

ここに、調査の実施及び報告書の刊行にあたって種々ご指導、ご協力いただいた調査指導員はじめ、関係各位に対して厚く御礼申し上げます。

平成８年３月

青森県教育委員会

教育長　松森　永祐

例　　言

1　本報告書は、平成６年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施した主要地方道青森・浪岡線建設事業に係る浪岡町羽黒平（１）遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡の青森県遺跡登録番号は羽黒平（１）遺跡２９０１７である。

3　本報告書の執筆者名は依頼原稿については文頭に、その他については各節の末尾に示した。

4　資料の同定、分析等は次の方々に依頼した（順不同、敬称略）

遺跡の地形と地質	青森県立板柳高等学校	山口義伸
石器の石質鑑定	青森県立板柳高等学校	山口義伸
鉄器の金属学的解析	岩手県立博物館	赤沼英男
鉄製遺物と鉄関連炉の機能	岩手県立博物館	赤沼英男
植物珪酸体分析	株式会社　古環境研究所	
寄生虫卵・花粉分析	株式会社　古環境研究所	
土層とテフラ分析	株式会社　古環境研究所	
放射性炭素の年代測定	学習院大学	木越邦彦

なお、年代測定の結果は本文中に示した。

5　本書に掲載した地形図（遺跡の位置図）は国土地理院の５万分の一地形図を複写したものである。

6　引用・参考文献については巻末に収めた。

7　遺構、遺物等の縮尺はそれぞれの挿図中に示した。

8　土層等の色調表現には「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を用いた。

9　遺物、遺構の実測図における表現は以下のとおりである。

・観察表中に残存率50％以下と示した遺物の実測図は全て復元実測である。

・須恵器は断面黒塗り、土師器は断面白抜きとした。図中の矢印はヘラ削りの方向を示す。
　口縁部の横ナデについては原則として図示していない。

・土師器表裏面の網かけ部は油煙の付着部を示す。

・羽口の網かけ部は還元部を示す。

・遺構実測図中の網かけ部は焼土の集中範囲を示す。

・上記以外の表現については必要に応じて挿図中に凡例を示した。

10　遺物観察表は実測図に表現できない項目を示した。凡例は以下のとおりである。

・胎土への混入物は、ｗ＝白色粒子(white)、ｂ＝黒色粒子(black)、ｒ＝赤色粒子(red)、
　ｃ＝透明粒子(clear)、ｓ＝砂、針＝白色針状物質を示す。多いものから順に列挙した。

・残存率は実測図に示した部位における現存部の比率であり、器形全体に占める残存の度合いを示すものではない。

・法量の単位は㎝である。器高については破片の場合残存高を示してある。残存率が50％以下の遺物の口径、底径は全て推定値である。

・焼成は良好なものをＡ、不良なものをＣ、両者の間をＢとした。

11　発掘調査及び本報告書作製にあたって、下記の諸氏からご協力、ご助言を得た（敬称略）

木村浩一、工藤清泰

目　次

序
例　言

第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査要項……1
　第３節　調査の経過と方法……2

第Ⅱ章　遺跡の環境
　第１節　遺跡周辺の地形及び地質……3
　第２節　歴史的環境と周辺の遺跡……10

第Ⅲ章　Ｃ区の調査
　第１節　Ｃ区の概要……14
　第２節　平安時代の遺構と遺物……14
　第３節　縄文時代の遺構と遺物……57
　第４節　その他の時代の遺構と遺物……58

第Ⅳ章　Ｄ区の調査
　第１節　Ｄ区の概要……68
　第２節　平安時代の遺構と遺物……68
　第３節　縄文時代の遺構と遺物……100
　第４節　その他の時代の遺構と遺物……108
　遺物観察表……117

第Ⅴ章　自然科学的分析
　第１節　羽黒平(１)遺跡出土鉄製遺物の材質と鉄関連炉の機能……121
　第２節　羽黒平(１)遺跡における植物珪酸体分析……131
　第３節　羽黒平(１)遺跡における寄生虫卵分析・花粉分析……136
　第４節　羽黒平(１)遺跡の土層とテフラ……140
　補遺編　松山・羽黒平(１)遺跡出土鉄器の金属学的解析……144

引用参考文献

写真図版

第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項

第１節　調査に至る経過

本遺跡は、かつて羽黒平遺跡と命名されて、昭和48年(1973)に県教育委員会が実施した東北縦貫自動車道建設予定地内埋蔵文化財分布試掘調査によって確認された遺跡である(県埋文報第８集)。

この時の発掘調査は、昭和51年11月に粗掘りが実施された(12,000平方メートル)。次いで昭和52年４月18日から同年９月30日まで、本格的な調査が行われて、報告書は、昭和54年３月に刊行された(県埋文報第44集)。68軒の竪穴式住居をはじめとして、鍛冶場遺構、土抗等、平安時代の遺構、建物が多数検出されている。

県土木部の道路改良事業の進展に伴い、平成６年度道路改良事業の施業の施行に伴う埋蔵文化財の調査は、平成５年11月12日付け、青道県第328号で、県土木部長から県教育委員会教育長あてに、平成６年度の埋蔵文化財の発掘調査の依頼があった。これに基づいて、当センターでは、事業計画書及び費用の見積書（当初予算見積説明資料）を教育庁文化課へ提出した。これによって本遺跡は平成６年４月18日から発掘調査が実施されることになったのである。

（北林八洲晴）

第２節　調査要項

１　調査目的

主要地方道青森・浪岡線建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する松山・羽黒平(１)遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財活用に資する。

２　発掘調査期間　　平成６年４月18日から11月17日まで

３　遺跡名及び所在地　　羽黒平(１)遺跡(青森県遺跡台帳番号29017)
南津軽郡浪岡町大字五本松字平野124－１　外

４　調査対象面積　　羽黒平(１)遺跡　11,000平方メートル

５　調査委託者　　青森県土木部

６　調査受託者　　青森県教育委員会

７　調査担当機関　　青森県埋蔵文化財調査センター

8　調査協力機関　　浪岡町教育委員会・中南教育事務所

9　調査参加者

調査指導員　村越　潔　弘前大学教授（現青森大学教授、考古学）

調査協力員　蝦名　俊吉　浪岡町教育委員会教育長

調　査　員　高島　成侑　八戸工業大学教授（建築史）

新谷　武　青森県立浪岡高等学校校長（考古学）

市川　金丸　青森県考古学会会長（考古学）

赤沼　英男　岩手県立博物館専門学芸員（分析科学）

工藤　雅哉　弘前市立第一中学校教諭（地質学）

調査担当者　青森県埋蔵文化財調査センター

調査第一課　総括主幹

調査第一課長　北林八洲晴

主　　事　川口　潤

主　　事　七戸　将光

調査補助員　高橋　渉

小川　次郎

舘山　裕子

永沢恵理子

第３節　調査の経過と方法

平成６年４月18日にまずＣ区の調査に着手し、６月中旬からＤ区の調査も並行して実施した。９月からはＤ区の調査に専従した。

Ｄ区は未移転の民家があったため、移転終了を待って、調査を開始した。

発掘調査にあたっては、昨年度調査した羽黒平(１)遺跡Ａ区、Ｂ区のグリッドを延長して用いた。遺構の実測は遣り方測量で行った。グリッドの設定方法は以下のとおりである。

羽黒平（１）遺跡は東北自動車道により分断されているため、昨年度の調査区は便宜的に東北自動車道の西側をＡ区、東側をＢ区としてある。今年度の調査区はＡ区、Ｂ区のさらに両側に延伸したためＡ区の西側をＣ区、Ｂ区の東側をＤ区として調査を進めた。

グリッドは県土木部が設置した道路中心杭№115と№116を結ぶ直線と、№116上で直交する線を基準とし、それぞれから４ｍ毎にグリッドラインを設定した。各ラインには北から南にアルファベットを、西から東に算用数字を付し、その組合わせでＫ－64、Ｊ－250のようにグリッドを表示した。各グリッドの呼称は南西隅の杭の番号に基づいている。グリッドの南北ラインは座標北から約６１度東に偏る。

なお、遺構番号は各区毎に発見順に付した。

（川口　潤）

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　遺跡周辺の地形及び地質

青森県立板柳高等学校教諭　山口　義伸

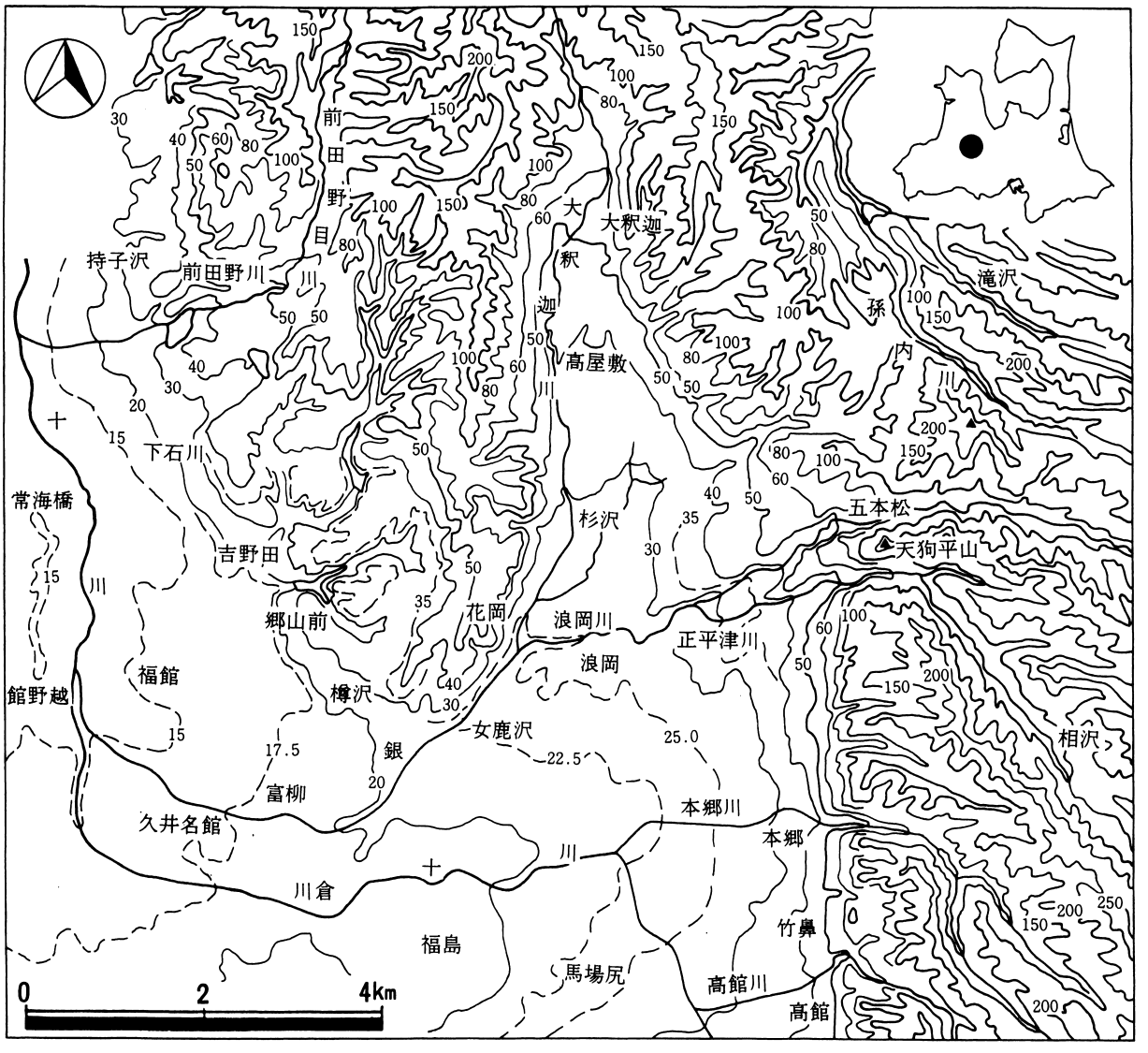
南郡浪岡町は津軽平野南東縁に位置し、大釈迦川・浪岡川などの流域に集落が点在する。

浪岡町を流れる主な河川として大釈迦川と浪岡川がある。大釈迦川は梵珠山(468m)を源とし梵珠山地及び前田野目台地の東縁をほぼ南流する。梵珠山地の分水嶺西方を南流する前田野目川は梵珠山の北側に位置する馬ノ神山(549m)を源とし、前田野目付近で平野部に達し平野内を北流する十川と合流する。一方、浪岡川は南方の火山性丘陵地を北西流して平野部に達し前田野目台地南端の浪岡町女鹿沢付近にて大釈迦川と合流する。合流したのちに台地を迂回して板柳付近で十川と合流する。正平津川も南方の火山性丘陵地に源を持ち、北西流して浪岡町五本松付近で浪岡川に接近し浪岡城跡で合流する。浪岡川及び正平津川の丘陵地から平野部への出口付近には開析された扇状地性の地形が展開し、また両河川を流下した火砕流堆積物からなる台地も舌状に分布する。浪岡城跡は火砕流台地上に立地し、城跡南端の崖下にて浪岡川と正平津川の合流点を望むことができる。

津軽山地南部の地形をみると、大釈迦川西方及び北方には馬ノ神山及び梵珠山を中心とする南北に帯状の梵珠山地があり外縁部には大釈迦丘陵が分布する。さらに、丘陵地の縁辺には前田野目台地が弧状に展開する。大釈迦丘陵は砂岩・シルト岩を主とする大釈迦層（新第三紀鮮新世～第四紀更新世）からなり、前田野目台地は八甲田第１期火砕流堆積物及び前田野目層からなる高位段丘、洞爺火山灰を指標とする中位段丘、そして縁辺部に分布する低位段丘の３段からなる。一方、大釈迦川東方及び南方には高頭森山、坊主畑山、高陣馬山、塚森山などの標高250m以下の山稜が点在するが、全体として北方へ緩傾斜する火山性の丘陵地が展開する。大釈迦層を基盤とし、これを不整合に覆う八甲田第１期火砕流堆積物(約65万年前の流下)及び八甲田第２期火砕流堆積物(約40万年前の流下)からなる。これらの火砕流堆積物は南東方に位置する八甲田火山から供給されたもので、谷地形など凹地を埋積するように流下して平頂な丘陵地を形成する。

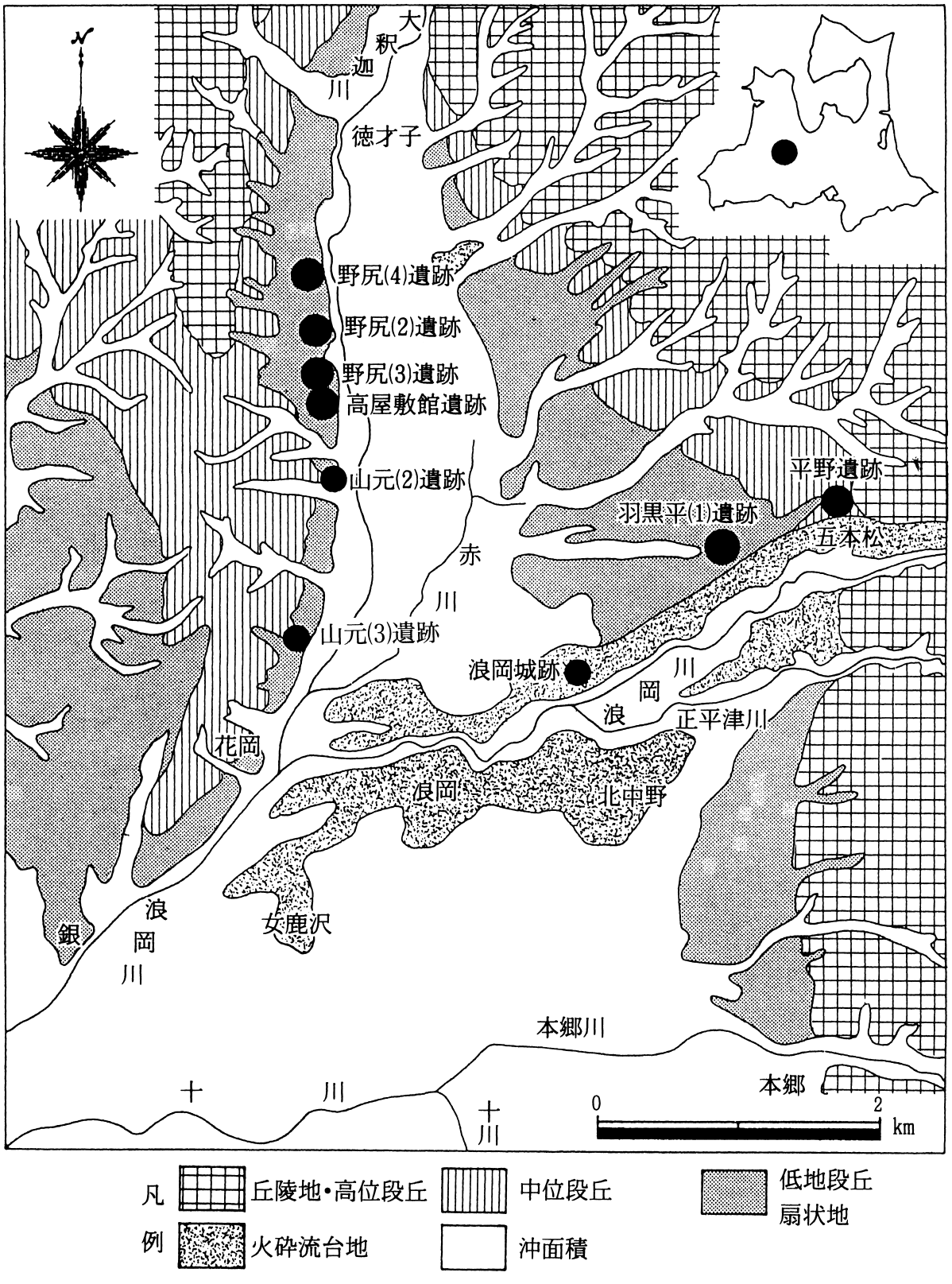
図１は浪岡周辺の等高線図を表す。大釈迦川と西方の前田野目川との間では標高50～200mの等高線が南方に高度を下げながら舌状に張り出し大釈迦川寄りに稜線部をもつ。標高80m以高の等高線は開析谷による浸食で大きく入り組み起伏に富んでいることが把握できる。ただ、標高80～150mまでの等高線をみると頂部にやや平坦な面を認められるが、標高150m以高ではあまり認められない。なお、標高60m以下の等高線はなめらかで開析谷による影響もあまりなく起伏の少ないことが読み取れる。

一方、大釈迦川以東においては浪岡川及び正平津川を境に南北で地形発達がやや異なる。両河川よりも南側では、標高80m以高の等高線はその間隔がせまく開析谷の浸食により大きく入り組んでいて谷間丘陵としての要素をもつ地形が展開する。平野部に接する標高50～60mの等高線はほぼ南北に走って構造的な要素をもち、線上には本郷、竹鼻、高館、三島などの集落が点在する。本郷川以北にお



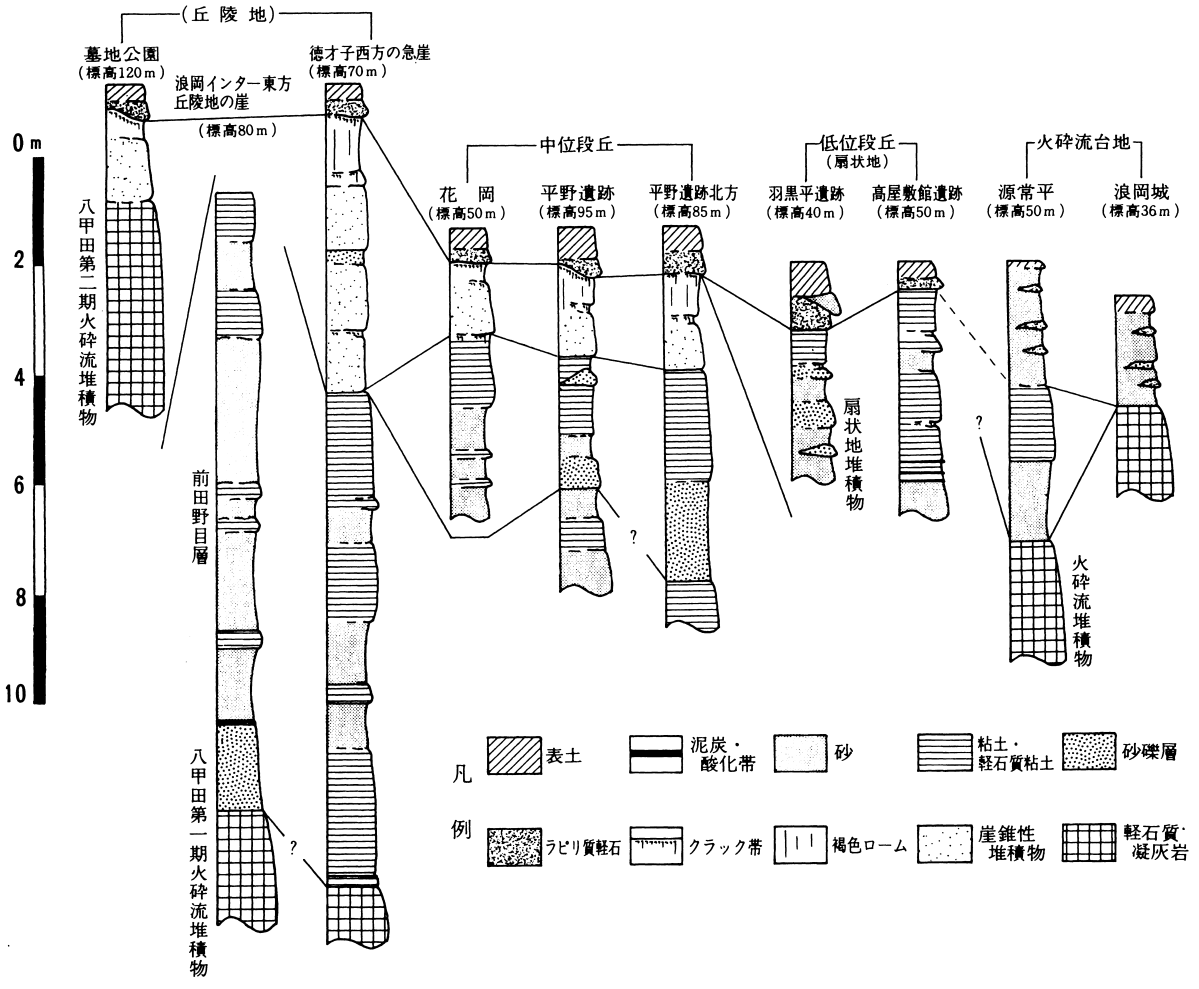
第１図　浪岡周辺の等高線図

いて標高30～50mの等高線はその間隔が広く平野部に向かう傾斜面としての要素をもち、浪岡川及び正平津川を中心とする扇状地の南半部に相当するものと考える。これに対して、北側では標高120～150mの等高線を境に等高線の粗密の度合い及び入り組みに変化が認められる。標高150m以高では等高線の間隔が密で入り組みが大きい。標高100～120mの等高線は浸食によって大きく入り組んでいるが頂部に平坦面が認められる。標高90～100mの等高線では丘陵地縁辺の緩傾斜面としての要素を読み取ることができ、開析の進んだ小丘地として北西方の大釈迦川に向かって点在する。標高30～60mの等高線はその間隔が広く扇状地の北半部にあたる。なお、標高120～150mの等高線の密集部は南北方向に走り、浪岡川－正平津川間の天狗平山(173.7m)西端を通って南側の本郷、竹鼻などが点在する標高50～60mの等高線のもつ方向性と連続する。これは津軽平野南縁部を通る黒石断層(村岡・長谷,1990)の北方への延長線であると考える。



第２図　浪岡周辺の地形分類図

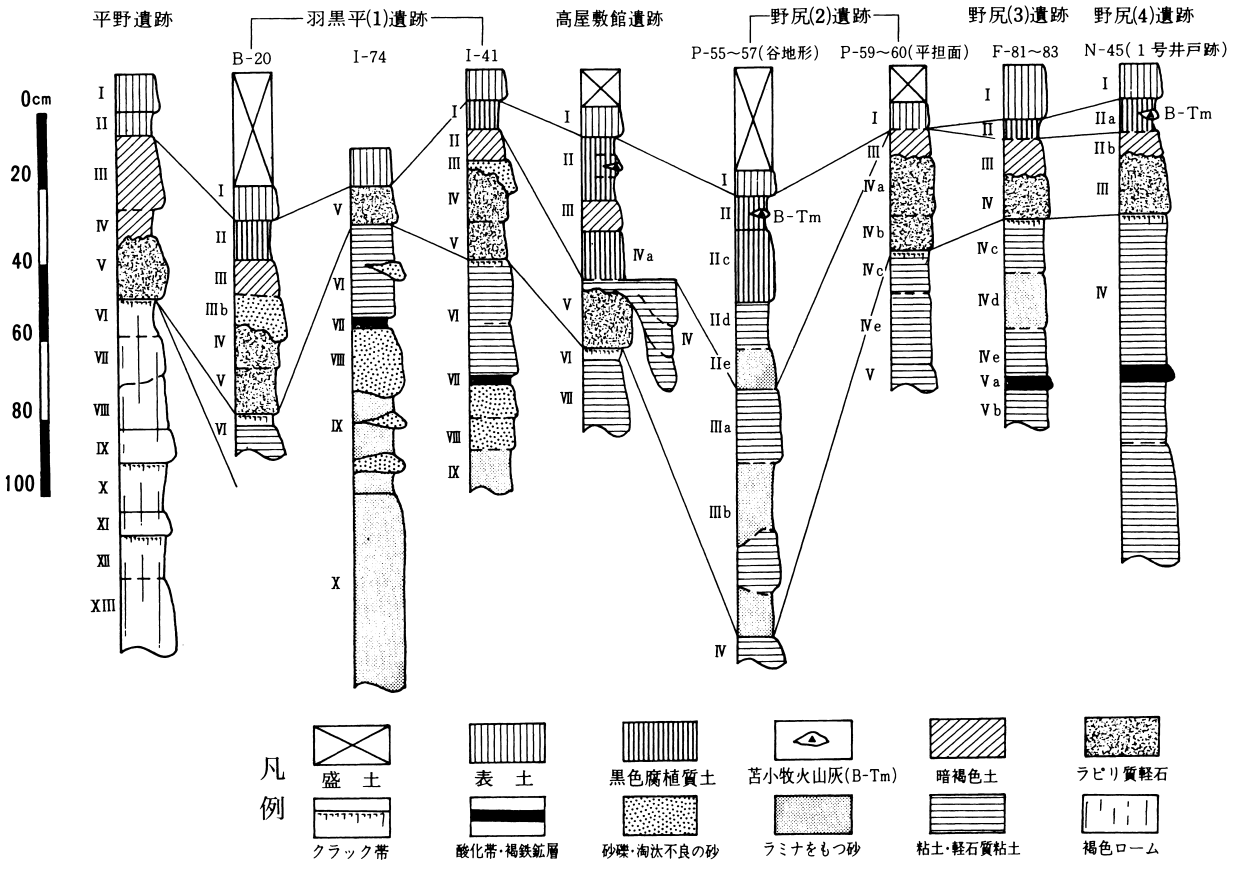
図２は浪岡周辺の地形分類図を、図３はその構成層を模式柱状図で表す。これによると、大釈迦川以西では平野部に楔状に張り出す前田野目台地が特徴的である。この台地は上述したように３段の段丘からなる。高位段丘は標高80～150m程で、砂及び粘土を主体とする前田野目層と、図の北側に主に分布する八甲田第１期火砕流堆積物からなる台地とによって構成され、平頂な丘陵地をなす。洞爺



第3図　浪岡周辺の火山灰等の層序を示す模式柱状図

火山灰を指標とする中位段丘は標高50～70m程で、南方に大きく舌状に張り出し頂部に平坦面をもつ。低位段丘へは西側が急傾斜面で東側が急崖で接する。そして、低位段丘面は標高30～60mで台地縁辺部に弧状に分布する。大釈迦川沿いでは標高40～60mと高度がやや高く、この川への傾斜面として南北に帯状に展開する。平野部側では標高30～50mと低く、開析谷の影響でやや起伏するが全体的に平野部への緩傾斜面として分布する。

これに対して、大釈迦川以東では浪岡川及び正平津川流域に展開する扇状地が特徴的である。五本松付近を扇頂部とし、北が大釈迦川沿いの徳才子、南が本郷付近を扇端部とする弧状の分布を示すが、大釈迦川、浪岡川及び正平津川によって大きく浸食される。この開析扇状地は構成層から判断して大釈迦川以西に分布する低位段丘に相当すると考える。また、開析された扇状地内には流下した火砕流堆積物による舌状台地も分布する。浪岡城跡を含めて浪岡町の中心街はこの火砕流台地上に立地する。火砕流は十和田火山起源の大不動浮石流凝灰岩(中川ほか、1972)に対比され、およそ25,000年前に津軽平野及び青森平野へと流下したものと考える。なお、大釈迦川東方における中位段丘は浪岡川以北の火山性丘陵地縁辺に断片的に点在する。段丘面の標高は90～100mであって平頂ながら平野部に向かってやや傾斜する。前田野目層を不整合に覆う段丘砂礫層の上位には褐色ロームが厚く堆積する。中位段丘の指標である洞爺火山灰については段丘構成層であるローム層最下部にて確認できなか



第4図　各遺跡内における土層の模柱状図

ったが、弘前及び青森周辺の中位段丘において確認している。

本遺跡は浪岡町の北東方約3Kmの羽黒平に立地する。調査区域は東西方向に約1kmと帯状に分布し、標高45～62mと約17mの高度差のある傾斜地である。調査区域は浪岡川流域の五本松付近を扇頂部とする、およそ20m／1000mの勾配をもつ開析扇状地をほぼ縦断する。扇端部は大釈迦川流域に分布する沖積上位面に没すると思われ、末端部には2m弱の急斜面がみられる。背後の丘陵地及び中位段丘との境界部には比高約20～30mの急崖が存在する。この扇状地は浪岡川及び正平津川によって南北に分断されるが、面全体としては浸食による起伏量も少なく平野部への傾斜面である。扇状地面を流れる小谷は急崖な側壁を有するが全体としては谷底が浅く流域の幅が広い。J－220グリッド付近で検出された埋もれた谷地形は、かつて扇状地面を網目状に流れていた小谷の一つと思われ、基本層序第Ⅱ層及び第Ⅲ層にみられる層相から判断してその後の面上を氾濫する流水によって埋積したものと考える。なお、谷地形内の覆土中には白頭山起源の苫小牧火山灰(B-Tm)の薄層が確認された。調査区域中央部の北縁には小板橋溜池があって扇状地面を流れる小谷内に築堤して堰き止めたものである。この谷の支流が調査区域100ライン付近に達する。

火砕流堆積物からなる舌状の台地もまた、ほぼ五本松付近から浪岡川流域沿いに分布し、大釈迦川を閉塞するように伸びる。火砕流台地からなる源常平から浪岡城跡にかけての勾配はおよそ10m／1000mで開析扇状地よりもかなり緩い傾斜面である。五本松付近では扇状地と火砕流台地がほぼ同じ高度を有するものと思われ、浪岡川及び正平津川流域沿いの開析扇状地面を火砕流堆積物で被覆しな

がら大釈迦川流域へと流下したと考える。火砕流堆積物の分布を考えると、一時的には大釈迦川を閉塞した可能性もある。なお、基本層序第VI層は火砕流堆積物の再堆積層と考えられ、火砕流の流下時かあるいは直後の土石流によって供給された軽石質粘土が扇状地面を被覆したものと考える。同様な堆積状況が弘前市宇田野(２)遺跡でも確認していて、谷地形を埋積する火砕流堆積物の再堆積層が中位段丘面の縁辺部を被覆している。

現在、中位段丘面及び崖下に展開する扇状地面はりんご園に、扇状地面を流れる小谷の流域内及び沖積上位面は水田に、そして火砕流台地は主に宅地として土地利用されている。

次に、本遺跡調査区域内における基本層序について記述する。調査区域は扇状地を縦断する形で東西方向に伸びているので西方の扇端部付近に位置するＢ－20グリッドでは基本層序第Ｖ層まで、扇央部寄りのＩ－41・74グリッドでは第VI層以下の各層の特徴を述べ、他グリッドで確認した各層の特徴を補足する形で進める。全体的にみると、扇端部側では砂礫質の黒色土が厚く堆積するのに対して、扇央部から扇頂部にかけては耕作による削平もあるが、やや薄くて粘質土になり軽石粒の混入が多くなる傾向をもつ。なお、模式柱状図は図４に、調査区域のセクションは図５に示した。

第Ｉ層　黒色土　10YR2/1（厚さ約15～20cm）　粘性・湿性があり、かたさ及び締まりも多少あるが全体的にはソフトな感じである。本層中には扇端部ほど淘汰不良な粗粒砂、円礫及び軽石粒（径２～10mm大）が多く含む。なお、本層上位には10～15cmと平均的な厚さをもつ耕作土がある。耕作土はかたいが締まりに欠け脆い感じがする。乾くと黒灰色に変色する。耕作により第Ｉ層を含め下位層を撹乱及び削平する。Ｉ－74グリッドで確認したところでは基本層序第IV層まで削平されている。

第II層　黒褐色土　10YR3/1（厚さ約10cm）　粘性・湿性がややあり、締まりに欠けソフトな感じがする。全体的に淘汰不良の砂礫質である。亜円礫～円礫の径10mm以下の礫及び軽石粒の混入が多い。砂礫質の要因は遺跡の立地する扇状地面を氾濫する流水によるものと思われる。ただ、扇央部付近のＨ－237グリッドではやや腐植質で粘性の大きい黒褐色土に層相変化する。砂の混入は認められない。

第III層　灰黄褐色土　10YR4/2（厚さ10～15cm）　層相変化が著しい。Ｂ－20グリッドでは全体的に砂礫質であり軽石粒の混入が目立つ。中粒砂のレンズ状の薄層があったり径10～30mm大の亜角礫～亜円礫（礫種は安山岩、シルト岩など）を多量に含んだりする。なお、下位には第IIIｂ層としてやや成層した淘汰良好な中粒砂層（厚さ約15cm）がレンズ状に堆積する。層中には砂礫層及び砂鉄層のレンズ状の薄層が数枚認められる。下位の第IV層とは明瞭な凹凸面で接する。扇央部付近では粘性の大きい暗褐色土(10YR3/3) が堆積し、軽石の粒子及びブロックを多量に混入する。漸移層としての特徴を有し、粘性・湿性があり、またかたさ及び締まりもある。なお、Ｉ－41グリッド付近では本層下位に暗黄褐色細粒火山灰が局部的に堆積する。この火山灰は女鹿沢火山灰(中川　1972) に相当すると思われるが、遺跡を含め浪岡周辺での地質調査では局部的な堆積と判断し、下位層の二次的な堆積層と考える。

第IV層　明黄褐色ラピリ質軽石層　10YR6/8（厚さ20～30cm）　緻密堅固である。黄白色～黄色の軽石粒(径５～20mm)の目立つラピリ質の細粒軽石層である。調査区域全体に平均的な厚さ

で分布し、調査での地山確認の指標となる。

第Ⅴ層　黄灰色軽石質ラピリ層　10YR6/6 (厚さ約20cm)　全体的にラピリ(砂状火山礫)が密集し緻密堅固である。局部的な堆積で凹部などにレンズ状の堆積を示すことが多い。本層及び上位の第Ⅳ層は上北地方の千曳浮石 (東北地方第四紀研究グループ、1969)、大鰐・碇ヶ関付近の碇ヶ関浮石 (山口、1993)に相当する。ただ、千曳浮石に関しては上位の第Ⅳ層のみに比定される可能性がある。およそ11,000～12,000年前に降下した火砕物と推定する。

第Ⅵ層　黄灰色軽石質粘土 (厚さ50～100cm)　本層は、中部に砂鉄のレンズを含む成層した中粒砂が堆積することから上下２層に細分した。上部の第Ⅵａ層は風化した軽石粒の混入が多く酸化の染みもみられる粘土層で、下部の第Ⅵｂ層は軽石粒が多少混入する粘土質砂層である。第Ⅵ層最上部には酸化帯が認められる。本層は浪岡川流域の舌状台地を構成する火砕流の再堆積層と考える。また、Ｍ－265グリッドでは第Ⅵ層直下に大きく波打つ酸化帯がみられ、酸化帯直上に径10～30cm大の安山岩の円礫を確認した。酸化帯下には青灰色粘土が堆積するが、起伏する第Ⅶ層上面に局部的に堆積するものと考える。

第Ⅶ層　暗灰褐色酸化帯 (厚さ約20～40cm)　粘土質でかたく締まる。淘汰不良の砂がレンズ状に堆積したり砂混じり粘土であったり層相変化が顕著である。クラックが発達する。

第Ⅷ層　暗灰褐色軽石質砂層 (厚さ約50cm)　かたく締まり、亜角礫～亜円礫の径10～30mm大の礫(礫種はシルト岩及び安山岩など)を多量に含む淘汰不良の砂層である。中部に大きく波打つ酸化の染みがみられ上下２層に細分した。上部の第Ⅷａ層は砂礫混じりの塊状粘土であり、下部の第Ⅷｂ層は砂礫を主体とする。下位層の風化再堆積層と考える。

第Ⅸ層　灰緑色中粒砂層 (厚さ40～60cm)　成層した砂層で、軽石粒の密集層及び砂礫層などの薄層を挟む。全体としてラミナに乱れが認められる。

第Ⅹ層　灰緑色砂層 (厚さ150cm以上)　成層した中粒～粗粒砂層で、軽石粒の密集層及び砂礫層の薄層を挟む。全体としてラミナに乱れが認められる。第Ⅶ層以下の各層は遺跡の立地する扇状地を構成する堆積物と考えられ、第Ⅵ層との間には堆積間隙が認められる。

引用参考文献

東北地方第四紀研究グループ　1969　「東北地方における第四紀海水準変化」　『地学団体研究会専報』　№15

中川久夫　1972　『青森県の地質』　第二部(青森県の第四系)　青森県

中川久夫・中馬教允・石田琢二・松山　力・七崎　修・生出慶司・大池昭二・高橋　一　1972　「十和田火山発達史概要」　『岩井淳一教授退官記念論文集』

岩井武彦・澤田庄一郎・大久保貢　1982　『土地分類基本調査「青森西部」』　青森県

村岡洋文・長谷紘和　1990　「黒石地域の地質」　『地域地質研究報告（５万分の１地質図幅)』　地質調査所

活断層研究会編　1991　『新編日本の活断層　分布図と資料』　東京大学出版会

山口義伸　1993　『年報ひろさき　№２』　弘前市史

第２節　歴史的環境と周辺の遺跡

「中世の里」をキャッチフレーズに町づくりを行っている浪岡町では、中世の遺跡である浪岡城跡[1]が全国的に有名である。羽黒平(１)遺跡はこの浪岡城の北東に位置している。また浪岡城跡の周辺には、北畠氏の建立と伝えられる五輪塔も存在する。[2]さらに羽黒平(１)遺跡周辺には、津軽藩藩政期に街道として賑わった「大豆坂（まめさか）通り」[3]が存在し、中世以来の歴史のある地域である。一方これまで青森県埋蔵文化財調査センターでは、東北縦貫自動車道や国道７号線の浪岡バイパス、あるいは主要地方道青森浪岡線等の建設に先立つ発掘調査を行っており、中世以前の出土資料も多数蓄積されるようになった。ここでは浪岡町教育委員会が行った発掘調査の成果等と併せて、既に発掘されている浪岡町内の遺跡を概観することにする。

１．縄文時代

この時代の遺跡としては、まず早期のものに細野遺跡がある。この遺跡は浪岡町細野地区の正平津川沿岸に位置している。晩期のものとして周知の遺跡であるが、県内、特に津軽地方では出土例が少ない貝殻文土器が出土しており、研究資料として貴重なものである。[4]今回の松山遺跡の調査でも、貝殻文土器の破片が出土している。

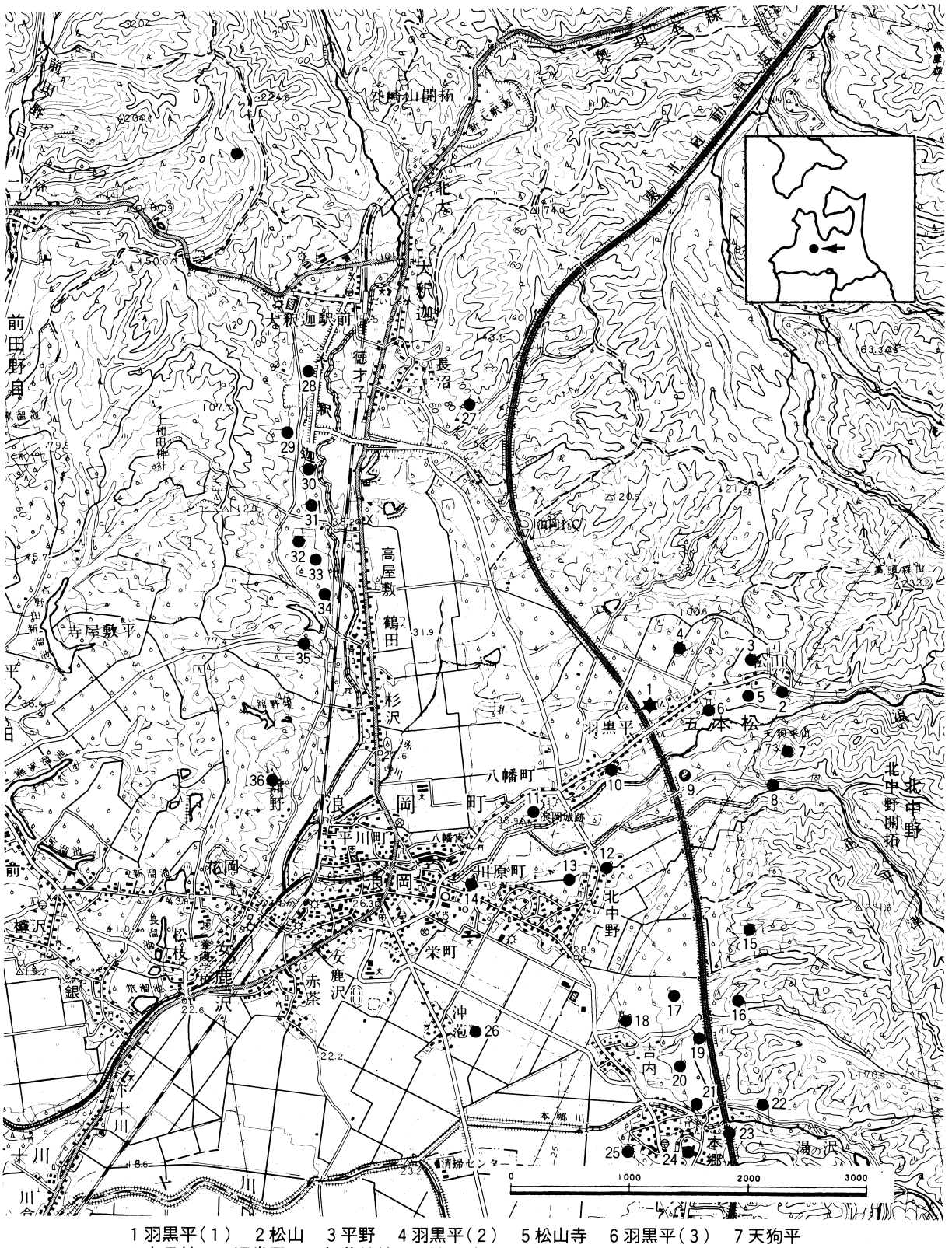
中期に該当するものとして源常平・杉の沢の両遺跡があげられる。前者は正平津川右岸に位置する、標高50～60mの平坦な段丘上にある遺跡である。ここでは、深鉢形土器を埋設した１軒の竪穴住居跡が検出されている。[5]後者は、塚森山の北西麓にあたり、浪岡町吉内地区の東方を南北に走る丘陵の西斜面に位置する。ここでも中の平Ⅲ式土器を炉に埋設した竪穴住居跡１軒が検出されている。[6]後期に該当するものとして天狗平[7]・松山[8]の２つの遺跡がある。前者は浪岡川左岸の天狗平山の麓に位置している。後者は浪岡川右岸の高頭森山からのびる丘陵上の斜面に位置し、標高約75mである。遺跡周辺の畑地を農家の人が耕作中、偶然骨片の入っている土器を発見したものである。また両遺跡からは全国的に珍しい改葬用甕棺土器が出土している。今回の松山遺跡の調査では甕棺土器の破片が見つかっており、当時の葬制に関する貴重な資料となっている。

晩期では源常平・松元[9]・細野・松山・羽黒平(１)・(３)の６つの遺跡がある。源常平遺跡では、竪穴住居跡３軒の他、50m程離れた地点で同時期のものと考えられる土坑墓30基を検出している。これは当時の生活の「場」の在り方等の問題を含めて集落構造を解明する上で大きな成果である。松元遺跡では大洞Ｃ1式土器を覆土に含む竪穴住居跡１軒、竪穴遺構１基を検出している。今回調査した松山遺跡では、小型の岩版が出土している。[10]羽黒平(１)遺跡周辺ではこれまで、土偶・土面・土器片等が表面採集されている。[11]

２．平安時代

浪岡町内で近年発掘されている遺跡は、この時期のものが最も多く、浪岡城築城以前の様子がうかがわれる。

源常平遺跡は、調査の結果竪穴住居跡72軒・土師器（坏・甕・皿・把手付土器・耳皿・鉢）・須恵器（坏・壷・甕）・鉄製品（紡錘車・鋤先・鉄鏃・刀子）が検出されている。この内竪穴住居跡２軒で、間仕切痕と板敷間、土間跡が発掘されており、住居内の構造を知る手掛かりとなるものである。



1羽黒平（1）　2松山　3平野　4羽黒平（2）　5松山寺　6羽黒平（3）　7天狗平
8春日社　9源常平　10加茂神社　11浪岡城跡　12浪岡崎（2）　13浪岡崎（1）
14川原館　15王田館　16王余魚沢（3）　17桃里　18北畠館　19杉の沢　20吉内
21中屋敷　22田の沢　23松元　24本郷八幡宮　25本郷　26沖林　27大堤沢
28山本　29野尻（1）　30野尻（4）　31野尻（2）　32野尻（3）　33高屋敷館　34山本（1）
35山本（2）　36山本（3）

第5図　周辺の遺跡

羽黒平(１)遺跡に関して、今回の調査に先行して、1978年に東北縦貫自動車道建設予定地内に該当する地域を発掘調査している。その結果、方形のプランを持つ竪穴住居跡69軒・井戸跡３基・鍛冶場遺溝２基・土坑38基を検出している。また遺物は、縄文式土器・弥生式土器・土師器（坏・耳皿・甕・鍋)・須恵器（坏・広口壷・長頸壷・甕)・鉄製品（刀子)・鉄滓が出土している。これによって羽黒平(１)遺跡は、平安時代を主体とする遺跡であることが判明した。[12] また今回の調査では鍛冶関連遺構や、竪穴住居跡の竈側に掘立柱建物跡が取り付きその外側を取り巻くように巡らされた外周溝のある遺構が６軒検出されている。[13] この掘立柱建物跡が付随した竪穴住居跡とそれらを取り巻く外周溝という遺構の組合せは、1987年に発掘調査された発茶沢(１)遺跡において、初めて１棟の建物跡と認められたものである。[14] ここでは竈側に掘立柱建物跡があり、10世紀前半から11世紀前半のものとされている。この一連の建物跡の上屋構造や用途などは未だに解明されていない。しかし最近、新潟県早出川流域に分布する鮭漁のための鮭小屋という民俗事例を紹介した研究があり[15]、今後の研究の手掛かりとなる可能性がある。県内の類例として他に、山本遺跡[16]・朝日山（３）遺跡[17]・野尻(２)遺跡[18]・野尻(３)遺跡[19]・野尻(４)遺跡[20]がある。山本遺跡では前述の建物跡の他には、ろくろ製の土師器や、五所川原窯跡群製の須恵器も出土している。

今回の松山遺跡の調査では、竪穴住居跡に外周溝を巡らした形式の建物跡が検出されている。この住居は構築後、当初の外周溝を埋め戻し、より大きな外周溝を新たに作り直しており、その一端から谷に水を流すような構造をとっている。また竈も石組みのものである。[21] 竪穴住居跡に外周溝を巡らした建物跡は、杉の沢遺跡や松元遺跡でも検出されている。

山元(３)遺跡では羽黒平(１)遺跡とは、若干相違する竪穴住居跡に掘立柱建物跡が付随した建物跡が検出されている。(外周溝が無い。)[22]

竪穴住居跡、掘立柱建物跡と外周溝の組合せの相違が、どのような原因（集落構成や生業等）から発生しているのか研究の進展が望まれるところである。

大沼遺跡は、浪岡町大沼袋地区の十川右岸に位置する低湿地帯の中に所在する。ここからは、溝跡１条・井戸跡１基・土師器（坏・甕・鍋・耳皿)・須恵器（坏・甕・壷)・木製品（下駄・曲物・箸・椀・木錘・板)・刀子・砥石・植物遺存体（胡桃・桜皮)・動物遺存体・骨（牛歯）が出土している。注目されるのは、当時の生活を類推可能な木製品や動植物遺存体と牛歯である。牛歯からは、牛を利用した耕作を行う社会が存在していた可能性があると考えられる。さらに、「夫」という「夷」の異体字をヘラ書きした土師器も出土しており、平安時代の大和朝廷と津軽地域を比較する貴重な史料となっている。[23]

最後に、浪岡町内の当該期の遺跡と五所川原窯跡群から、須恵器片が多数出土している。五所川原窯跡群が近くに位置しており、両者の関係の究明も今後大いに期待されるところである。

（七戸　将光）

注

(１) 浪岡城跡発掘調査報告書『浪岡城Ⅰ～Ⅹ』浪岡町教育委員会　1979年～1989年
　浪岡町歴史資料館『浪岡城―中世城館の復元―』　1990年

(２) 青森県立郷土館調査報告第27集歴史-3『青森県中世金石造文化財』青森県立郷土館　1990年

(３) 青森県「歴史の道」調査報告書『大豆坂通り』青森県立郷土館　1983年

(4) 杉山武「青森県浪岡町細野遺跡出土の早期貝殻文土器・石器」『奥南第３号』奥南考古学会 1984年　以下細野遺跡について言及する場合は本論文による。尚、晩期に相当する遺構・遺物については、昭和29年度の日本考古学協会要旨を参照のこと。
(5) 青森県埋蔵文化財調査報告書第39集『源常平遺跡発掘調査報告書－東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査』青森県教育委員会　1978年　以下源常平遺跡について言及する場合は本報告書による。
(6) 青森県埋蔵文化財調査報告書第45集『浪岡町杉の沢遺跡発掘調査報告書－東北縦貫自動車関係－』青森県教育委員会　1979年　以下杉の沢遺跡について言及する場合は本報告書による。
(7) 笠井新也「陸奥国発見の石器時代の墳墓に就いて」『考古学雑誌第九巻第二号』　1918年
(8) 浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書『松山遺跡』浪岡町教育委員会　1980年
(9) 青森県埋蔵文化財調査報告書第46集『松元遺跡発掘調査報告書－東北縦貫自動車建設に係る埋蔵文化財発掘調査－』青森県教育委員会　1979年
(10) 平成５年度青森県埋蔵文化財調査報告会配付資料青森県埋蔵文化財調査センター1994年１月８日
(11) 川角寅吉「青森県羽黒平より新たに発見した土偶」『人類学雑誌第37巻第５号』　1922年
鈴木克彦「風韻堂コレクションから№１縄文時代の土製仮面(土面)について」『青森県立郷土館だよりVol.10№１』　1979年
(12) ①青森県埋蔵文化財調査報告書第44集『羽黒平遺跡－東北縦貫自動車道路建設予定地内埋蔵文化財発掘報告書－』青森県教育委員会　1979年
②浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第２集『羽黒平(１)遺跡－五本松地区樹園地農道整備事業に係わる緊急発掘調査』浪岡町・浪岡町教育委員会　1981年
(13)　(10)に同じ
(14) 青森県埋蔵文化財調査報告書第120集『発茶沢(１)遺跡Ⅴ』青森県教育委員会　1989年
(15) 菅豊「竪穴ノ遺風今尚各地ニ存セルカ」『国立歴史民俗博物館研究報告第48集』　1993年
(16) 青森県埋蔵文化財調査報告書第105集『山本遺跡－一般国道７号浪岡バイパス建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』青森県教育委員会　1987年
(17) 青森県埋蔵文化財調査報告書第152集『朝日山遺跡Ⅱ－東北電力株式会社新青森変電所新設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』青森県教育委員会　1994年
(18)　(10)に同じ
(19) 高屋敷館、野尻(２)・(３)・(４)、羽黒平(１)、平野遺跡遺物展示会及び現地見学会配付資料『平安時代の浪岡』青森県埋蔵文化財調査センター1994年11月５日
(20)　(19)に同じ
(21)　(10)に同じ
(22) 青森県埋蔵文化財調査報告書第159集『山元(３)遺跡－浪岡バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』青森県教育委員会　1994年
(23) 浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第４集『大沼遺跡発掘調査報告書－平安時代の低湿地遺跡の調査』浪岡町教育委員会　1990年

第Ⅲ章　C区の調査

第1節　C区の概要

羽黒平（1）遺跡は東北自動車道と主要地方道青森・浪岡線に分断されている。今回の主要地方道青森・浪岡線建設事業に先立つ発掘調査では、調査区を便宜的にA～Dの4区に区分している。平成5年度の発掘調査では東北自動車道を境に西側をA区、東側をB区とした。今回報告する平成6年度の発掘調査ではA区のさらに西側をC区、B区のさらに東側をD区としている。

C区からは、平安期の竪穴住居跡9軒、溝跡19条、土坑59基、井戸1基が検出されている。これらの内、11条の溝跡は住居跡を取り囲む外周溝で、4基の土坑はそれに付随するものである。

平安期以外の遺構としては溝跡9条が確認されている。溝跡の中には流路に沿うように木の小枝を敷き詰めたものがある。これらは近世以降の粗朶暗渠と推測される。

また、平安期のものとして扱った土坑の中には、出土遺物がなく、時期決定の決め手を欠くものが含まれる。

（川口　潤）

第2節　平安時代の遺構と遺物

前年度の調査も含めて最も西に位置する住居跡はC区第1号住居跡であるが遺存状態は極めて悪い。遺構として最も西に位置するのはC区第2号溝跡である。平安時代の遺構はA区に近い東側ほど多く、西側にいくほど少なくなる。集落の中心部はA区からB区にかけてのようである。

第1号住居跡

［位置］　H－78グリッド付近において確認されている。

［重複］　第10号溝跡と重複している。本住居跡の方が古いものと思われるが明確ではない。

［平面形・規模］　周溝の一部のみで確認された住居跡なので全体の規模は不詳である。主軸方向はS－29度－Eになるものと思われる。

［壁・床面・周溝］　住居跡西壁から東壁にかけての周溝が検出されているのみである。壁は不明瞭であるが、もともと掘り込みは浅かったものと思われる。床面は平坦だったものと思われるが、大半は削平により失われている。

［柱穴］　確認されていない。

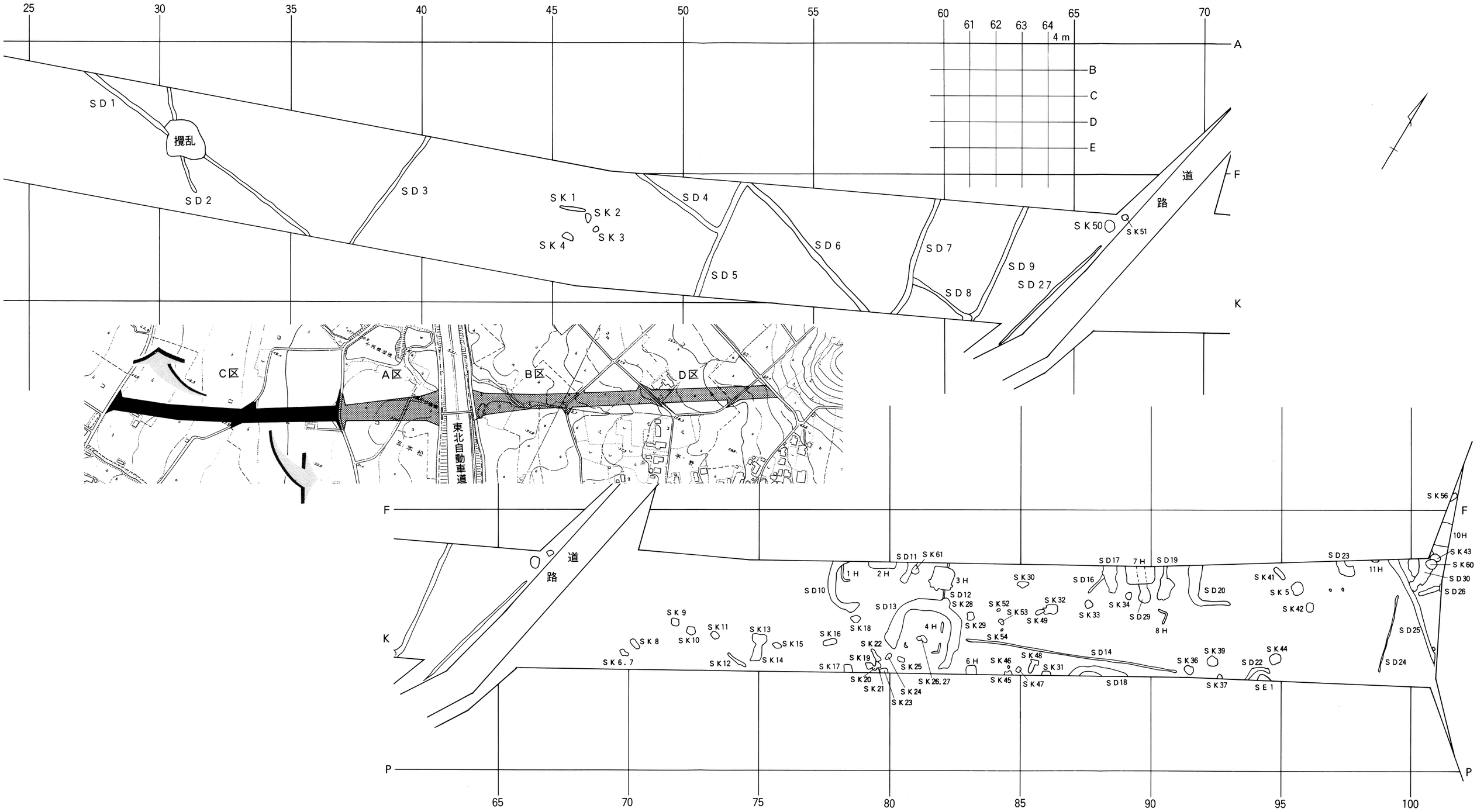
［カマド］　削平されたようである。

［外周溝］　確認されていない。

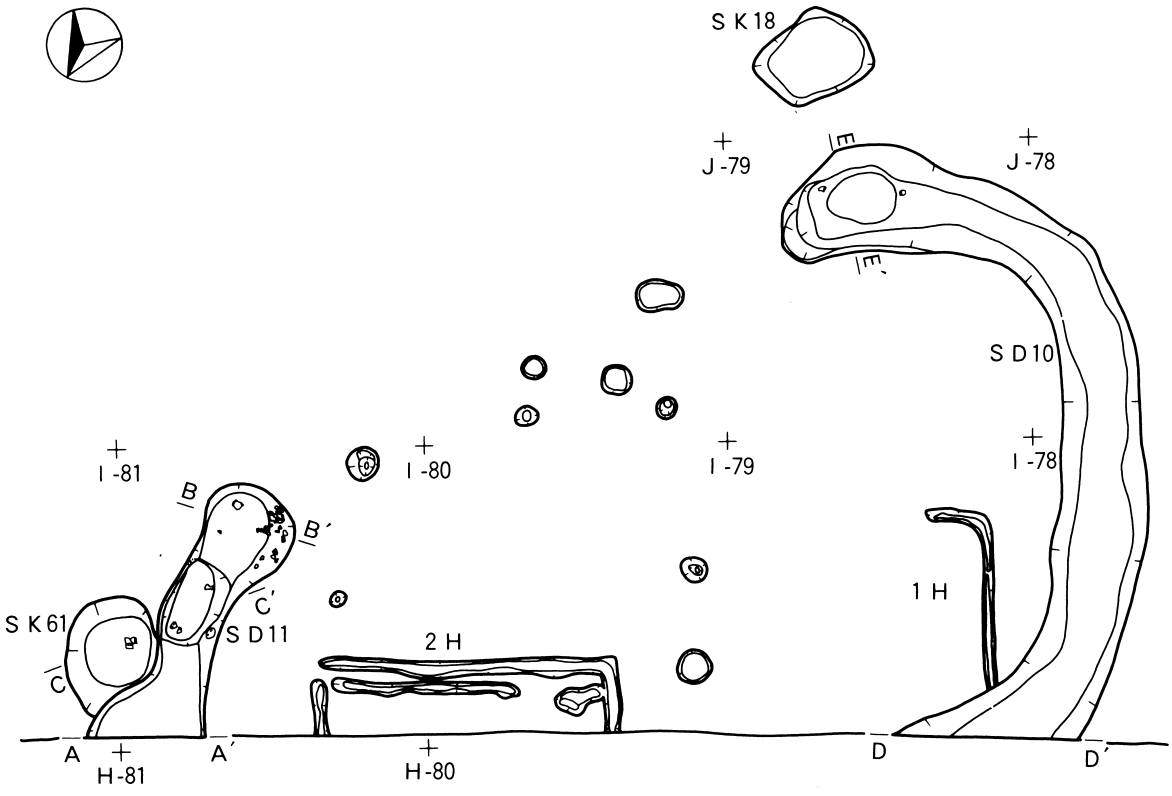
［関連土坑］　確認されていない。

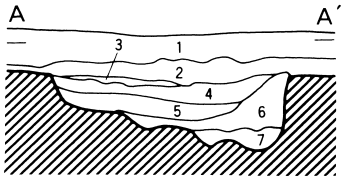
［付随掘立柱建物跡］確認されていない。

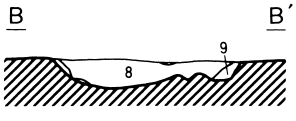
［遺物］　出土していない。

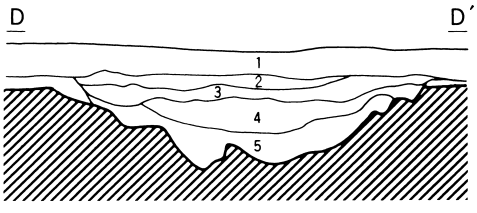

25
30
35
40
45
50
55
60
61
62
63
64
65
70
4 m
A
B
C
D
E
F
K
SD1
攪乱
SD2
SD3
SK1
SK2
SK3
SK4
SD4
SD5
SD6
SD7
SD8
SD9
SD27
SK50
SK51
道
路
C区
A区
B区
D区
東北自動車道
SK56
10H
SK43
SK60
SD30
SD26
SD23
11H
SD25
SD24
SD22
SE1
SK44
SK37
SK39
SK36
SD18
SD14
SK31
SK47
SK45
SK46
SK48
SK54
SK49
SK53
SK52
SK32
SK33
SK34
SD29
SD16
SD17
7H
SD19
SD20
SK30
SK41
SK5
SK42
SD11
SK61
1H
2H
3H
SD10
SD12
SK28
SD13
SK29
4H
SK18
SK16
SK22
SK19
SK25
SK20
SK21
SK24
SK23
SK26.27
6H
SK17
SK9
SK8
SK10
SK11
SK13
SK15
SK12
SK14
SK6.7
65
70
75
80
85
90
95
100

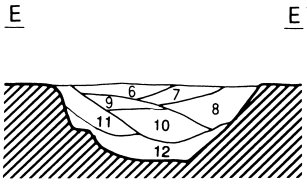
第6図　C区遺構配置図











SD11

1層　表土

2層　10YR4/4　褐色土主体　黒褐色土(10YR2/2)20%混入。ローム粒10%混入。

3層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム粒5%混入。

4層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム中粒40%混入。

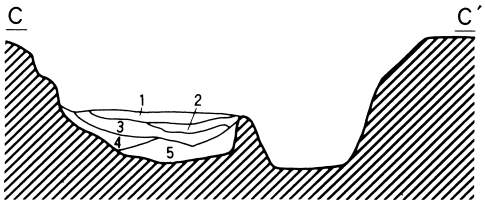
5層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム中塊40%混入。軽石粒10%混入。

6層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム中塊25%混入。

7層　10YR3/4　暗褐色土主体　黒褐色土(10YR2/2)10%混入。ローム中塊20%混入。軽石中粒5%

8層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム中粒5%混入。炭化物粒1%混入。

9層　10YR6/6　明黄褐色土主体　黒褐色土(10YR2/3)30%混入。



SK61

1層　10YR3/1　黒褐色土主体

2層　10YR3/2　黒褐色土主体　黄橙色土(10YR8/6)10%・明黄褐色土(10YR7/6)10%混入。

3層　10YR8/8　黄橙色土主体　黒褐色土(10YR3/1)10%混入。

4層　10YR7/2　にぶい黄橙色土主体　黒褐色土(10YR3/2)5%混入。

5層　10YR6/3　にぶい黄橙色土主体　黒褐色土(10YR3/2)5%混入。

SD10

1層　表土

2層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム粒5%混入。

3層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム中粒10%・ローム中塊20%混入。

4層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム中粒10%・ローム中塊10%混入。

5層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム大塊50%混入。

6層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム粒10%混入。炭化物粒1%混入。

7層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム中粒20%混入。

8層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム中粒20%混入。炭化物粒1%混入。

9層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム粒5%混入。炭化物中粒1%混入。

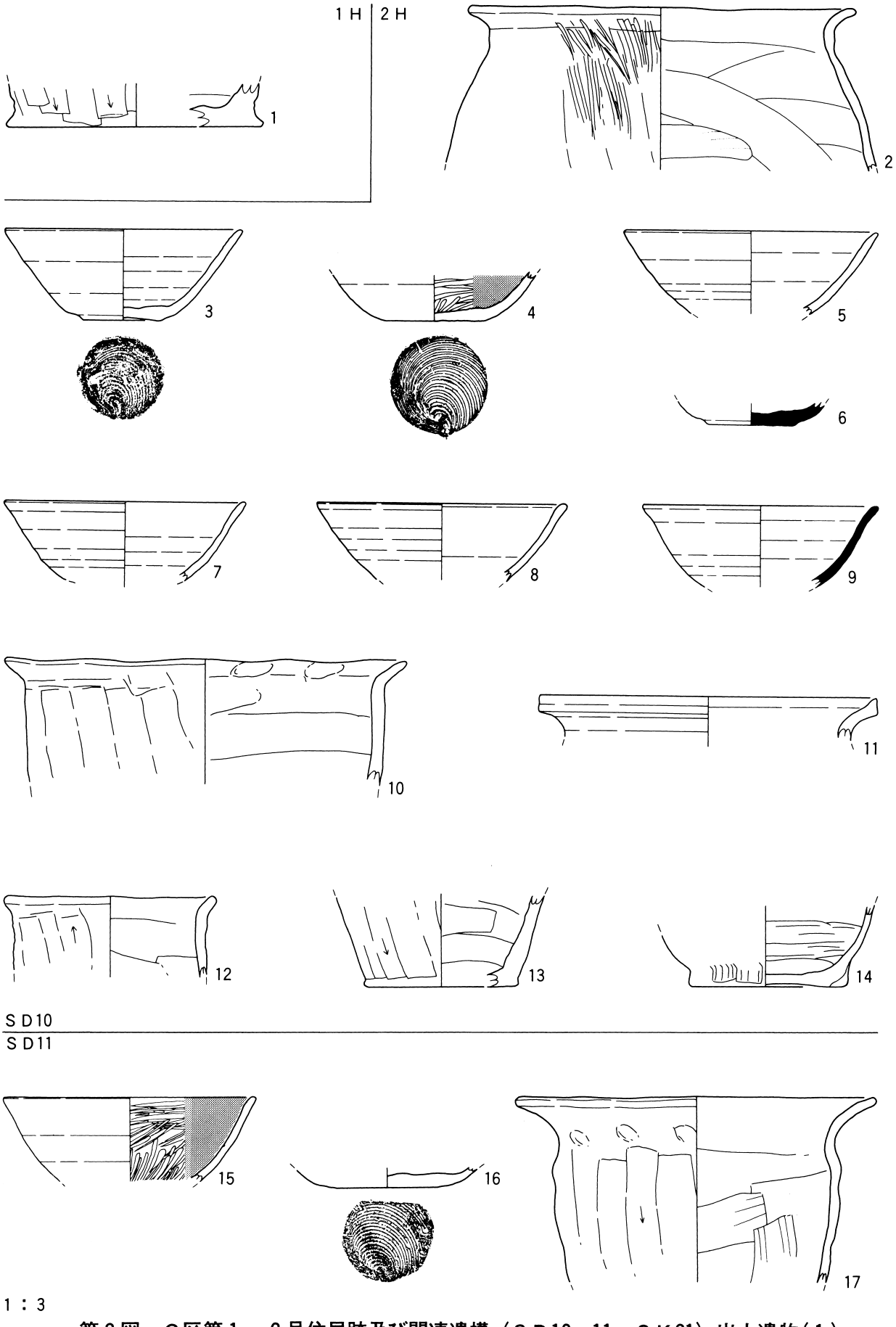
10層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム中粒10%・ローム中塊20%混入。炭化物中粒5%混入。軽石中塊5%混入。

11層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム粒5%混入。炭化物粒1%混入。

12層　10YR6/8　明黄褐色土主体　暗褐色土(10YR3/4)40%混入。

1：100（平面）
1：50　（断面）

第7図　C区第1．2号住居跡及び関連遺構（SD10．11　SK61）



1：3

第8図　C区第1．2号住居跡及び関連遺構（SD10．11　SK61）出土遺物(1)

第２号住居跡（関連遺構ＳＤ10、11、ＳＫ61）

［位置］　Ｈ－79グリッド付近において確認されている。

［平面形・規模］　住居跡の大半が調査区外であるため全貌は不詳であるが、東西約4mを測る。一辺４ｍ程度の方形であったものと思われる。主軸方向はＳ－29度－Ｅである。

［壁・床面・周溝］　検出されている範囲内においてみる限り、ほぼ全周に周溝が巡っていたものと推測される。南壁側の周溝が二重になっていることから、拡張された住居跡であった可能性がある。

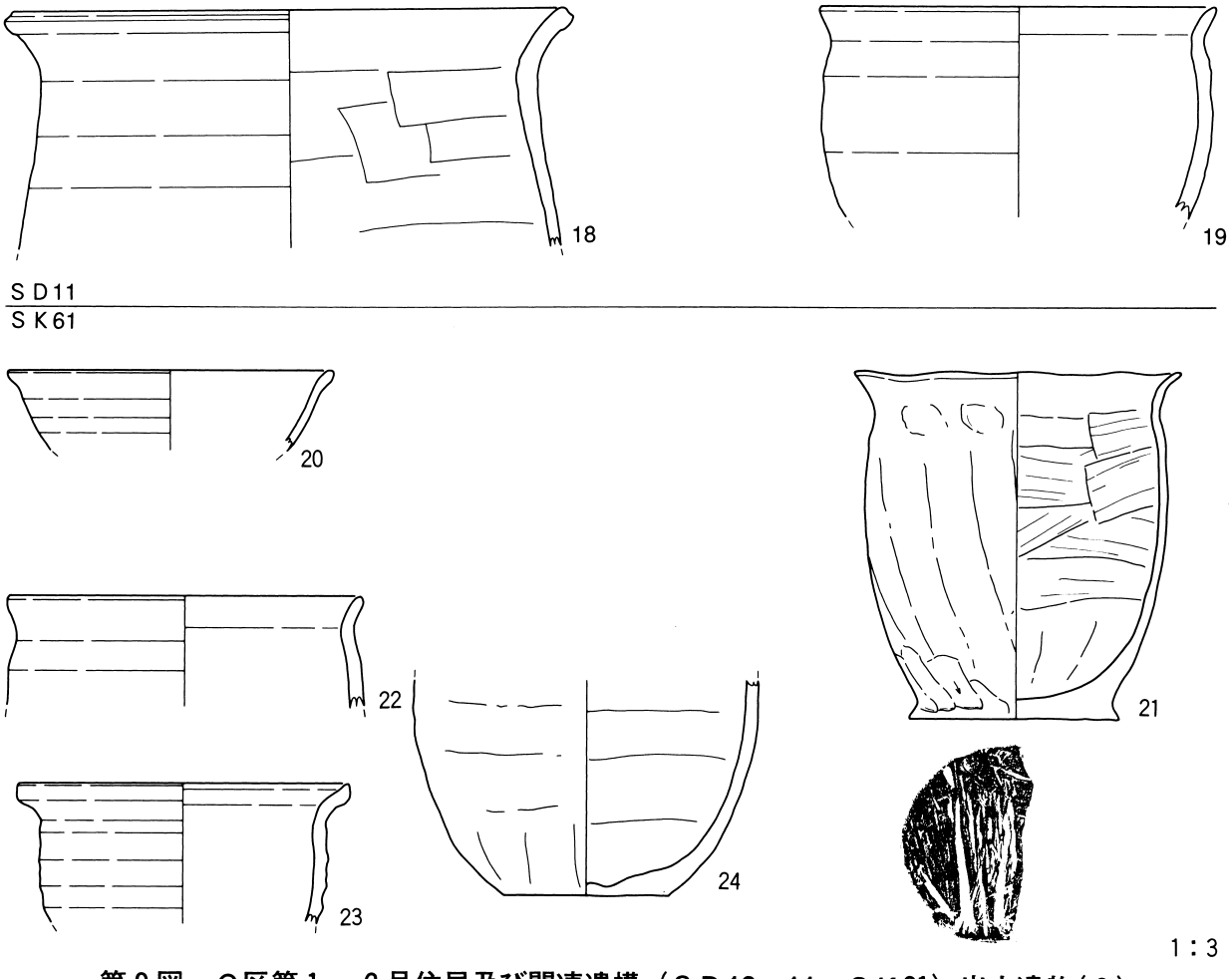
［カマド］　削平されたものと思われる。住居内の内側の周溝が一部とぎれるが、そこにカマドがあった可能性も考えられる。

［外周溝］　ＳＤ10、11が本住居跡に伴う外周溝と考えられるが、ＳＤ10は位置的にみて本住居跡に伴わない可能性もある。いずれにしろ北側の大半が調査区外であるため断定できない。

［関連土坑］　ＳＫ61が本住居跡に関連する土坑であろうと思われる。ＳＤ11に隣接するが両者に明確な新旧関係は認められない。また、ＳＤ11の先端も掘り込みが深くなっており、土坑状を呈する。

［付随掘立柱建物跡］　住居跡に付随する掘立柱建物跡は明確には確認できなかった。ただし、住居跡、南壁の南側一帯に柱穴状の小ピットが複数検出されているので、付近に掘立柱建物跡があった可能性も考えられる。

［遺物］　住居跡内からの遺物出土数は少なく、図示できるものは２点のみである。遺物の多くは外周溝及び土坑内から出土している。



第９図　Ｃ区第１．２号住居及び関連遺構（ＳＤ10．11　ＳＫ61）出土遺物（２）

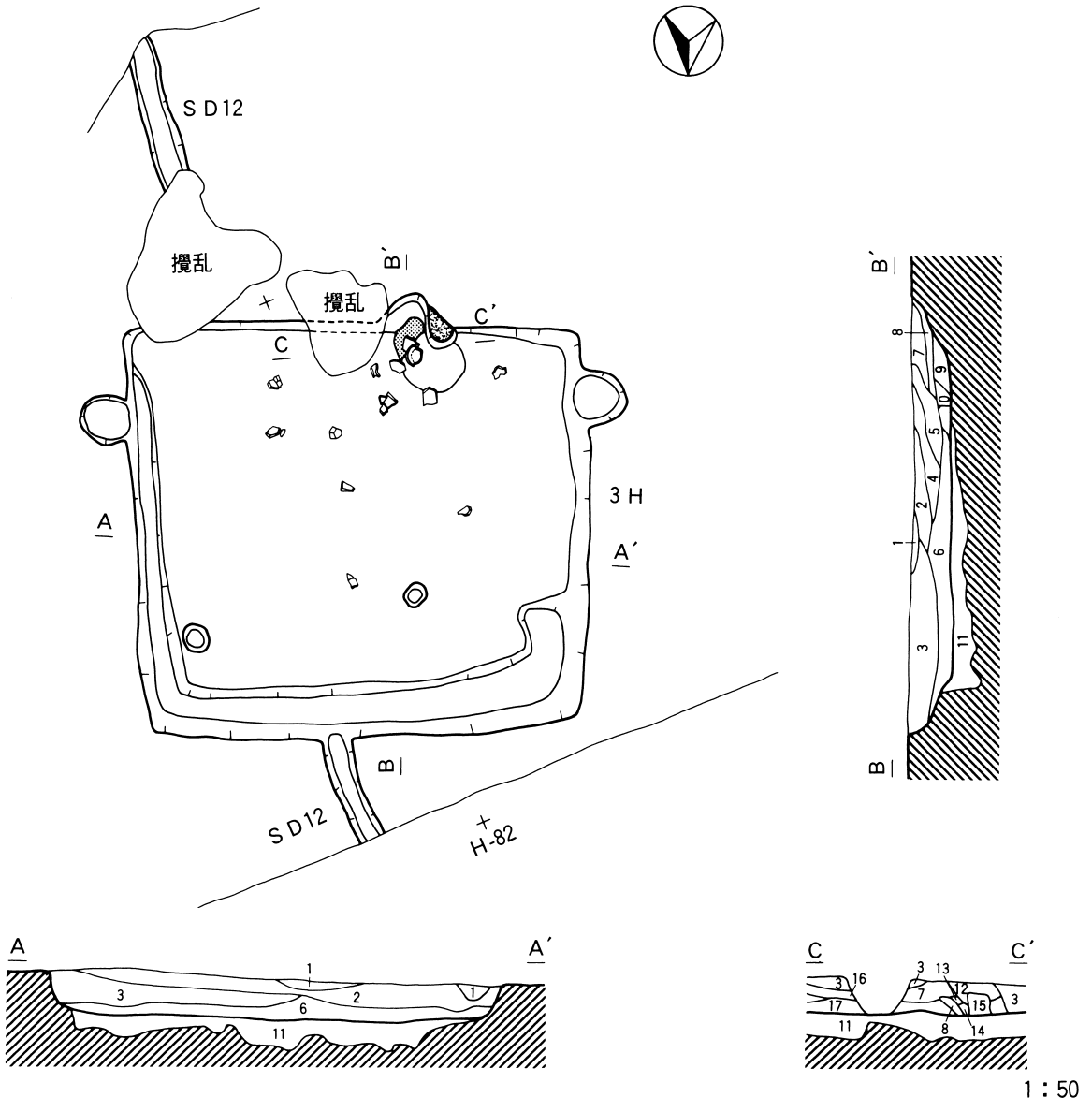
第３号住居跡

［位置］　Ｈ～Ｉ－81グリッドにおいて確認されている。

［重複］　ＳＤ12と重複している。新旧関係は不明瞭であるが、本住居跡の方が古いものと思われる。

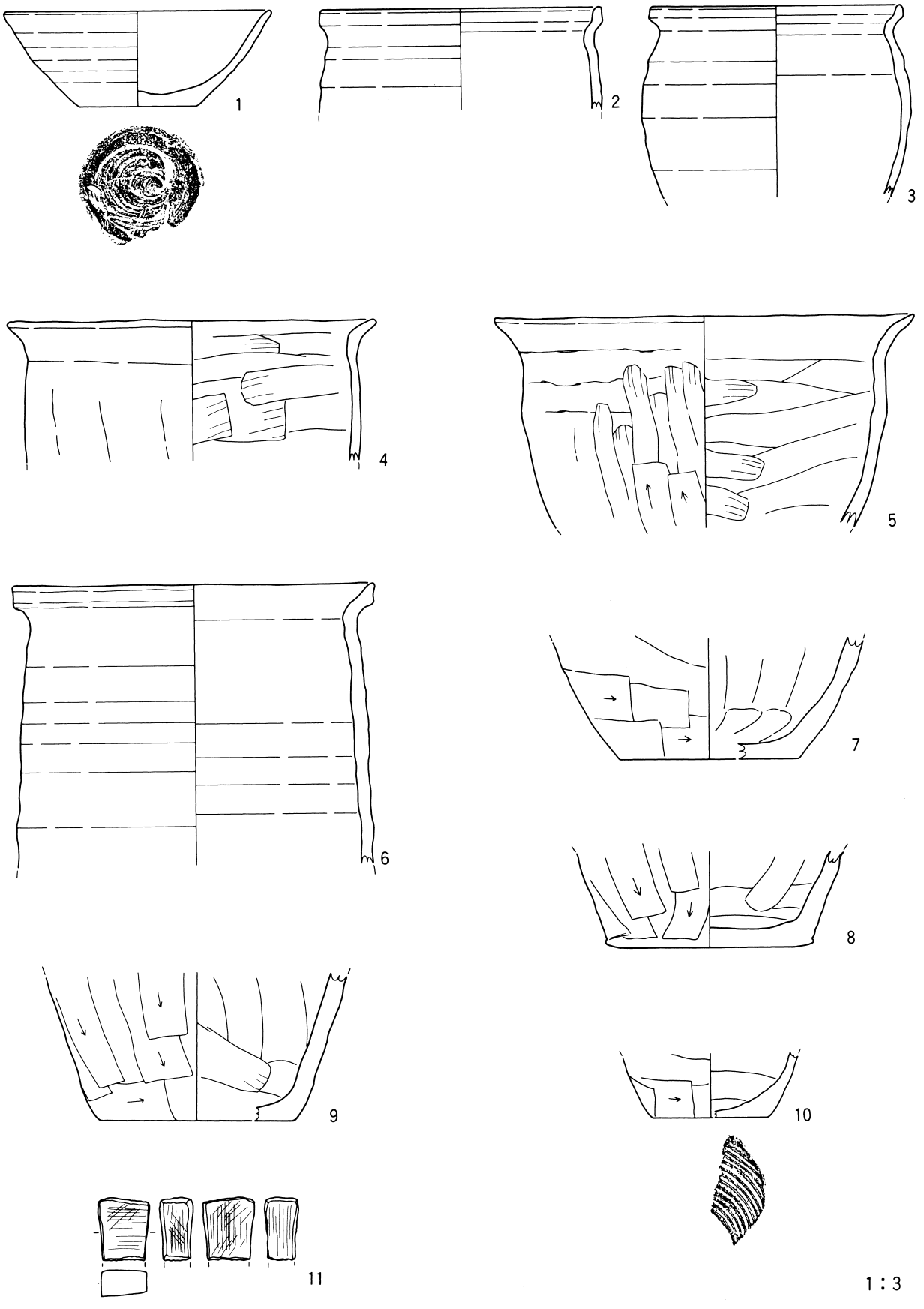
［平面形・規模］　平面形は東西にやや長い長方形で、規模は東西3.2m、南北3.0mを測る。床面までの深さは約30㎝である。主軸方向はＳ－14度－Ｅである。

［壁・床面・周溝］　貼床により、床面は平坦に整形されている。明確な周溝は確認されていない。



1層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム粒１％混入。
2層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム大粒１％・ローム粒１％混入。
3層　10YR1.7/1　黒色土主体　ローム中塊１％・ローム粒１％混入。
4層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム中粒10％混入。
5層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム粒１％混入。粘性あり。
6層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム大粒20％・ローム粒10％混入。
7層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム粒１％混入。焼土層。
8層　10YR4/6　褐色土主体　暗褐色土(10YR3/3)10％・ローム粒10％混入。焼土層。焼土は一部塊状となる。
9層　2.5YR4/6　赤褐色土主体　焼土層。黒色土10％含む。
10層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム粒１％・焼土１％・白色粘土多量に含む。
11層　10YR6/6　明黄褐色土主体　ローム層。黒褐色土(10YR2/3)20％まだらに混入。粘性あり。
12層　10YR4/4　褐色土主体　ローム大塊30％混入。
13層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム粒１％・白頭山ブロック混入。
14層　10YR3/4　暗褐色土主体　にぶい黄褐色土(10YR4/3)20％・白色粘土混入。
15層　10YR5/6　黄褐色土主体　褐色土(10YR4/6)20％・にぶい黄褐色土(10YR4/3)10％・白色粘土まじりロームブロック混入。粘性あり。
16層　10YR4/6　褐色土主体　にぶい黄褐色土(10YR4/3)20％・ローム粒１％混入。
17層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム中塊10％混入。

第10図　Ｃ区第３号住居跡及び関連遺構（ＳＤ12）



第11図　C区第3号住居跡出土遺物

床面から壁面への立ち上がりは直角的ではなく、北壁から東壁にかけては特に緩く立ち上がっている。外周溝をもつ住居跡に比べると掘り込みが深い。

［柱穴］　住居跡東壁、西壁の南よりにそれぞれ１基ずつ認められる。住居内にも柱穴状の小ピットが２基存在するが、柱穴か否かは不明確である。

［カマド］　住居跡南壁のやや西よりに確認されている。ソデの一部と思われる粘土や火床面が検出されている。

［外周溝］　本住居跡に伴う外周溝はなかったものと思われる。

［関連土坑］　確認されていない。

［付随掘立柱建物跡］　本住居跡に付随する掘立柱建物跡はなかったものと思われる。

［遺物］　カマド周辺を中心に土師器坏、甕などの破片が出土している。小片のため図示できないが、この他に須恵器甕の破片が出土している。

第４号住居跡（関連遺構ＳＤ13、ＳＫ28）

［位置］　Ｊ～Ｋ－80～82グリッドにおいて確認されている。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　ほとんど削平されており全貌は不詳であるが、一辺約3.5m程度の方形だったものと思われる。主軸方向はＳ－16度－Ｅである。

［壁・床面・周溝］　周溝は東壁から南壁にかけて断続的に確認されている。床面は大部分が削平されているため遺存状態は悪いがほぼ平坦だったようである。壁面はほとんど検出されていないが、もともと掘り込みが浅かったようである。

［柱穴］　住居跡の東壁上の南よりと、西壁想定線上の南よりに１基ずつ確認されている。位置的には第３号住居跡と類似している。他にも住居跡の内外に柱穴状の小ピットが確認されているが柱穴になるものかどうかは不明である。

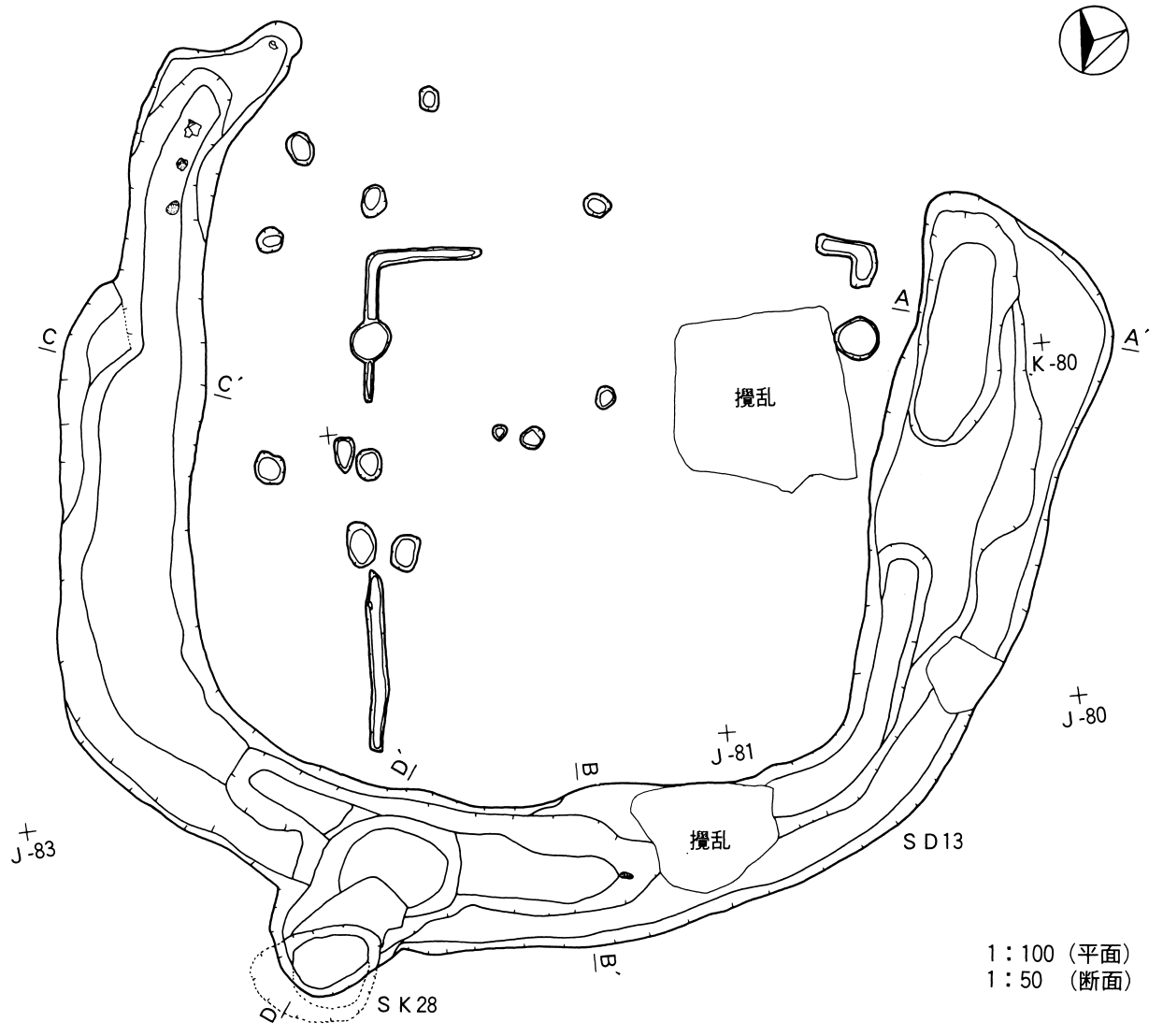
［カマド］　削平されたものと思われる。

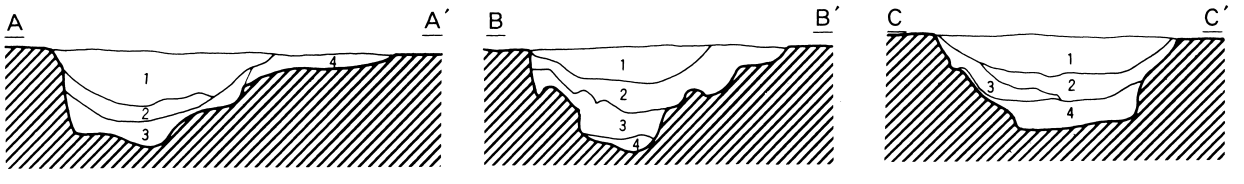
［外周溝］　ＳＤ13が本住居跡に伴う外周溝と思われるが断定できない。溝は一旦埋め戻された後、再び掘り返されたものと思われるが、掘り返し前の状態をそのまま復元したのではなく、ほぼ重複するように掘り返しながらも平面的に若干のずれが生じている様子が伺える。深さは最深部で約90cmである。

［関連土坑］　ＳＤ13の北側中央付近にＳＫ28が確認されている。堆積状況から外周溝掘り返し時に同時に掘られた土坑であろうと思われる。

［付随掘立柱建物跡］　外周溝が確認されていることから、掘立柱建物跡も付随していた可能性が考えられるが、検出することはできなかった。

［遺物］　住居内からは図示できる遺物は出土していない。ＳＤ13及びＳＫ28内からは多数の遺物が出土している。ＳＤ13内では特に東側の先端部付近から多く出土している。





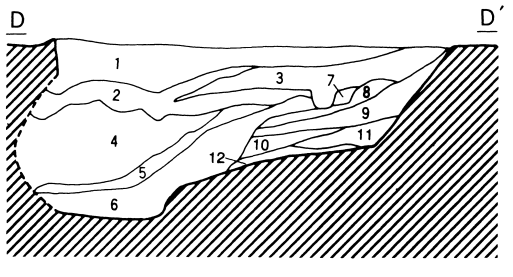
SD13

1層　10YR4/4　褐色土主体　ローム中粒10%・ローム中塊15%・炭化物粒5%混入。

2層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム粒10%・ローム中塊5%混入。

3層　10YR6/6　明黄褐色土主体　ローム層。褐色土(10YR4/4)40%混入。

4層　10YR6/8　明黄褐色土主体　ローム層。褐色土(10YR4/4)10%混入。



SK28・

1層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム中粒10%・ローム小塊10%・炭化物粒2%混入。

2層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム大粒10%・炭化物3%混入。

3層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム小塊30%・炭化物中粒3%混入。

4層　10YR4/4　褐色土主体　黒褐色土(10YR2/2)10%混入。ローム大塊40%混入。

5層　10YR2/2　黒褐色土主体　暗褐色土(10YR3/4)40%混入。ローム大粒10%混入。

6層　10YR5/8　黄褐色土主体　ローム層。にぶい黄褐色土(10YR5/4)10%・明黄褐色土(10YR6/6)10%・黒褐色土(10YR2/2)20%混入。

7層　10YR4/4　褐色土主体　ローム粒40%混入。

8層　10YR2/3　黒褐色土主体　褐色土(10YR4/6)15%混入。ローム粒5%混入。

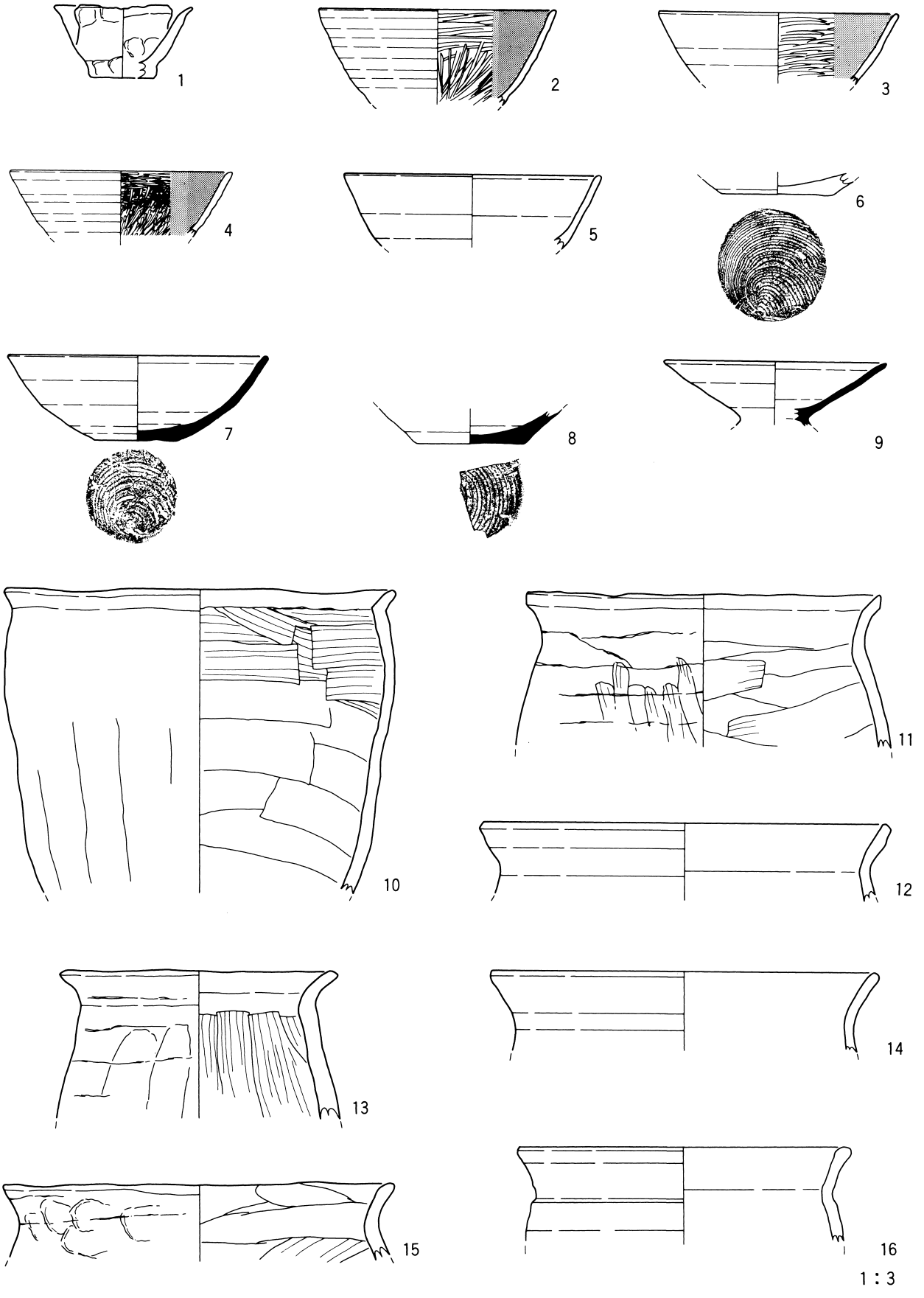
9層　10YR3/4　暗褐色土主体　黒褐色土(10YR2/3)10%混入。ローム中粒10%・ローム中塊15%混入。

10層　10YR5/4　にぶい黄褐色粘土主体　黒褐色土(10YR2/2)5%・黄褐色土(10YR5/8)30%混入。

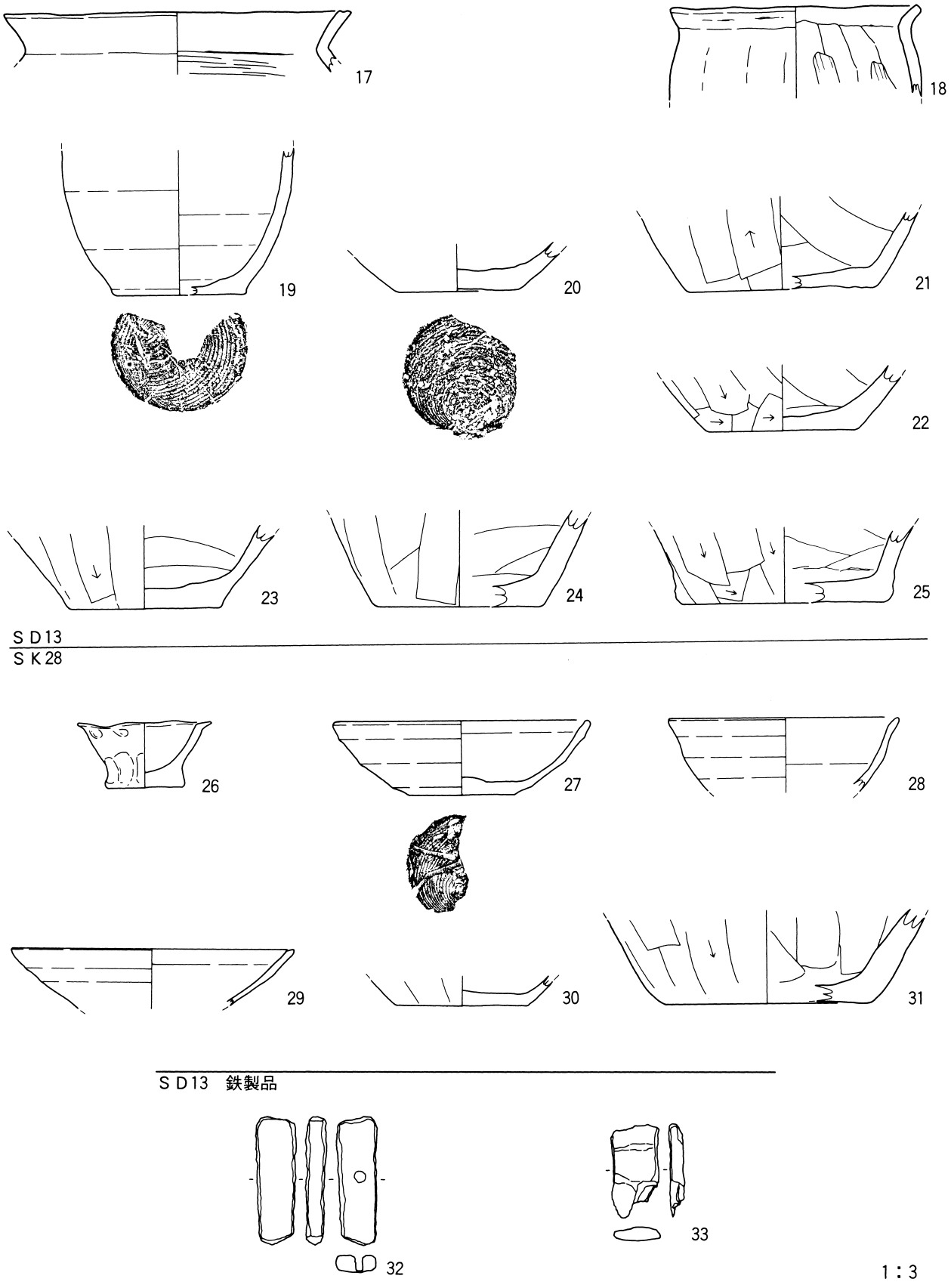
11層　10YR3/4　暗褐色土主体　黒褐色土(10YR2/2)10%混入。ローム中粒20%混入。

12層　10YR5/6　黄褐色土主体　黒褐色土(10YR2/2)10%・明黄褐色土(10YR6/6)15%混入。

第12図　C区第4号住居跡及び関連遺構（SD13　SK28）



第13図　C区第4号住居跡関連構（SD13　SK28）出土遺物(1)



第14図　C区第4号住居跡関連遺構（SD13　SK28）出土遺物(2)

第６号住居跡

［位置］　Ｌ－83グリッド付近において確認されている。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　南側の大半が調査区外であるため全貌は不詳であるが、東西は約２ｍを測る。ほぼ方形であったものと推定される。主軸方向はＳ－29度－Ｅである。

［壁・床面・周溝］　床面は若干の凹凸がみられるものの比較的平坦である。周溝は検出されていない。壁面は緩く外傾しながら立ち上がる。

［柱穴］　確認されていない。

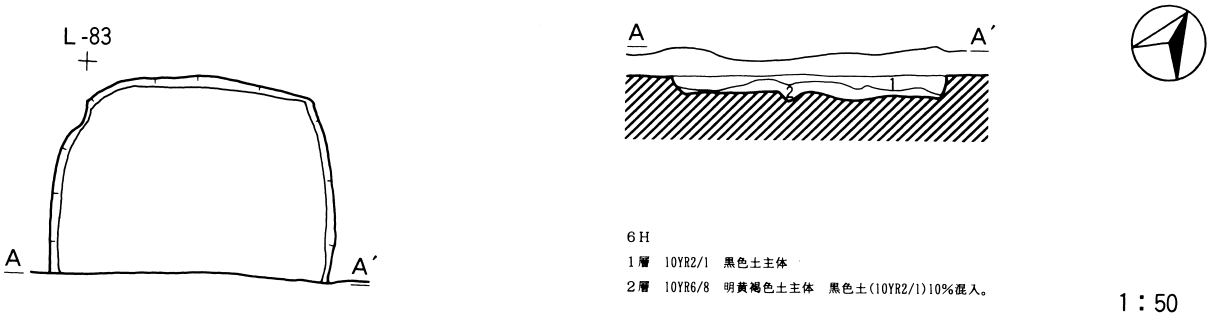
［カマド］　確認されていない。

［外周溝］　付随する外周溝はなかったものと思われる。

［関連土坑］　確認されていない。

［付随掘立柱建物跡］　南側が調査区外にかかるため断定できないが、なかったものと思われる。

［遺物］　小片のため図示できる遺物はないが、土師器甕等の破片が出土している。



第15図　Ｃ区第６号住居跡

第７号住居跡（関連遺構ＳＤ17、19）

［位置］　Ｈ－89～90グリッド付近において確認されている。

［重複］　ＳＤ29が重複している。本住居跡の方が新しいものと思われる。

［平面形・規模］　北側が調査区外にかかるため全体が検出されているわけではないが、東西約3.5ｍを測る。平面形はほぼ方形になるものと思われる。主軸方向はＳ－28度－Ｅである。

［壁・床面・周溝］　かなり削平を受けているが、床面は辛うじて遺存している。周溝は全周に巡っていたようである。

［柱穴］　住居跡南壁の両端に検出されている。北壁の両端にも柱穴の存在が予想されるが、調査区外であるため確認できない。

［カマド］　ほとんど削平されているが、火床面が残存している。住居跡南壁の西寄りに位置する。火床面上にはカマドの構築材の一部と思われる人頭大の礫が検出されている。

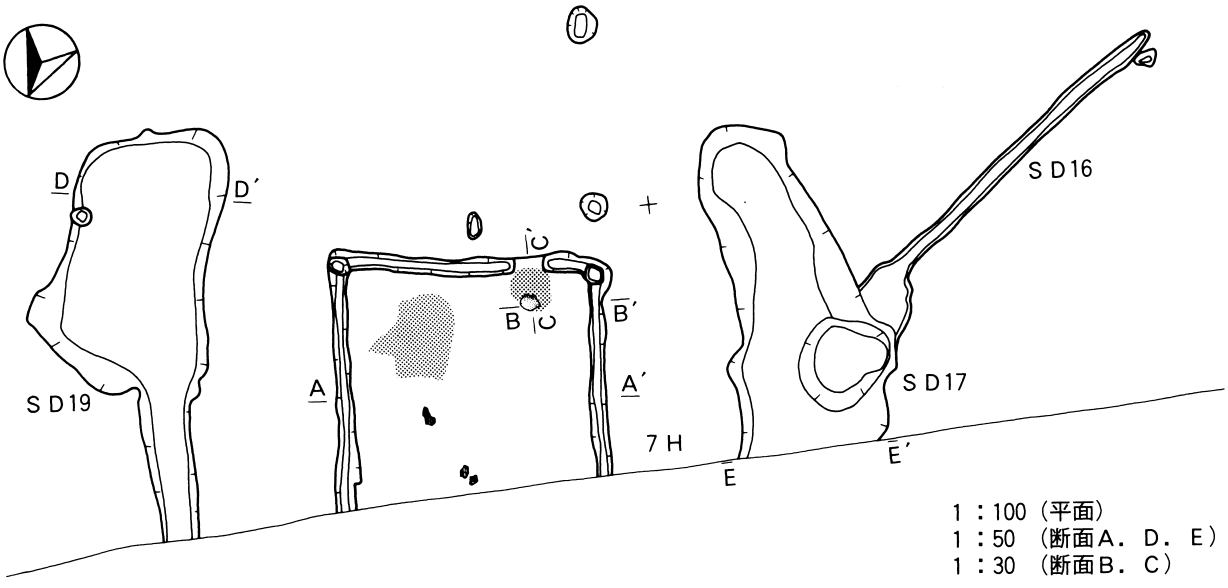
［外周溝］　ＳＤ17、19が本住居跡に伴う外周溝であろうと思われる。本来連続するものである可能性が高いが、調査区外にかかるため検証できない。ＳＤ17にはＳＤ16が重複するが切り合い関係は明

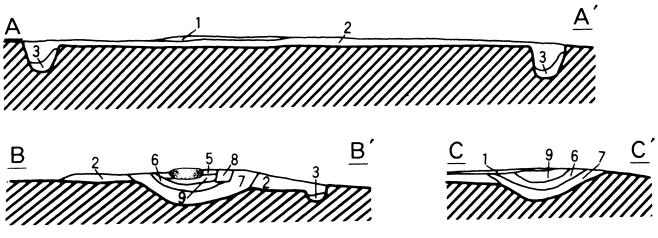
確ではなく、後者が前者に合流するものであることも考えられる。

［関連土坑］　独立した土坑ではないが、ＳＤ17の一部と、ＳＤ19の先端部には土坑状の掘り込みがみられる。

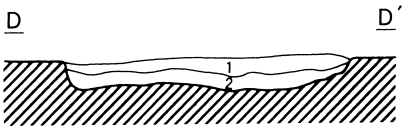
［付随掘立柱建物跡］　明瞭には検出されなかったが、住居跡南壁の南側に柱穴状の小ピットが３基検出されている。これらは位置的にみても掘立柱建物跡の柱穴であった可能性が高い。

［遺物］　住居跡及び外周溝から土師器、須恵器の坏、甕などが出土している。須恵器甕には刻字のみられるものもある。

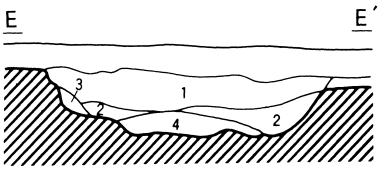




7Ｈ
1層　10YR3/1　黒褐色土主体　焼土粒20%・ローム粒20%混入。
2層　10YR4/3　にぶい黄褐色土主体　ローム粒20%・ローム中粒20%混入。
3層　10YR4/4　褐色土主体　ローム中粒30%混入。
4層　10YR5/3　にぶい黄褐色ローム主体　黒色土粒10%混入。
5層　10YR3/2　黒褐色土主体　焼土粒10%・ローム粒10%混入。
6層　2.5YR4/6　赤褐色焼土主体　黒色土粒５%混入。
7層　10YR4/4　褐色土主体　ローム中粒20%・炭化物粒５%混入。
8層　やや焼土化した粘土主体。カマドソデ。
9層　塊状の焼土。火焼面。

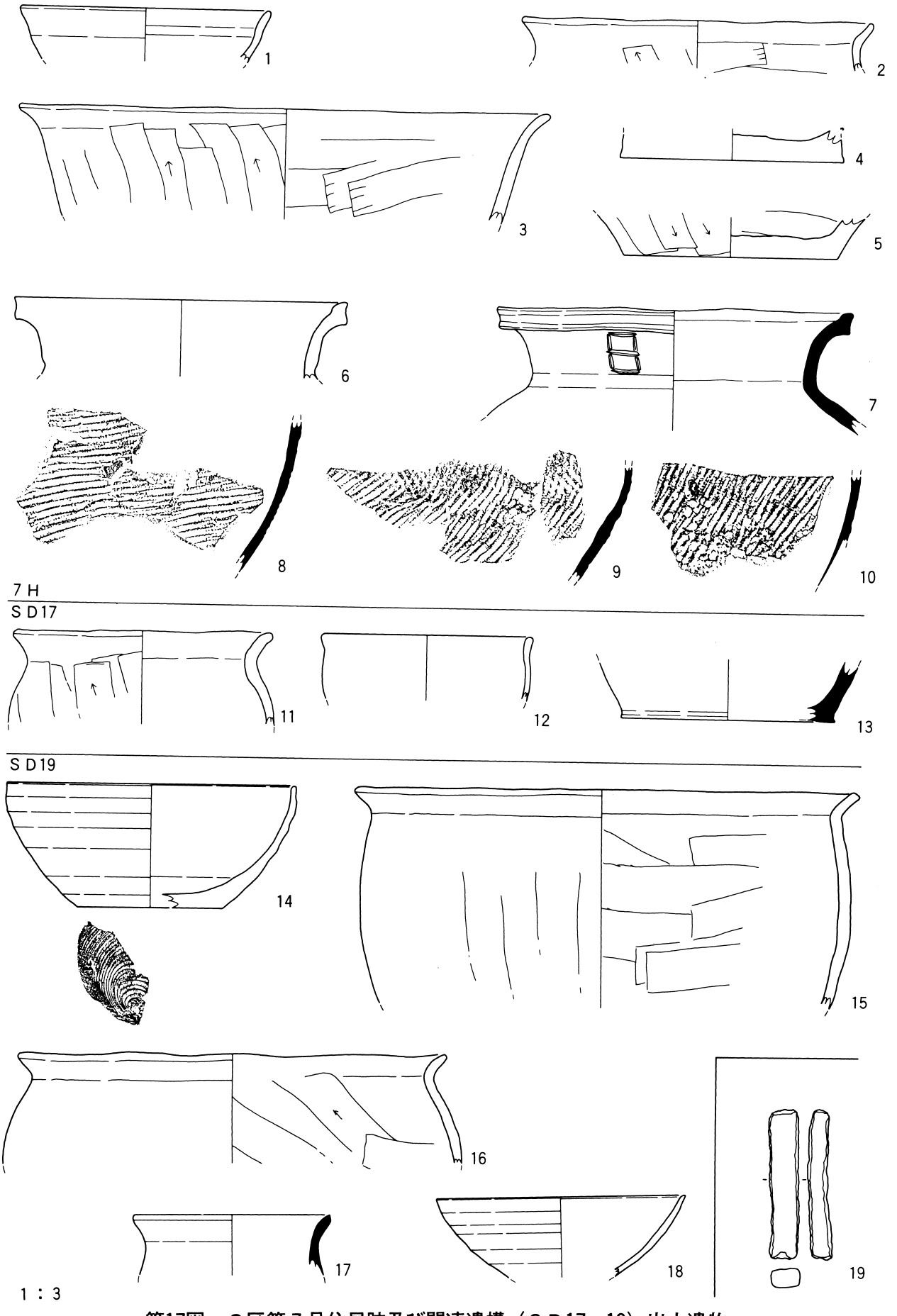


1層　10YR4/2　灰黄褐色土主体　ローム中塊２ケ混入。ローム粒１%混入。
2層　10YR4/3　にぶい黄褐色土主体　ローム粒30%混入。



ＳＤ１７
1層　10YR5/4　にぶい黄褐色土主体　ローム中塊30%混入。ローム小塊10%混入。
2層　10YR3/1　黒褐色土主体　ローム小塊10%混入。ローム粒５%混入。
3層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム中塊10%混入。
4層　10YR6/6　明黄褐色土主体　ローム大塊30%混入。ローム中塊10%混入。

第16図　Ｃ区第７号住居跡及び関連遺構（ＳＤ17．19）



第17図　C区第7号住居跡及び関連遺構（S D17. 19）出土遺物

第8号住居跡

［位置］　H－89～90グリッドにおいて確認されている。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　周溝の一部が確認されているだけなので全体の平面形、規模は不明であるが、ほぼ方形だったと思われる。

［壁・床面・周溝］　住居跡北壁、東壁で周溝の一部が検出されている。床面は北東側に僅かに残存しているだけで、遺存状態は極めて悪い。壁もほとんど確認できないが、もともと掘り込みが浅かったようである。

［柱穴］　周辺を含めて多数の小ピットが検出されているが、柱穴か否か判断するのは困難である。

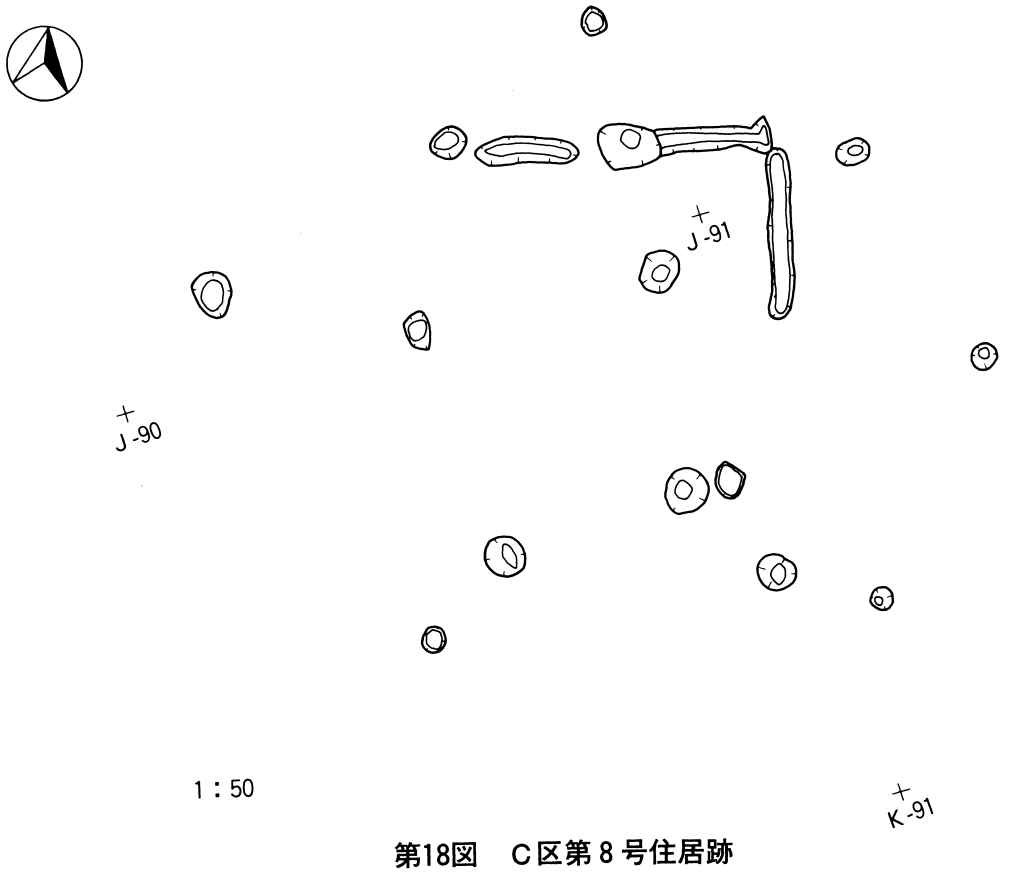
［カマド］　削平されたものと思われる。

［外周溝］　確認されなかった。

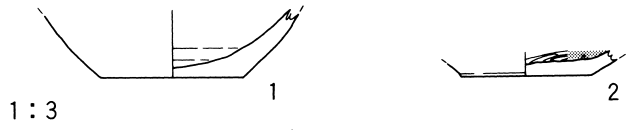
［関連土坑］　確認されなかった。

［付随掘立柱建物跡］　確認されなかった。

［遺物］　土師器甕、坏の小片が若干出土している。



第18図　C区第8号住居跡



第19図　C区第8号住居跡出土遺物

第10号住居跡

［位置］　F～G－101グリッド付近において確認されている。

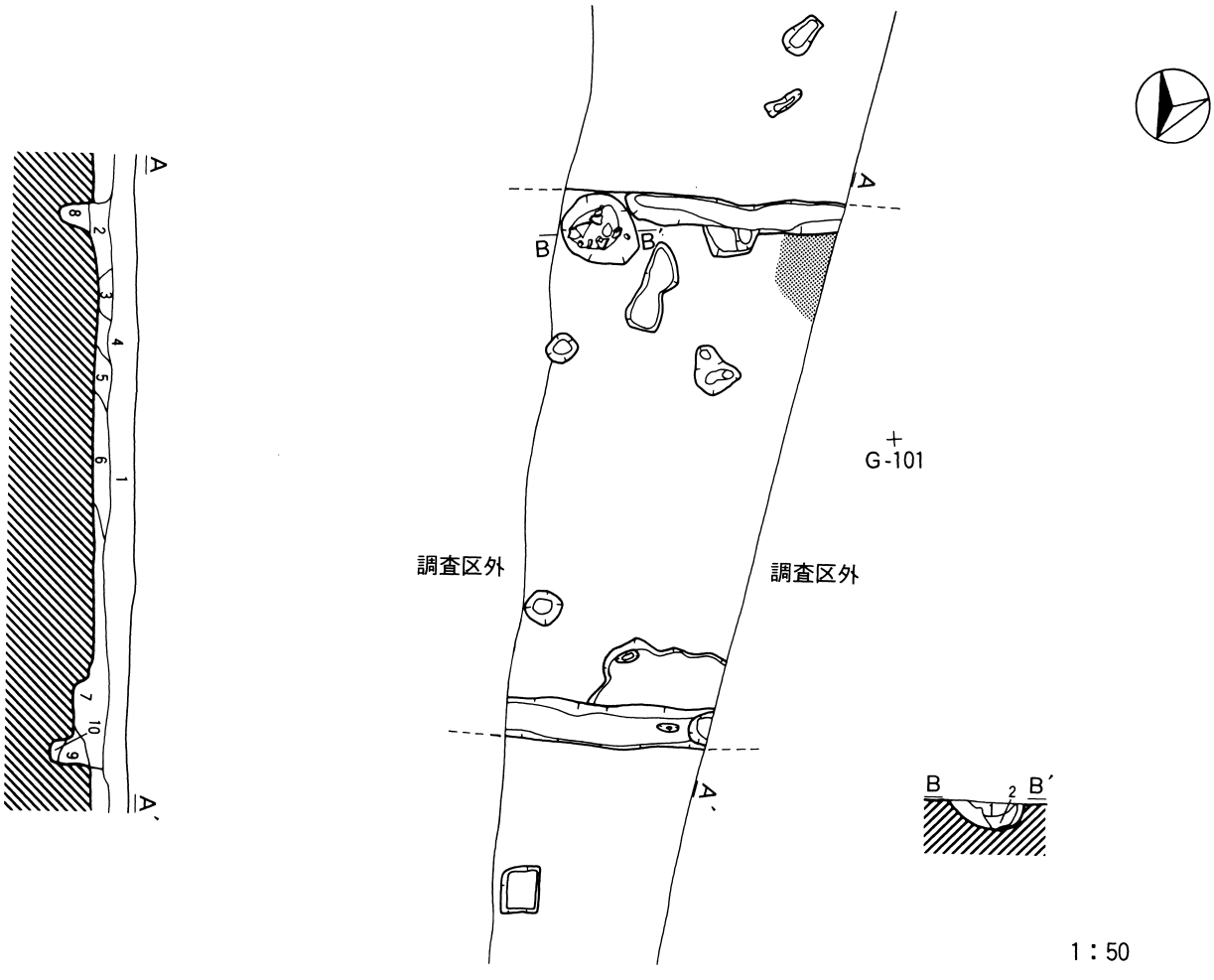
［重複］　なし。

［平面形・規模］　住居跡の東西両側が調査区外であるため全貌は不詳であるが、南北は約3.7mを測る。平面形はほぼ方形であったことが予想される。

［壁・床面・周溝］　周溝は北壁と南壁で検出されている。東壁と西壁は調査区外であるため不明である。

［柱穴］　柱穴状の小ピットが２基検出されている。

［カマド］　明瞭には検出されていないが、南壁の西側に焼土の集中が確認されている。カマドの火



10H
1層　10YR4/2　灰黄褐色土主体　明黄褐色土(10YR7/6)30%・炭化物粒１%混入。
2層　10YR4/4　褐色土主体　ローム中塊(10YR8/4)１%混入。
3層　10YR2/2　黒褐色土主体　褐色土(10YR4/6)５%混入。
4層　10YR2/2　黒褐色土主体
5層　10YR2/2　黒褐色土主体　橙色土(5YR7/6)５%・明黄褐色土(10YR7/6)１%・黒色土(10YR2/1)１%混入。
6層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム中塊(10YR8/6)30%混入。
7層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム中塊(10YR8/6)10%・黒色土(10YR2/1)10%混入。
8層　10YR6/6　明黄褐色土主体
9層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム中塊(10YR7/6)10%混入。
10層　10YR7/8　黄橙色土主体　黒褐色土(10YR3/2)30%混入。

10HSK1
1層　10YR3/3　褐色土主体　橙色焼土(2.5YR6/8)５%混入。
2層　10YR2/1　黒色土主体

第20図　C区第10号住居跡

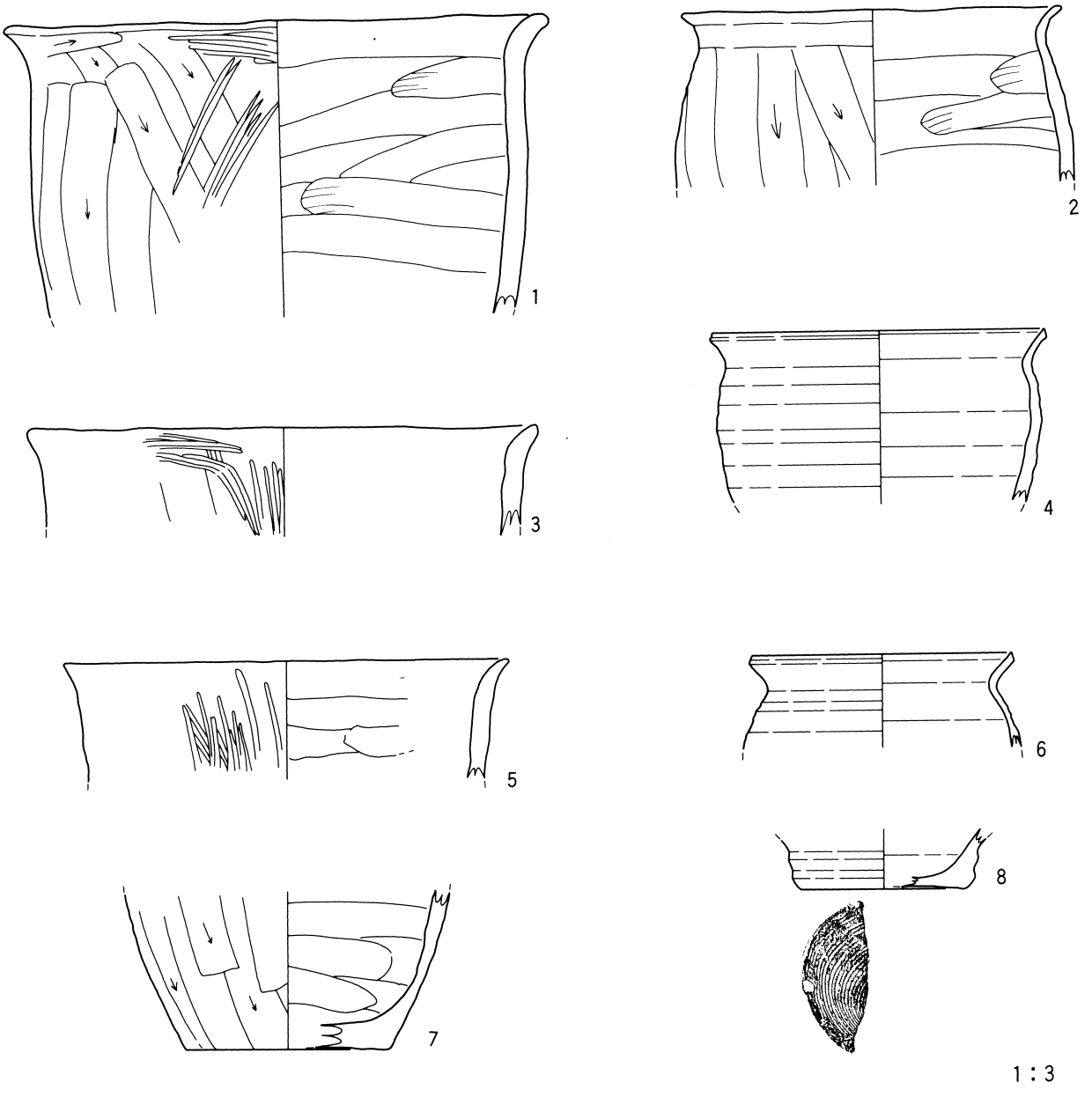
床面である可能性が考えられる。

［外周溝］　確認されていないが、前年度の調査で検出されたA区第5号溝跡が本住居跡に伴う外周溝である可能性も考えられる。

［関連土坑］　確認されていない。

［付随掘立柱建物跡］　確認されていない。

［遺物］　土師器甕の破片等が出土している。



第21図　C区第10号住居跡出土遺物

第11号住居跡（関連遺構ＳＤ23、ＳＤ30、ＳＫ43、60）

［位置］　Ｈ－98～99グリッド付近において確認されている。

［重複］　ＳＤ25がＳＤ30に重複している。前者の方が新しいようである。

［平面形・規模］　カマドの一部が検出されただけで、住居跡本体のほとんどは調査区外であるため規模、平面形は不明である。

［壁・床面・周溝］　住居跡本体部分が調査区外であるため壁、床面、周溝の状態は不明である。

［柱穴］　不明である。

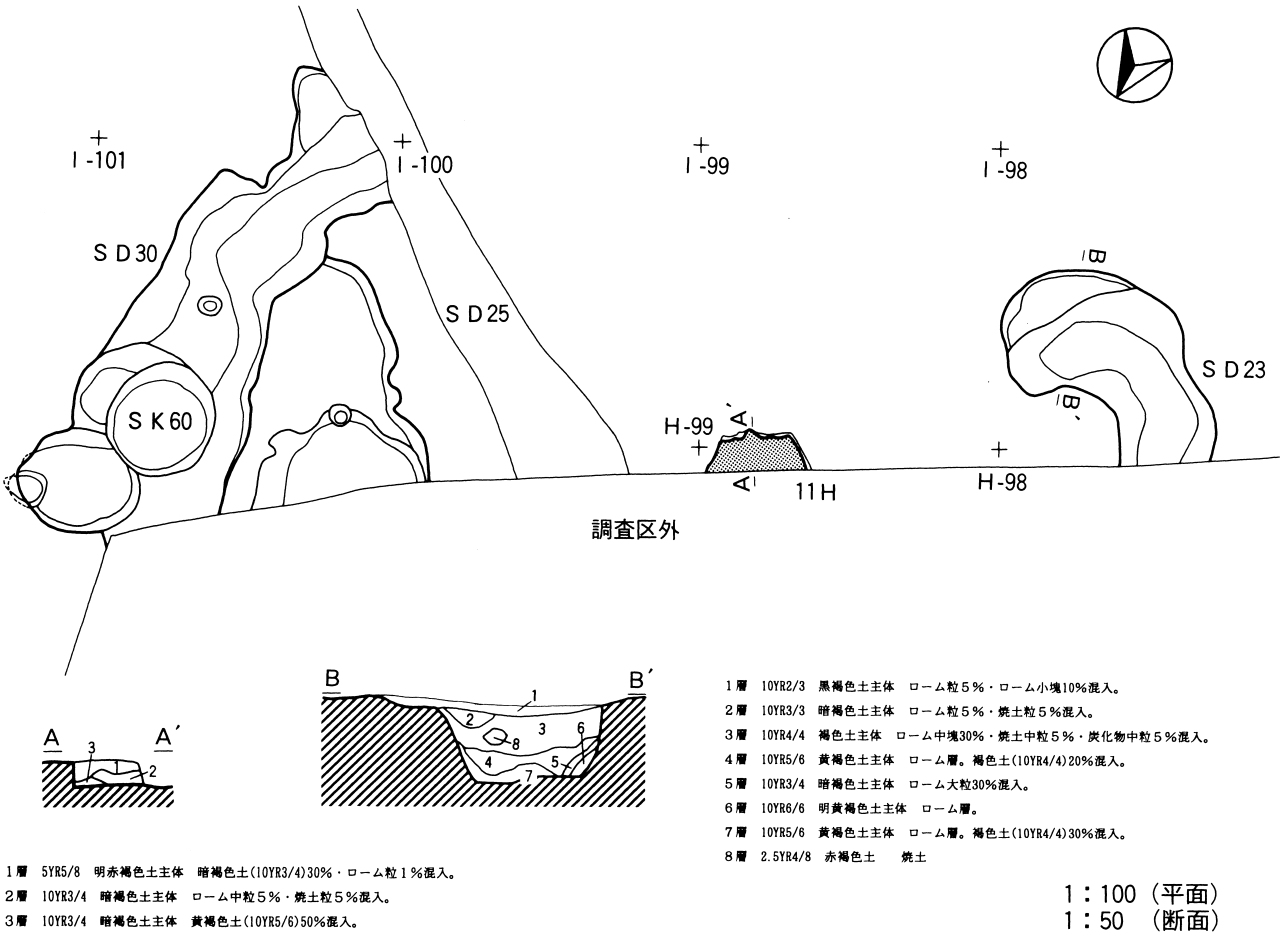
［カマド］　カマドの南端部分が検出されているが、全体の構造は不明である。

［外周溝］　ＳＤ23、ＳＤ30が本住居跡に伴う外周溝であろうと思われる。両者一連のものであった可能性も高いが、調査区外にかかるため検証できない。

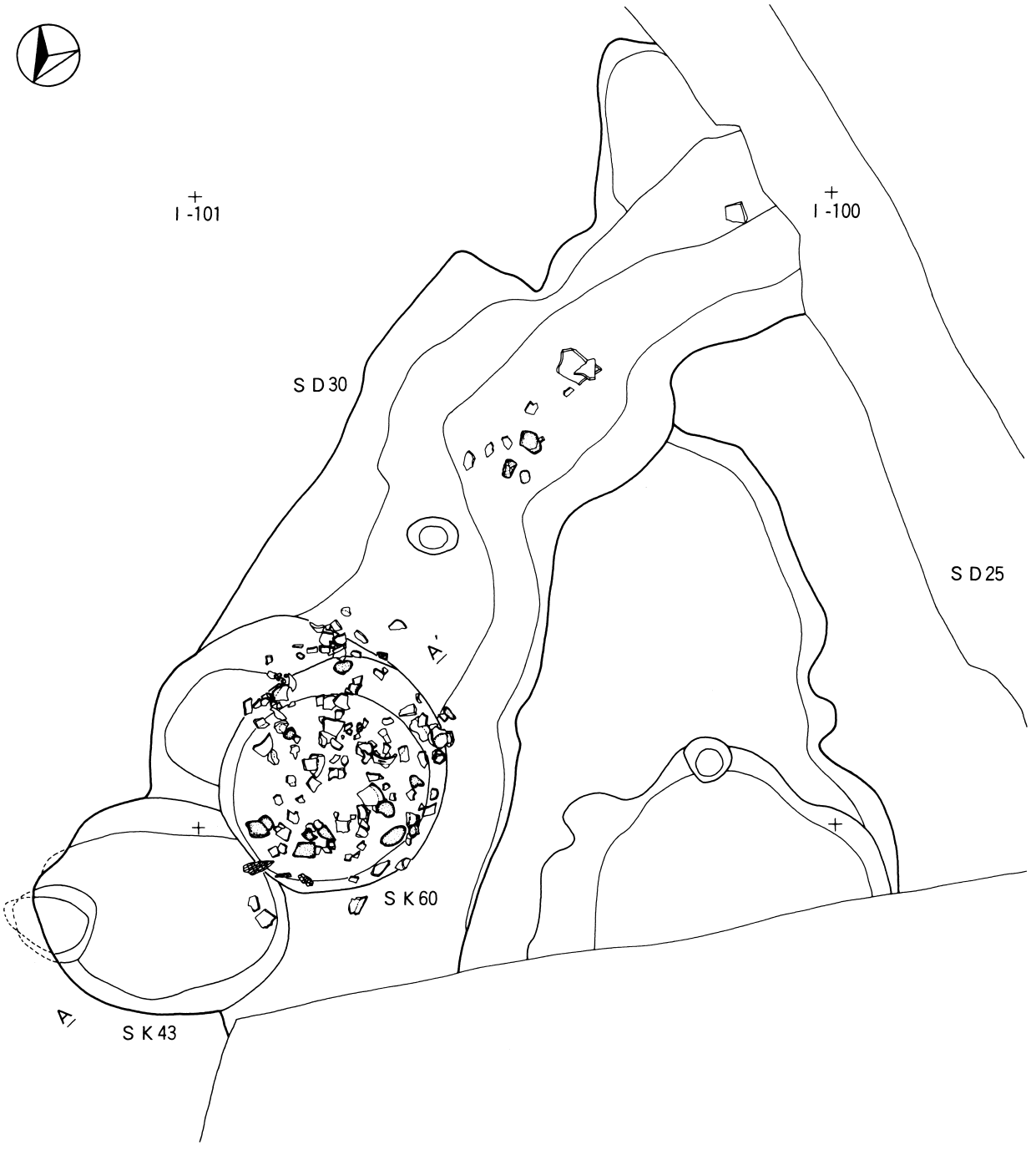
［関連土坑］　ＳＤ30内にＳＫ60が確認されている。切り合い関係は明瞭ではないので両者同時期の所産と推定される。土坑番号は付していないが、他にもＳＤ30内にはそれと同時期と思われる土坑状の掘り込みが認められる。

［付随掘立柱建物跡］　確認できなかった。

［遺物］　カマドおよびＳＤ30、ＳＫ60から多数の遺物が出土している。特にＳＫ60内からは土師器

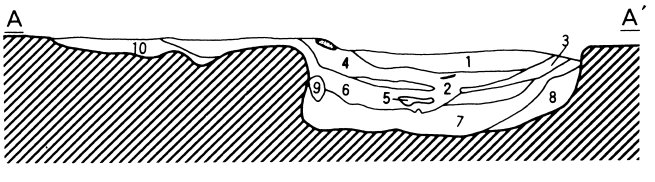


第22図　Ｃ区第11号住居跡及び関連遺構（ＳＤ23．30　ＳＫ60）



SK60

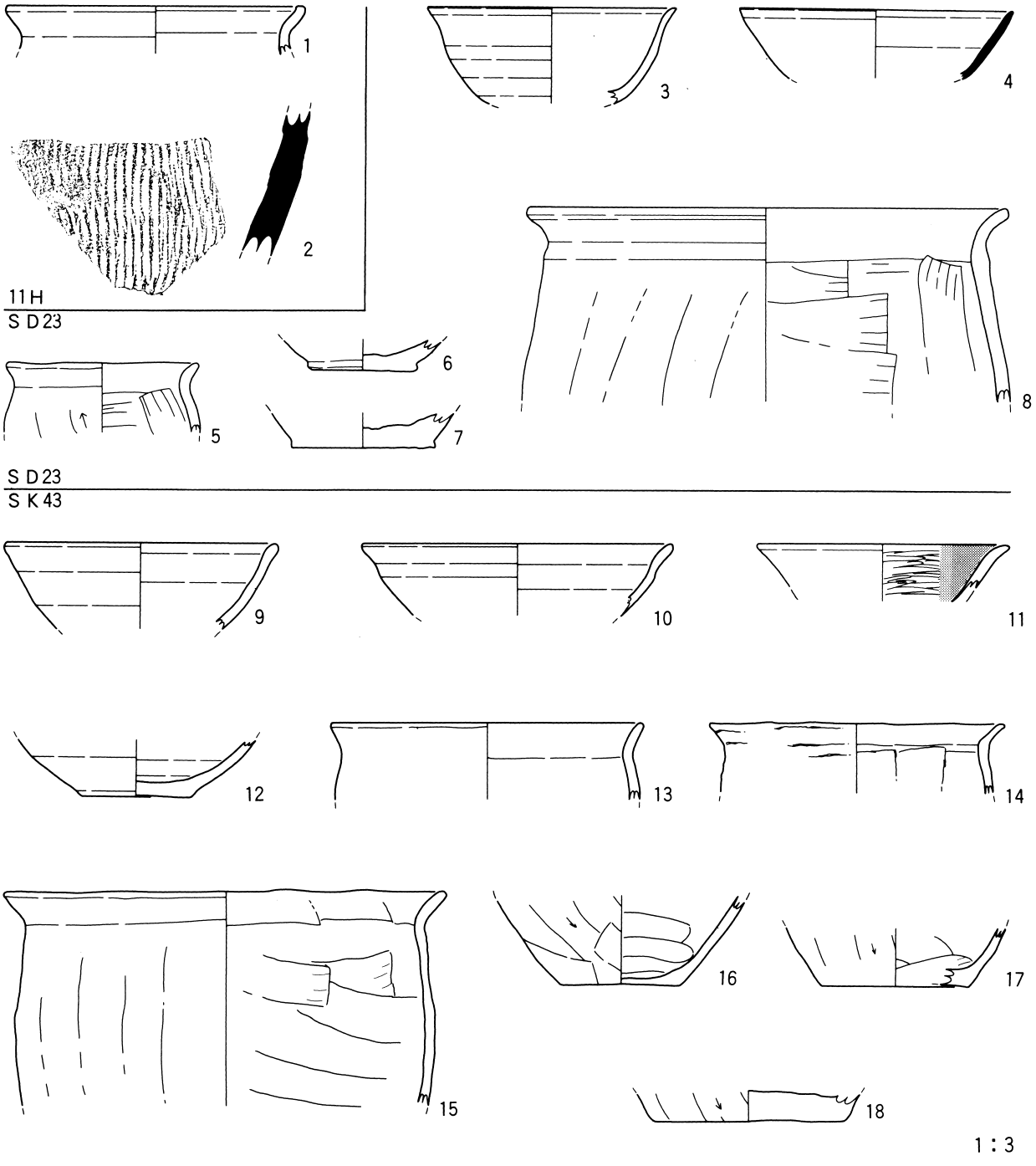
1層　10YR7/6　明黄褐色土主体　灰黄褐色土(10YR4/2)30%混入。
2層　10YR4/2　灰黄褐色土主体
3層　2.5YR7/3　淡赤橙色焼土主体　にぶい黄褐色土(10YR4/3)5%混入。
4層　10YR8/4　淡黄橙色土主体　褐灰色土(10YR4/1)5%混入。
5層　10YR4/2　灰黄褐色土主体　黄橙色土(10YR8/6)5%混入。
6層　10YR4/2　灰黄褐色土主体　黄橙色土(10YR8/6)10%混入。
7層　10YR4/2　灰黄褐色土主体　黄橙色土(10YR7/8)30%混入。
8層　10YR4/2　灰黄褐色土主体　淡黄橙色土(10YR8/3)10%混入。
9層　10YR8/6　黄橙色土主体
10層　10YR3/1　黒褐色土主体　淡黄橙色土(10YR8/4)30%混入。



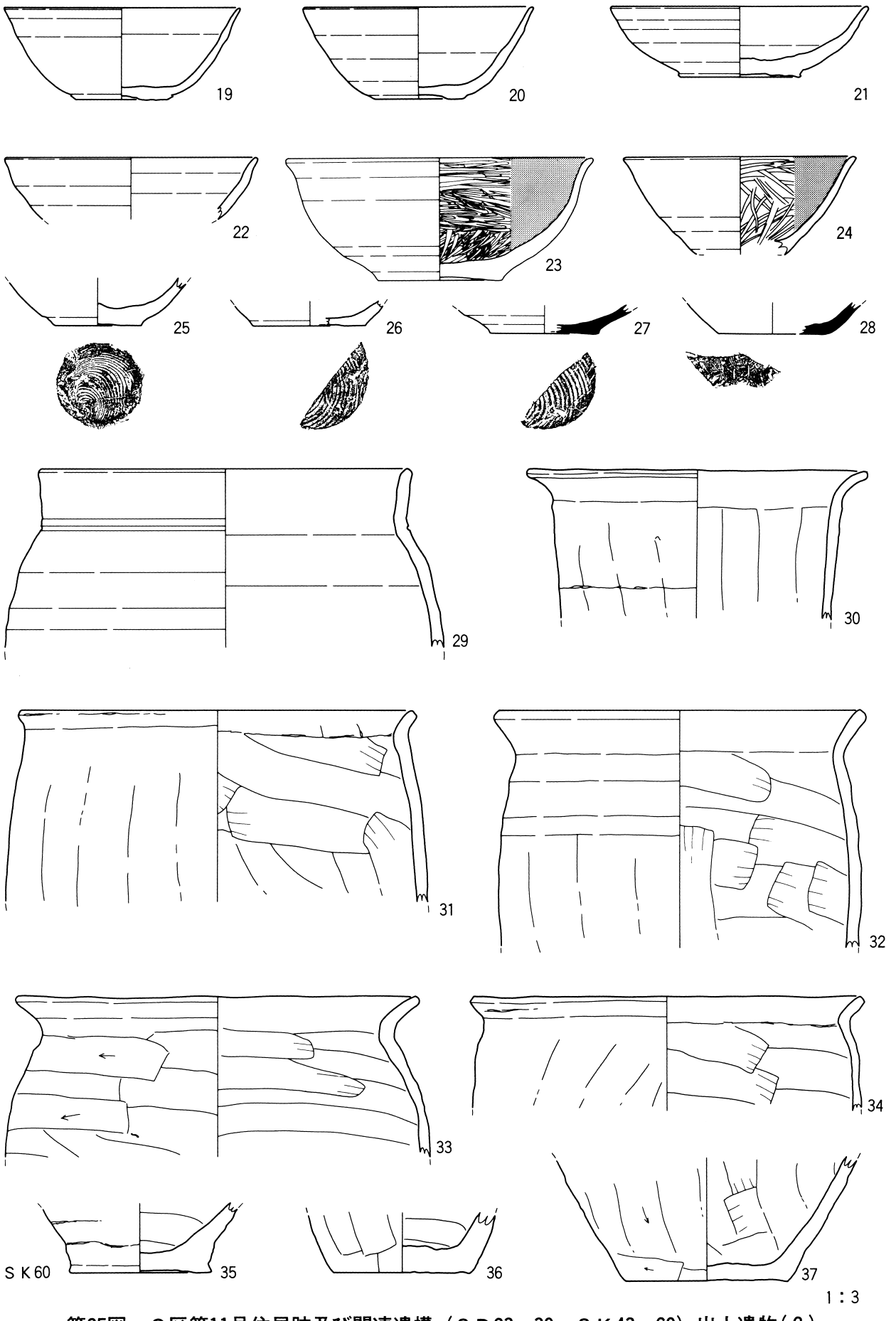
1：40

第23図　C区第30号溝跡　第60号土坑遺物出土状態

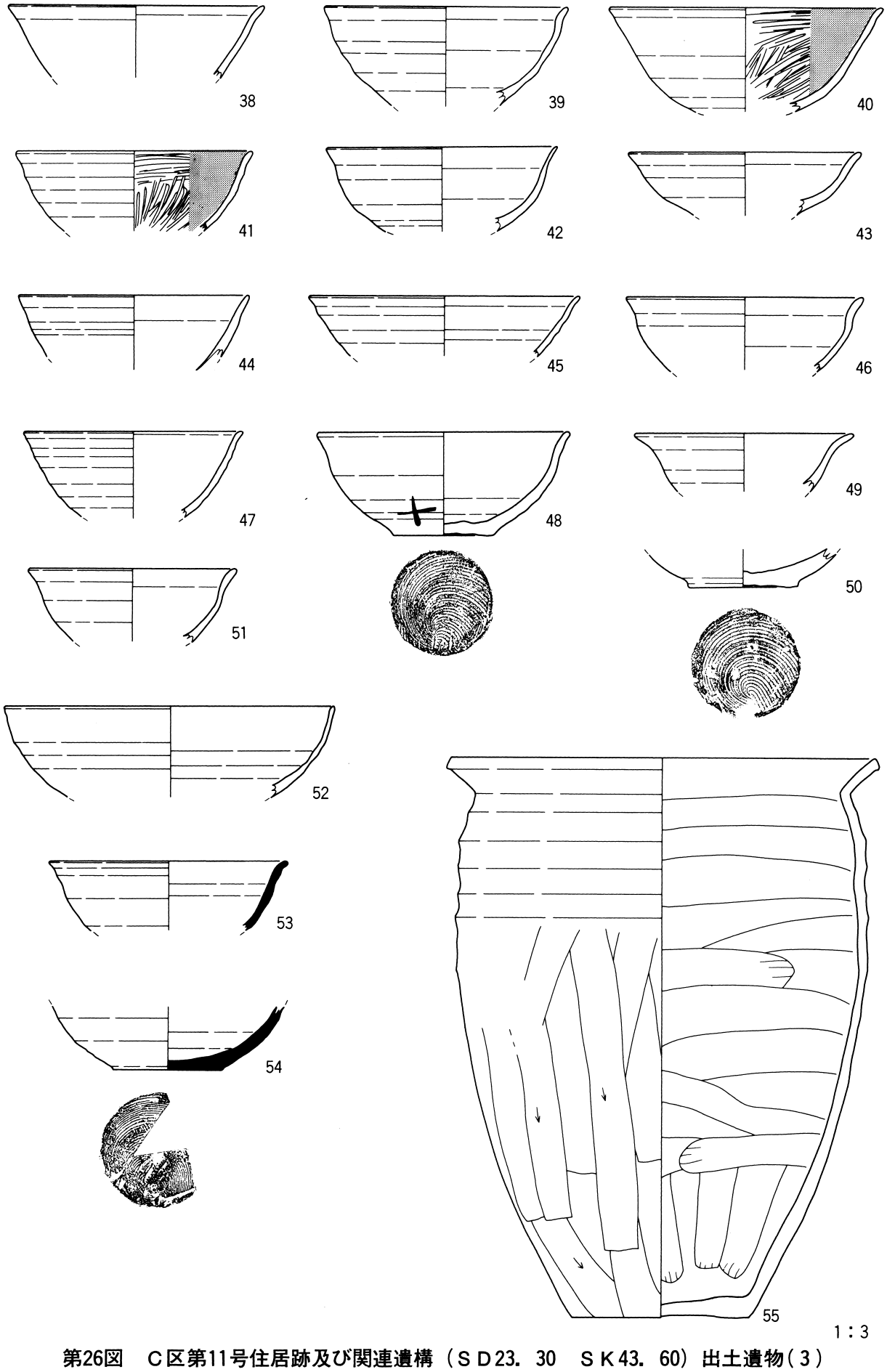
甕、坏を始めとする大量の土器が検出されている。なお、SD30付近は完掘に近づいた状態で溝跡、土坑などが識別されたが、確認面では平面形を把握することが困難であり、当初第9号住居跡として精査を進めた。そのためＳＪ９として取り上げた遺物もSD30及びSK60内の遺物として掲載した。



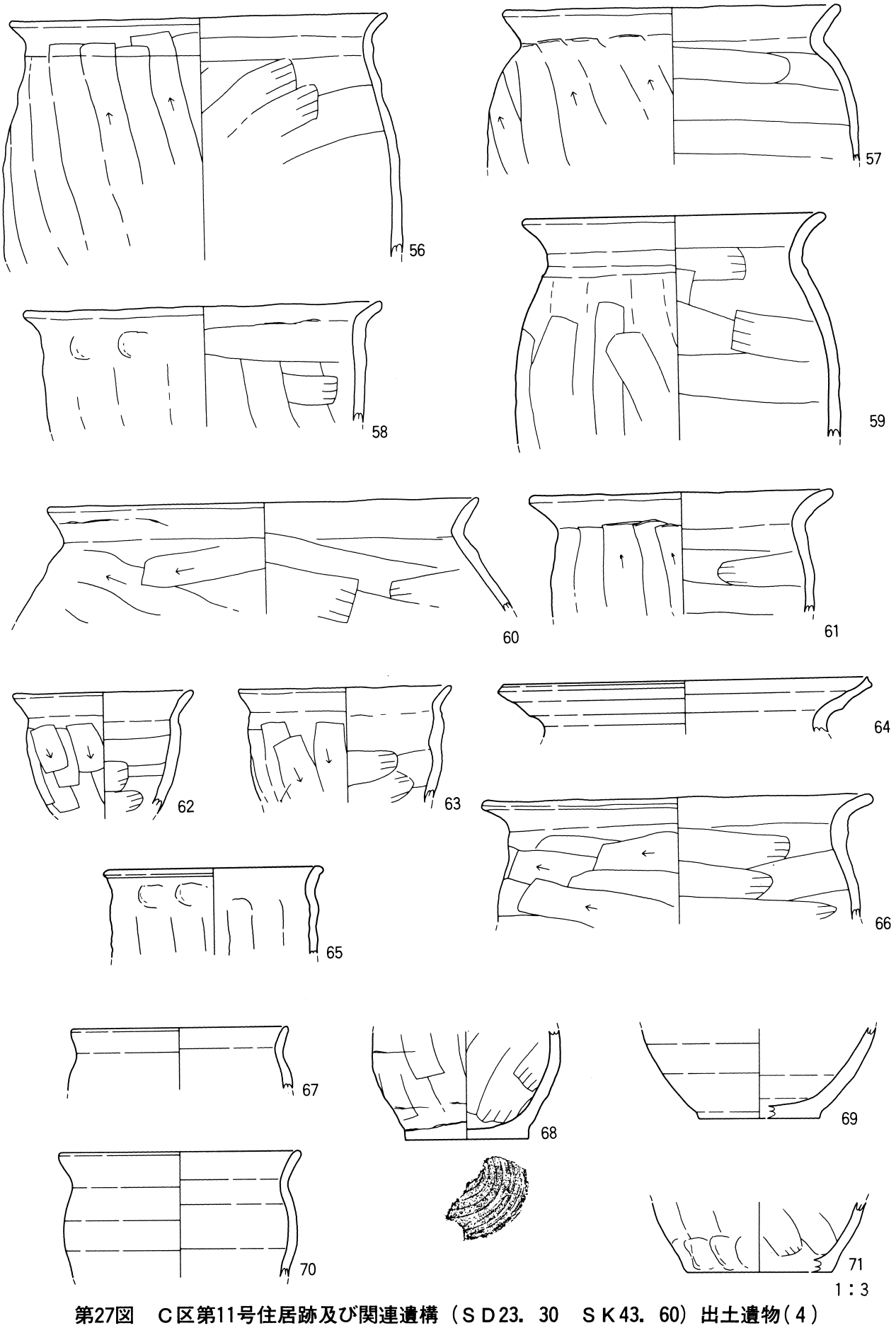
第24図　C区第11号住居跡及び関連遺構（ＳＤ23. 30　ＳＫ43. 60）出土遺物(1)



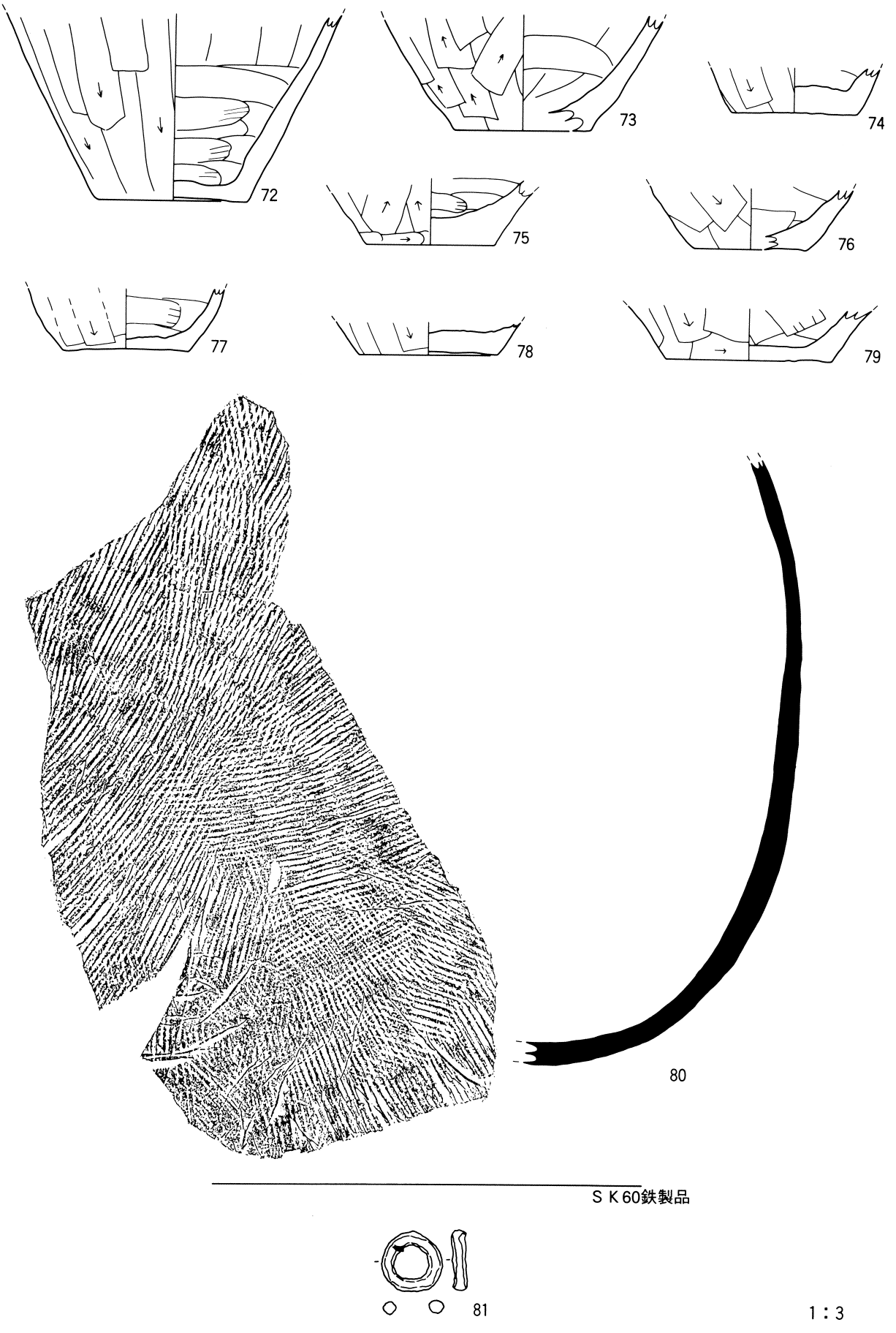
第25図　C区第11号住居跡及び関連遺構（SD23. 30　SK43. 60）出土遺物(2)



第26図　C区第11号住居跡及び関連遺構（SD23. 30　SK43. 60）出土遺物(3)



第27図　C区第11号住居跡及び関連遺構（SD23. 30　SK43. 60）出土遺物(4)



第28図　Ｃ区第11号住居跡及び関連遺構（ＳＫ43．60　ＳＤ30）出土遺物(5)

第1号井戸跡（関連遺構ＳＤ22）

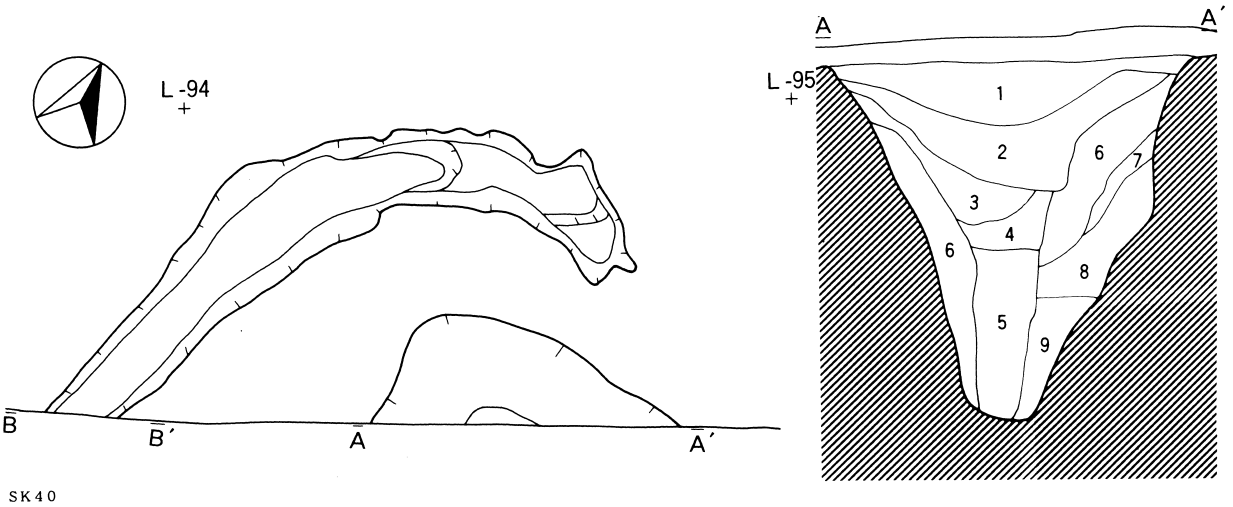
［位置］　Ｌ－94グリッドで確認されている。

［重複］　なし。

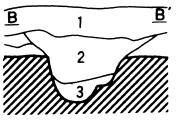
［平面形・規模］　大半が調査区外にかかるため全貌は不明であるが、検出された範囲内での最深部は確認面から約2.3mを測る。

［遺物］　土師器、須恵器の坏の破片が出土している。

［堆積土］　ある程度埋没した段階で白頭山・苫小牧火山灰が堆積している。従って本井戸跡が掘削



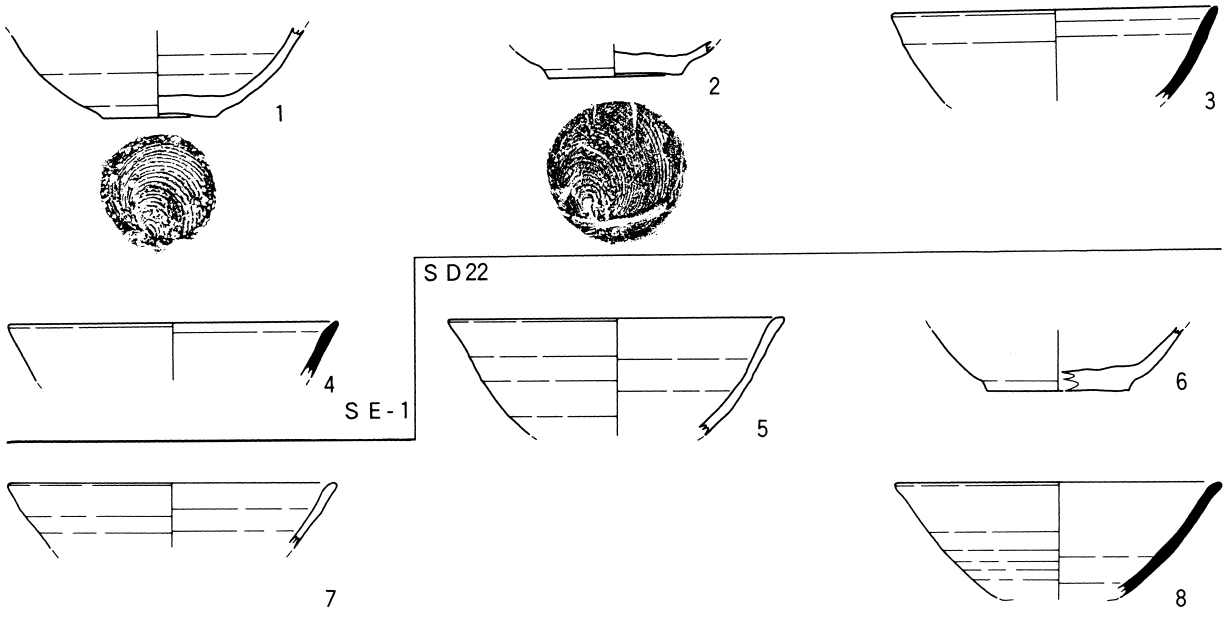
ＳＫ４０
1層　10YR1.7/1　黒色土主体　ローム粒１％・炭化物粒１％混入。
2層　10YR3/2　黒褐色土主体　にぶい黄褐色土10%混入。炭化物中粒１％混入。火山灰２％混入。
3層　10YR3/3　暗褐色土主体　火山灰25%混入。ローム中粒１％混入。炭化物粒１％混入。
4層　10YR2/2　黒褐色土主体　炭化物中粒１％混入。ローム大粒１％混入。
5層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム中粒15%混入。粘性(小)。
6層　10YR4/3　にぶい黄褐色土主体　黒褐色土20%混入。ＬＢ大塊25%混入。炭化物粒５％混入。
7層　10YR3/1　黒褐色土主体　にぶい黄褐色土10%混入。炭化物中粒１％混入。ローム粒１％混入。
8層　10YR3/3　暗褐色土主体　灰黄褐色土５％混入。黒褐色土10%混入。ＬＢ小塊15%混入。炭化物中粒１％混入。
9層　10YR3/1　黒褐色土主体　暗褐色土20%混入。ローム中粒５％混入。炭化物粒１％混入。



ＳＤ２２
1層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム粒５％・ローム板状に15%混入。
2層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム粒５％・ローム大粒５％・小礫10%混入。
3層　10YR4/4　褐色土主体　ローム中塊30%混入。

1：50

第29図　Ｃ区第１号井戸及び関連遺構（ＳＤ22）



1：3

第30図　Ｃ区第１号井戸跡及び関連遺構（ＳＤ22）出土遺物

されたのは同火山灰降下以前のことと推測される。

［関連遺構］　断言できないが、ＳＤ22が本井戸跡に関連する遺構であろうと思われる。井戸跡を取り囲むようにその平面形とほぼ並行に巡り、北側は開口していたようである。

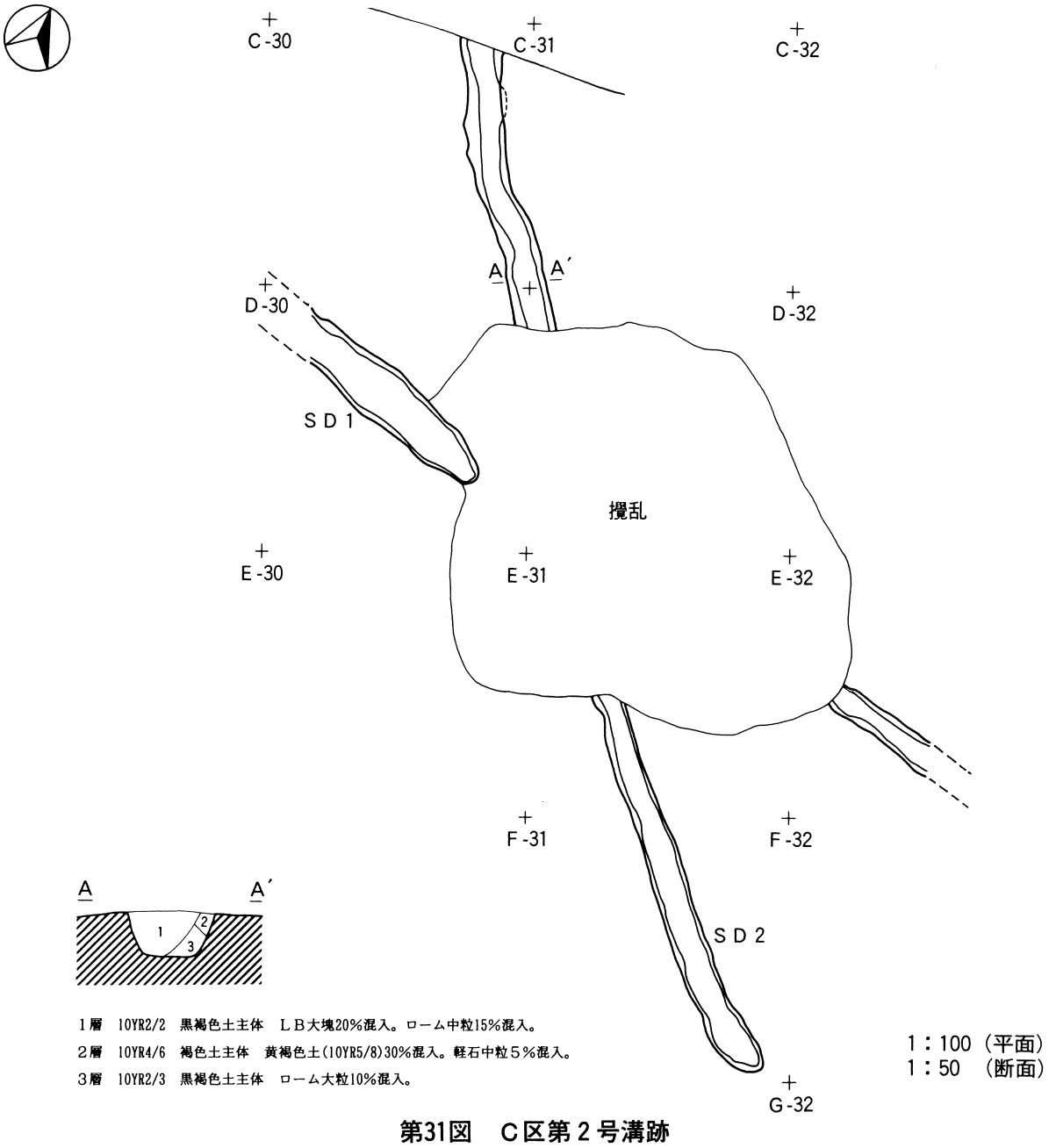
第２号溝

［位置］　Ｃ－30からＦ－31グリッドにおいて確認されている。

［重複］　第１号溝跡と重複していたと思われるが、重複部分に撹乱があるため直接新旧関係を読み取ることはできない。覆土の状態等から類推すると本溝跡の方が古いものと思われる。

［平面形・規模］　北側は調査区外まで延伸しているため全貌は明確ではないが、確認面での計測値は幅50～60㎝、深さ約30㎝である。溝は北から南へ緩く傾斜している。

［遺物］　出土していない。



第31図　Ｃ区第２号溝跡

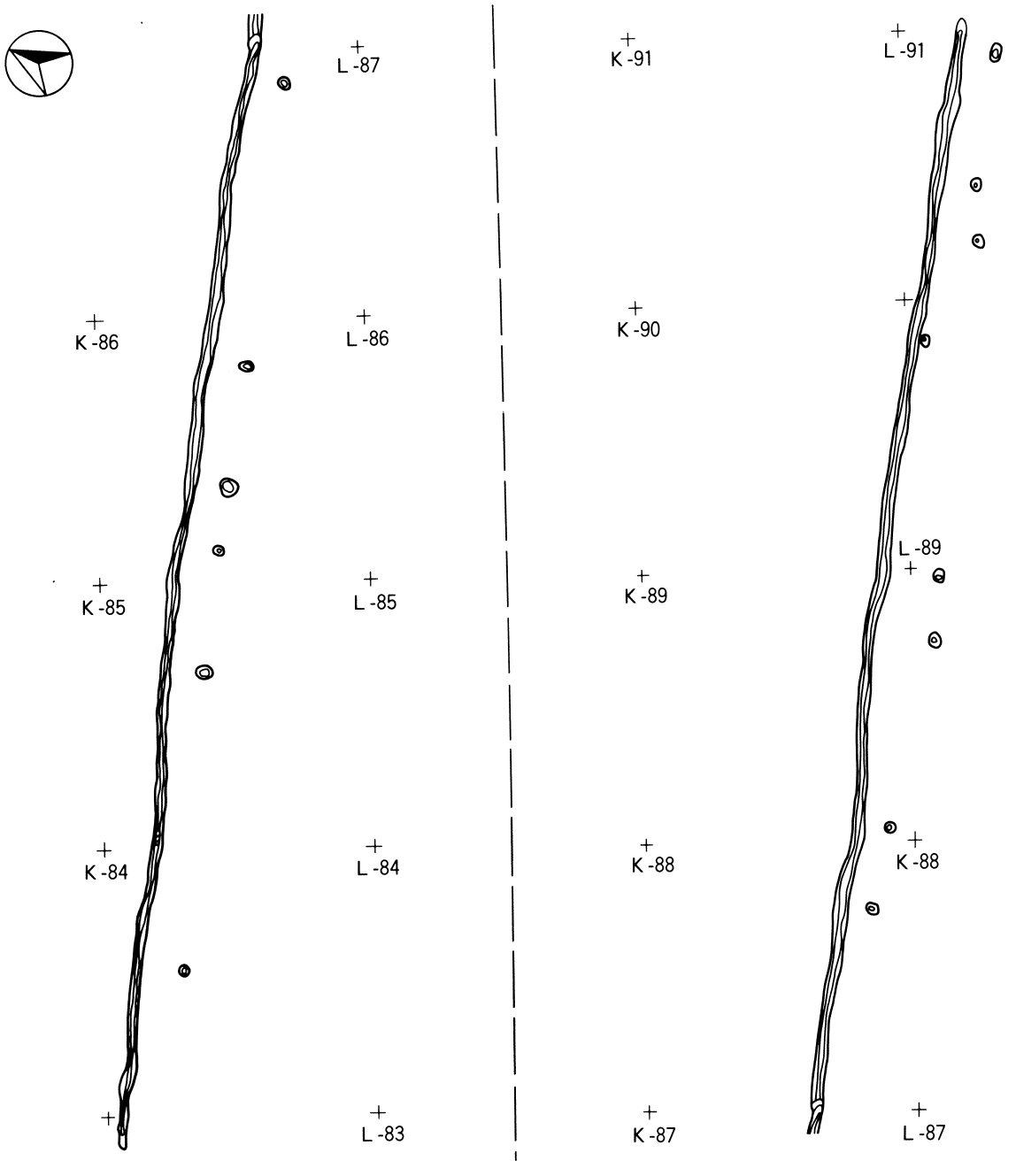
第14号溝

［位置］　K－83からL－92グリッドにかけて確認されている。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　幅は10cm程度で長さは約32.5mを測る。本溝跡の南側に並行するように柱穴状の小ピットが14基ほど確認されており、本溝跡との関連が予想される。

［遺物］　出土していない。



第32図　C区第14号溝跡

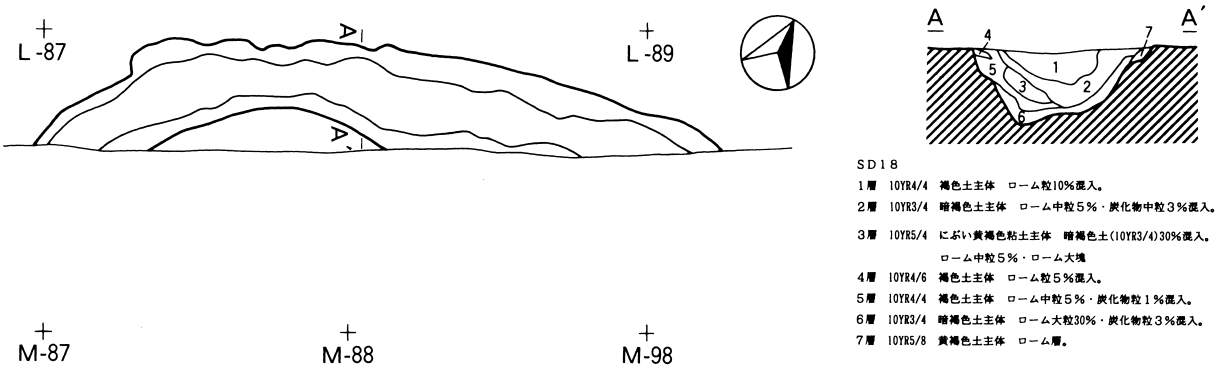
第18号溝

［位置］　L－87～89グリッドにおいて確認されている。

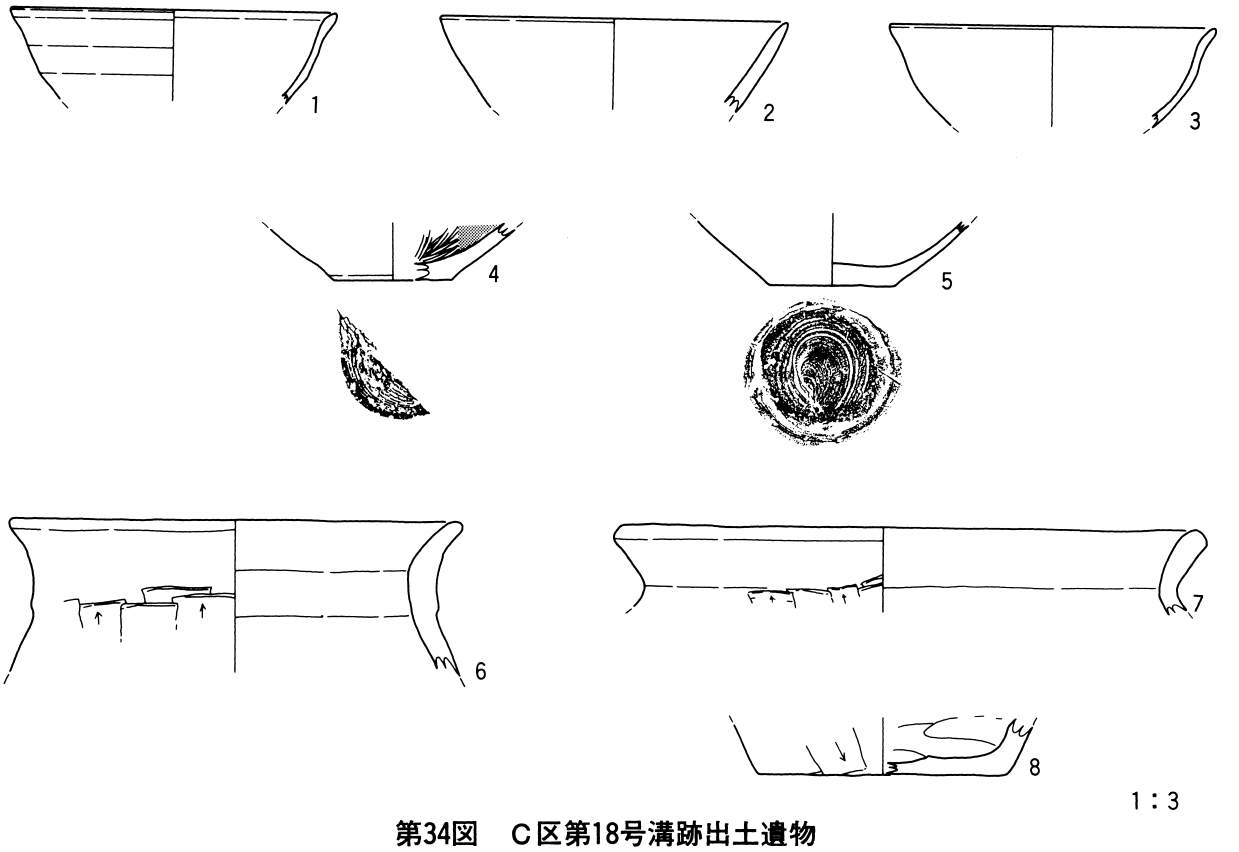
［重複］　なし。

［平面形・規模］　大半が調査区外にかかるため全貌は不明であるが、確認面での幅は1.2m前後、深さは50cm前後である。住居跡に伴う外周溝と比較すると規模、平面形はほぼ同等になるものと思われ、覆土の状況も外周溝とよく似ていることから、本溝跡は住居跡に伴う外周溝であった可能性が高い。住居跡は本溝跡の南側の調査区外にあったことが予想される。

［遺物］　土師器坏、甕の破片が出土している。



第33図　C区第18号溝跡



第34図　C区第18号溝跡出土遺物

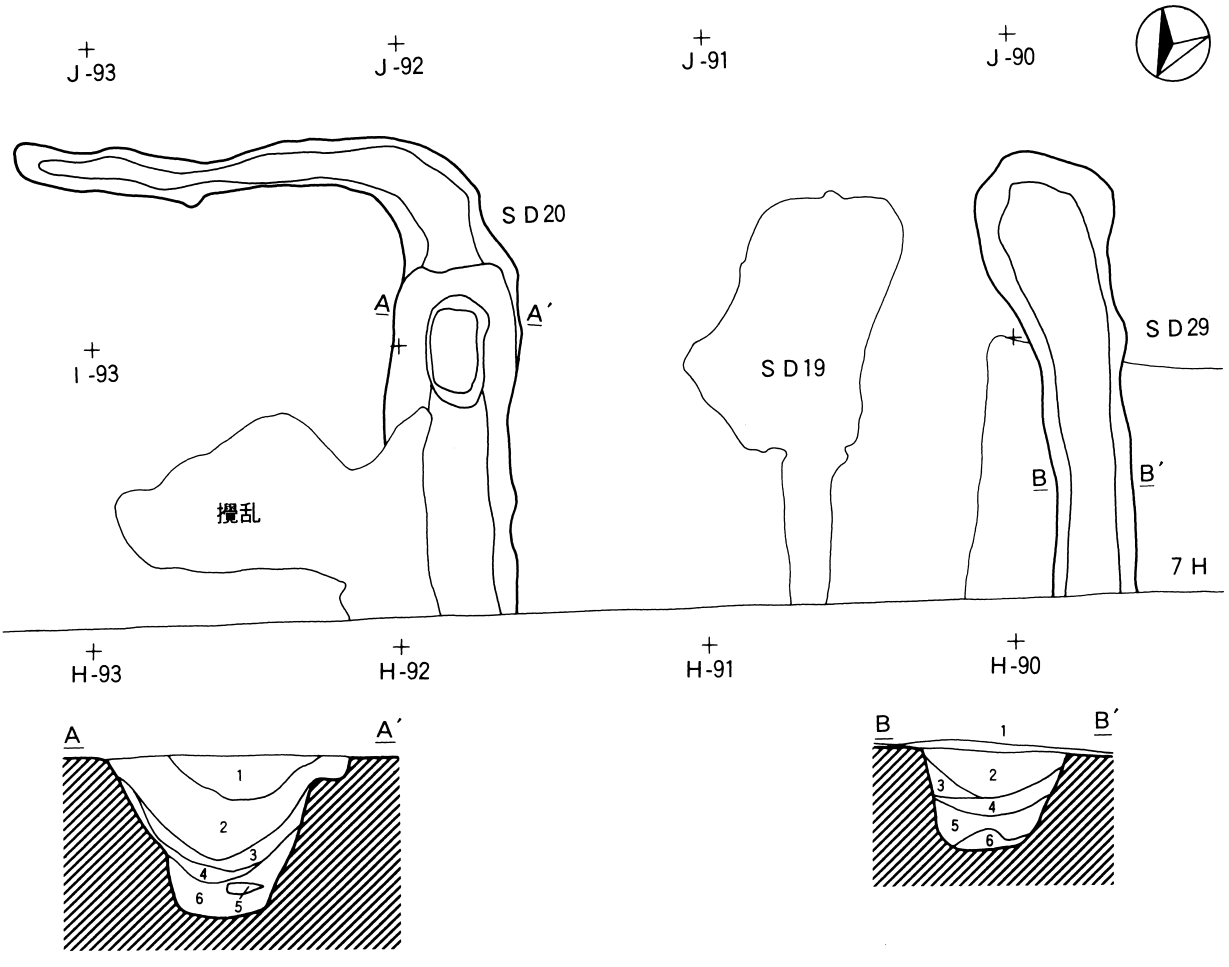
第20号溝

［位置］　H－92～I－92～93グリッドにおいて確認されている。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　大半が調査区外であるため全貌は不詳である。H－92杭付近からほぼ南に延び、I－92杭付近で東に屈曲する。調査区境界付近での確認面からの深さは約50cmであるが、I－92グリッド付近では深さ約110cmを測り土坑状を呈する。この土坑状の掘り込み以北は平面形、堆積土の特徴ともに住居跡に伴う外周溝と共通するものである。後述するように本溝跡は本来第29号溝跡と一連の溝であり、H－90、91付近にあったと予想される住居跡を囲んでいた可能性が考えられるものである。屈曲部から東側は末端部に向かってしだいに掘り込みが浅くなる。

［遺物］　土師器坏、甕、須恵器坏とともにミニチュア土器が出土している。また、須恵器坏の中には「大」の字が刻まれたものが含まれる。



1層　10YR5/4　にぶい黄褐色土主体　しまりあり。ローム中塊5％混入。ローム粒5％混入。
2層　10YR7/8　黄橙色土主体　しまりあり。ローム大塊30％混入。黒色土5％混入。
3層　10YR2/2　黒褐色土主体　粘性あり。ローム粒10％混入。
4層　10YR7/6　明黄褐色土主体　褐灰色土5％混入。
5層　10YR5/2　灰黄褐色土主体　ローム粒5％混入。
6層　7.5YR6/6　橙色焼土主体

1層　10YR3/3　暗褐色土主体　炭化物粒10％混入。焼土を含む。
2層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム大粒10％・ローム大塊30％混入。
3層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム粒5％・ローム大塊10％混入。
4層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム中粒5％混入。
5層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム大塊50％混入。
6層　10YR6/6　明黄褐色土主体　ローム層。

1：100（平面）
1：50（断面）

第35図　C区第20．29号溝跡

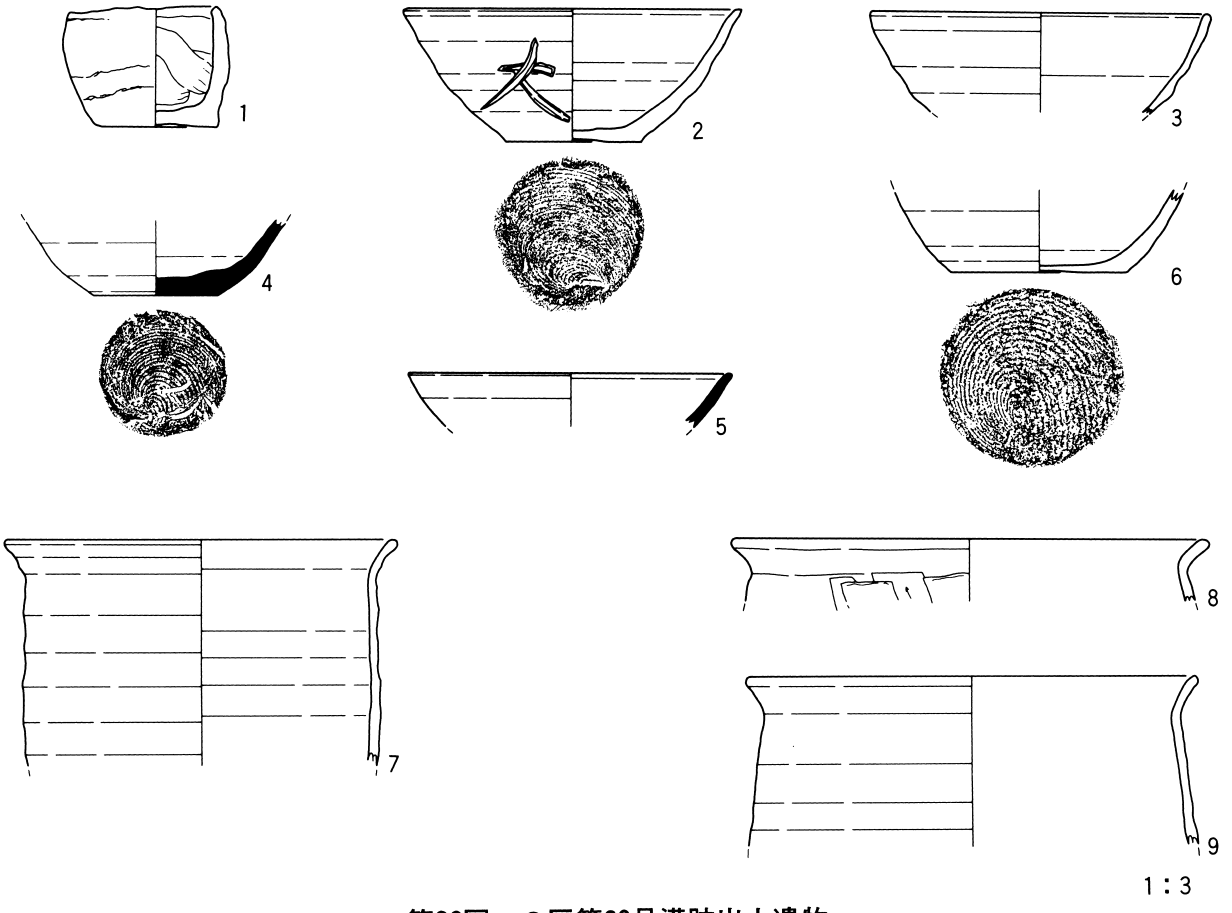
第29号溝

［位置］　H～I－89グリッドにおいて確認されている。

［重複］　第７号住居跡と重複している。切り合い関係から本溝跡の方が古いものと思われるが、住居跡による削平は本溝跡上部の一部のみである。

［平面形・規模］　北側の大半が調査区外であるため全貌は明らかでない。確認面での計測値は幅約１m、深さ約60㎝であるが、南側に向かってしだいに深くなり、幅も広がって先端は土坑状を呈する。形態的な特徴及び覆土の状況から住居跡に伴う外周溝であったものと思われ、本来第20号溝跡と一連のものであった可能性が高いが、調査区外にかかるため検証できない。両溝跡が伴う住居跡はH－90～91グリッド付近に存在したものと推測されるが、周辺は削平が著しく確認できなかった。

［遺物］　小片のため図示できないが、土師器片が出土している。



第36図　C区第20号溝跡出土遺物

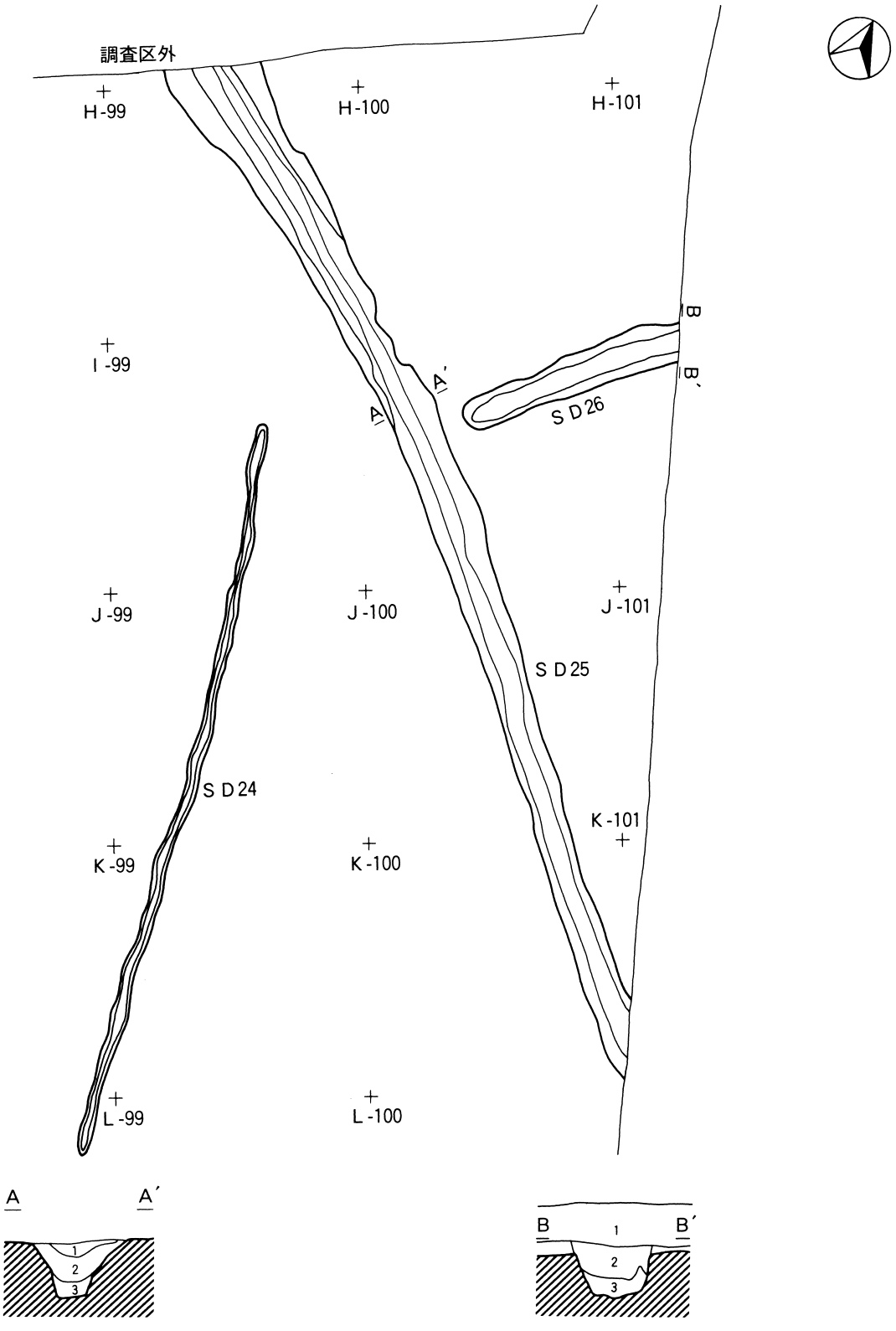
第24号溝

［位置］　Ｉ－99から～Ｌ－98グリッドにかけて確認されている。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　確認面での計測値は幅約20㎝、長さ約12mである。

［遺物］　出土していない。



1層　10YR3/2　黒褐色土主体　しまりあり。ローム小塊1ケ混入。
2層　10YR3/1　黒褐色土主体　しまりあり。ローム粒5％混入。
3層　10YR4/3　にぶい黄褐色土主体　しまりあり。ローム小塊3ケ混入。

1層　10YR5/4　にぶい黄褐色土主体　ローム粒30％混入。
2層　10YR2/1　黒色土主体　ローム5％混入。
3層　10YR4/2　灰黄褐色土主体　ローム30％混入。

1：100（平面）
1：50（断面）

第37図　C区第24～26号溝跡

第25号溝

［位置］　F－99からK－100グリッドにかけて確認されている。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　北側は調査区外に延伸し、南側は現道路により削平されているため全貌は不詳である。確認面での計測値は幅60～140㎝、深さ約40㎝である。

［遺物］　図示できるものは少ないが、土師器、須恵器の坏、甕の破片が出土している。

第26号溝

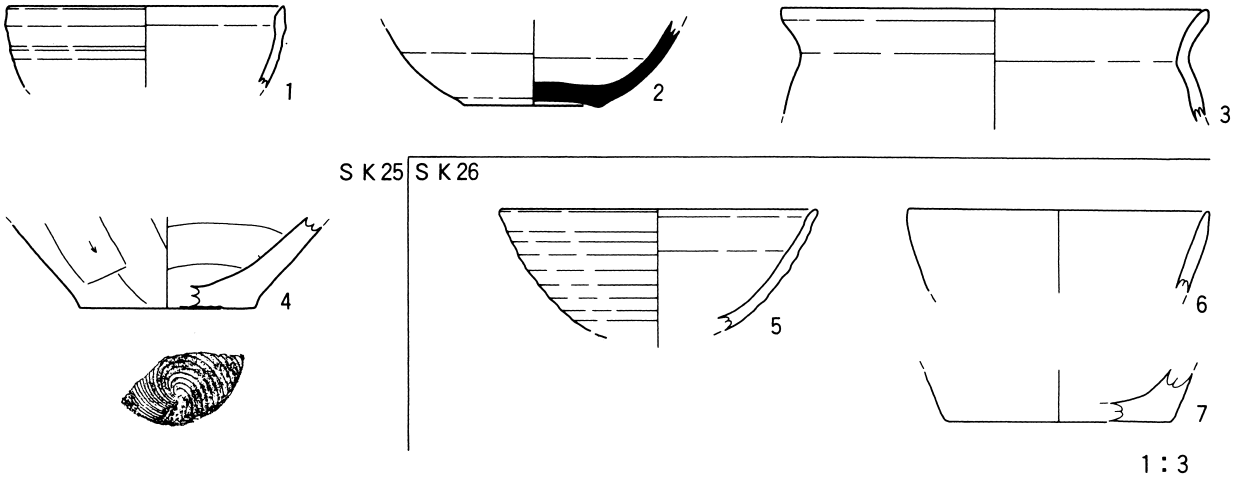
［位置］　I－100グリッドにおいて確認されている。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　東側は現道路により削平されているが、延長上に前年度の調査区で確認されたA区第7号溝跡がある。方向性、覆土の状況から判断して両溝跡は本来一連のものであった可能性が高いものと推測される。

［遺物］　土師器坏、甕などの破片が出土している。

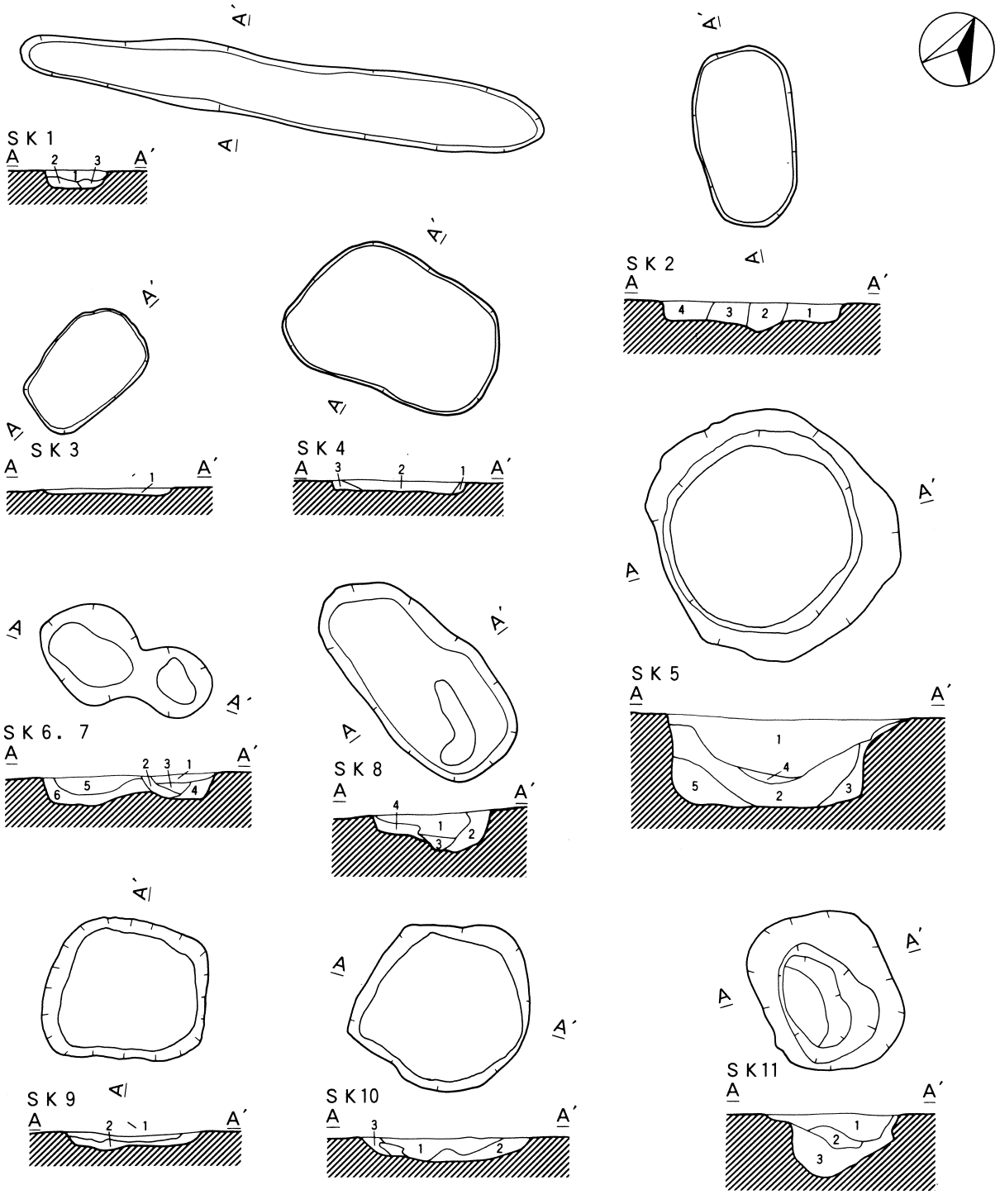
（川口　潤・七戸将光）



第38図　C区第25．26号溝跡出土遺物

第1表　C区土坑

土坑番号	位　置	規模(m)	深さ(cm)	出土遺物	重　複	備　考
第 1号土坑	G－45	4.2×0.6	15	なし	なし	
第 2号土坑	G－45～46	1.5×0.8	20	なし	なし	
第 3号土坑	H－46	1.0×0.7	7	なし	なし	
第 4号土坑	H－45	1.6×1.0	8	なし	なし	
第 5号土坑	H～I－95～96	2.0×2.0	70	なし	なし	
第 6号土坑	K－69	0.7×0.7	25	なし	第7号土坑	本土坑の方が古い
第 7号土坑	K－69	0.5×0.5	20	なし	第6号土坑	本土坑の方が新しい
第 8号土坑	K－69～70	1.9×1.0	30	なし	なし	
第 9号土坑	J－71	1.3×1.1	15	なし	なし	
第10号土坑	K－72	1.5×1.4	20	なし	なし	
第11号土坑	K－73	1.3×1.1	50	なし	なし	
第12号土坑	K－73～74	3.3×0.6	20	なし	なし	
第13号土坑	K～L－74～75	1.5×1.5	10	なし	第14号土坑	新旧関係は不明確
第14号土坑	J～K－74～75	2.4×1.4	10	なし	第13号土坑	新旧関係は不明確
第15号土坑	K－75	1.5×1.0	40	土師器甕片・須恵器甕片等	なし	第46図参照
第16号土坑	K－76	2.1×0.9	20	なし	なし	
第17号土坑	L－77	1.2×1.2	30	なし	なし	一部調査区外
第18号土坑	J－78	1.4×1.1	15	なし	なし	
第19号土坑	K～L－79	1.2×1.0	30	なし	第20号土坑	新旧関係は不明確
第20号土坑	L－79	0.8×0.8	26	なし	第19,21号土坑	新旧関係は不明確
第21号土坑	K～L－79	1.2×0.9	13	なし	第20,22号土坑	新旧関係は不明確
第22号土坑	K－79	2.1×0.6	15	土師器坏	第21号土坑	新旧関係は不明確
第23号土坑	L－79	0.4×0.4	10	土師器小片1点	なし	一部調査区外
第24号土坑	K－79～80	1.2×0.7	18	なし	なし	
第25号土坑	K－80	1.0×0.7	20	なし	なし	
第26号土坑	K～L－81	0.7×0.6	15	なし	第27号土坑	新旧関係は不明確
第27号土坑	K～L－81	1.3×0.8	22		第26号土坑	新旧関係は不明確
第29号土坑	J－83	1.0×1.4	25		なし	
第30号土坑	H－84～85	1.8×1.0	60	なし	なし	
第31号土坑	L－85～86	1.3×1.3	40	なし	なし	一部調査区外
第32号土坑	I－86	1.8×1.4	25	なし	第49号土坑	新旧関係は不明確
第49号土坑	I～J－85	1.5×0.6	12	なし	第32号土坑	新旧関係は不明確
第33号土坑	I－86～87	1.6×1.2	10	なし	なし	
第34号土坑	I－89	1.0×0.8	20	土師器小片1点	なし	
第36号土坑	L－91	1.5×－	30	土師器坏	なし	第46図参照
第37号土坑	L－92	－	30	なし	なし	一部調査区外
第39号土坑	K－93	1.6×1.6	65	土師器坏・甕・須恵器甕・砥石等	なし	第46図参照
第41号土坑	H－94～95	2.5×0.7	20	土師器坏等	なし	第47図参照
第42号土坑	I－96	1.4×1.2	40	なし	なし	
第44号土坑	K－94	1.3×1.1	16	土師器小片約10点	なし	
第45号土坑	L－84	1.2×1.2	35	なし	なし	一部調査区外
第46号土坑	L－84	0.5×0.4	22	なし	なし	
第47号土坑	L－84～85	0.9×0.8	30	なし	なし	
第48号土坑	K～L－85	2.2×－	20	なし	なし	
第50号土坑	G～H－66	1.5×1.9	30	なし	なし	
第51号土坑	G－66	1.0×1.0	16	なし	なし	
第52号土坑	I－84	0.7×0.5	20	なし	なし	
第53号土坑	J－84	1.1×0.6	30	なし	なし	
第55号土坑	H～I－98	1.3×1.3	15	土師器坏・甕等	なし	第47図参照
第56号土坑	E-101		110	土師器甕等	なし	第47図参照
第63号土坑	H－99	0.8×0.9	15	なし	なし	
第64号土坑	I－98～99	1.4×1.0	20	なし	なし	
第65号土坑	L－82		30	なし	なし	
第66号土坑	J～K－85	2.8×－	45	なし	なし	
第67号土坑	J～K－85～86	2.8×－	45	なし	なし	
第68号土坑	J～K－77	0.9×－	25	なし	なし	
第69号土坑	I－86	1.0×0.4	10	なし	なし	



SK1
1層　10YR2/1　黒色土主体　ローム粒5%混入。
2層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム粒10%混入。
3層　10YR4/4　褐色土主体　ローム層。黒褐色土(10YR2/2)20%混入。

SK2
1層　10YR4/4　褐色土主体　ローム中粒20%混入。
2層　10YR2/1　黒色土主体　ローム粒10%混入。
3層　10YR2/3　黒褐色土主体　LB大塊40%混入。ローム粒10%混入。
4層　10YR2/1　黒色土主体　ローム中粒15%混入。

SK3
1層　10YR1.7/1　黒色土主体　ローム中粒10%混入。

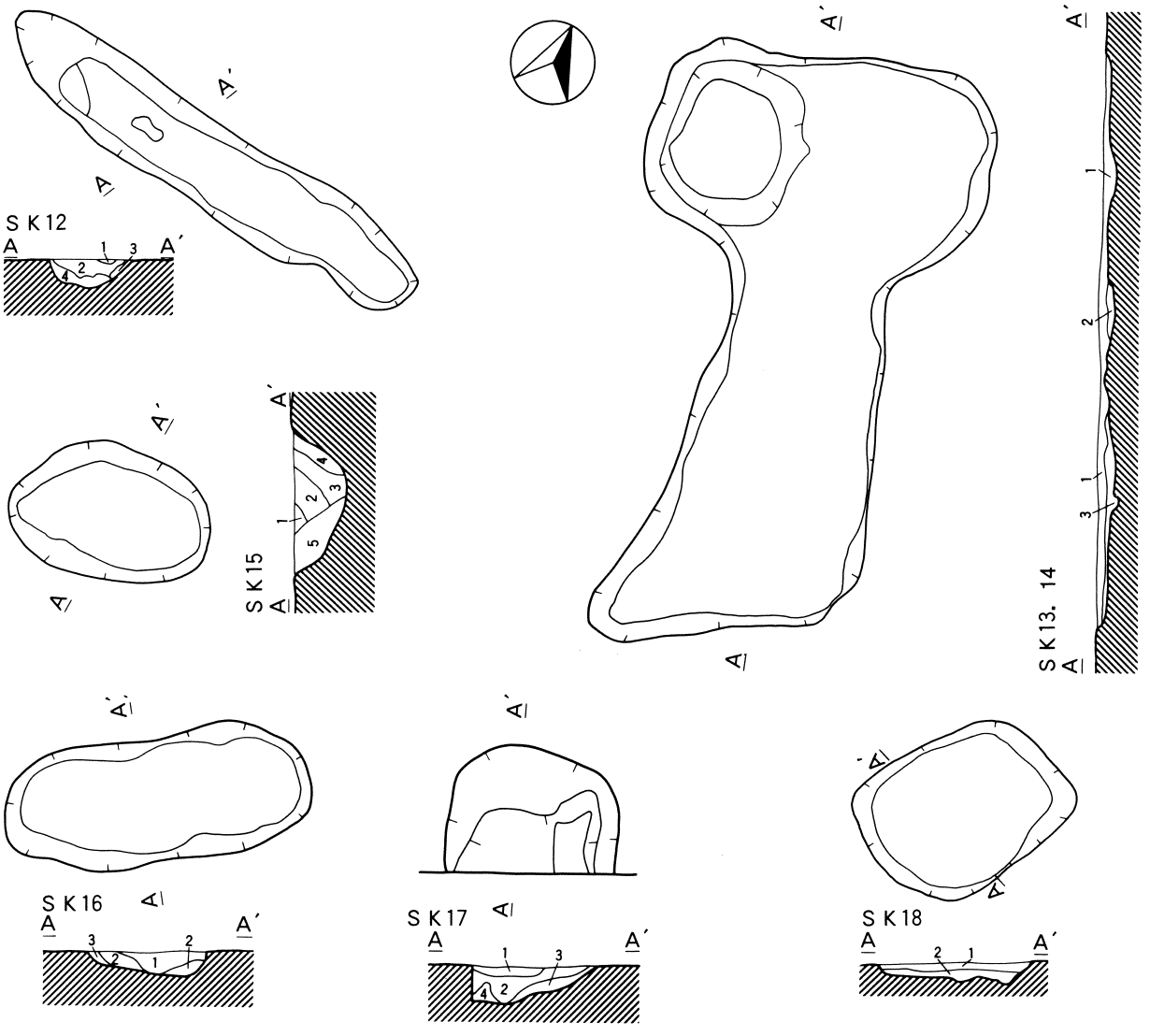
SK4
1層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム粒1%混入。
2層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム粒5%混入。
3層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム粒5%混入。

SK5
1層　10YR1.7/1　黒色土主体　ローム粒1%混入。
2層　10YR3/1　黒褐色土主体　ローム粒30%・黒色土10%混入。
3層　10YR8/8　黄橙色土主体　黒色土10%混入。
4層　5YR7/8　橙色焼土主体　黒色土5%混入。
5層　10YR8/6　黄橙色土主体　黒色土1%混入。

SK6・7
1層　10YR4/3　にぶい黄褐色土主体
2層　10YR5/4　にぶい黄褐色土主体　ローム小塊10%混入。
3層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム粒5%混入。
4層　10YR4/6　褐色土主体　ローム中塊1%混入。
5層　10YR4/2　灰黄褐色土主体　粘性あり。ローム粒5%混入。
6層　10YR4/3　にぶい黄褐色土主体

1：50

第39図　C区第1～11号土坑



SK8
1層　10YR2/1　黒色土主体　しまりあり。ローム中塊5%混入。ローム粒1%混入。
2層　10YR7/8　黄橙色土主体　粘性あり。灰黄褐色土(10YR5/2)1%混入。
3層　10YR3/1　黒褐色土主体　ローム中塊10%混入。
4層　10YR5/8　黄褐色土主体

SK9
1層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム粒1%混入。
2層　10YR2/1　黒色土主体　ローム中粒10%混入。

SK10
1層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム中粒30%混入。ローム大塊10%混入。
2層　10YR5/6　黄褐色土主体　ローム層。暗褐色土(10YR3/4)15%混入。
3層　10YR4/4　褐色土主体　暗褐色土(10YR3/4)50%混入。粘性あり。

SK11
1層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム中粒5%混入。
2層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム中粒20%混入。
3層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム中塊20%混入。

SK12
1層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム粒1%混入。
2層　10YR4/4　褐色土主体　ローム大塊30%混入。
3層　10YR5/6　黄褐色土主体　ローム層。しまりあり。
4層　10YR5/6　黄褐色土主体　ローム層。褐色土(10YR4/4)20%混入。

SK13・14
1層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム粒20%混入。
2層　10YR5/8　黄褐色土主体　黒褐色土(10YR2/2)20%混入。
3層　10YR4/6　褐色土主体　黒褐色土(10YR2/2)10%混入。ローム中粒20%混入。

SK15
1層　10YR2/2　黒褐色土主体
2層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム粒5%混入。しまりややあり。粘性あり。
3層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム粒5%混入。暗褐色土(10YR3/4)10%混入。
4層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム粒10%混入。ローム大塊30%混入。
5層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム粒10%混入。

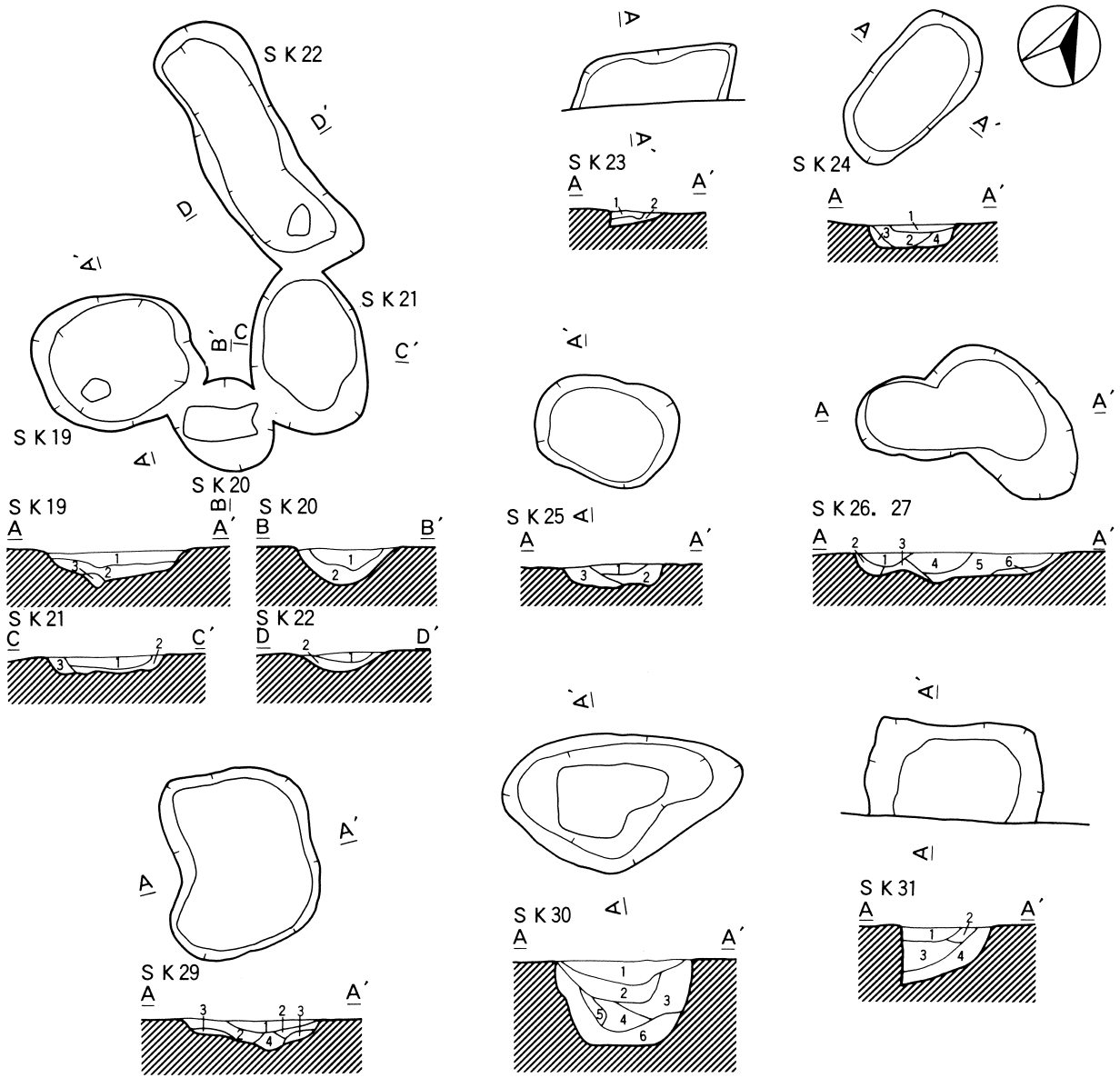
SK16
1層　10YR4/4　褐色土主体　ローム大塊30%混入。
2層　10YR5/3　黄褐色土主体　ローム層。
3層　10YR4/4　褐色土主体　ローム粒10%混入。

SK17
1層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム中粒10%混入。
2層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム中粒20%・ローム中塊20%混入。
3層　10YR5/8　黄褐色土主体　ローム層。黒褐色土(10YR2/3)10%混入。

SK18
1層　10YR4/4　褐色土主体　ローム粒10%混入。
2層　10YR4/4　褐色土主体　ローム中粒20%混入。ローム大塊10%混入。

1：50

第40図　C区第12～18号土坑



SK19
1層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム中粒15%混入。
2層　10YR5/6　黄褐色土主体　ローム層。暗褐色土(10YR3/3)20%混入。
3層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム中塊40%混入。

SK20
1層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム粒5%混入。
2層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム中粒20%混入。

SK21
1層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム中粒20%混入。
2層　10YR6/8　明黄褐色土主体　ローム層。暗褐色土(10YR3/4)20%混入。
3層　10YR6/8　明黄褐色土主体　ローム層。

SK22
1層　10YR4/4　褐色土主体　ローム粒20%混入。
2層　10YR4/4　褐色土主体　ローム粒30%・ローム大塊20%混入。

SK24
1層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム粒10%混入。
2層　10YR4/4　褐色土主体　ローム中粒10%混入。
3層　10YR5/8　黄褐色土主体　ローム層。褐色土(10YR4/4)20%混入。
4層　10YR4/6　褐色土主体　黄褐色土(10YR5/8)20%混入。黒褐色土(10YR2/3)10%混入。

SK23
1層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム粒10%混入。
2層　10YR5/6　黄褐色土主体　ローム層。暗褐色土(10YR3/4)15%混入。

SK25
1層　10YR4/4　褐色土主体　ローム大粒10%混入。
2層　10YR4/4　褐色土主体　ローム小塊30%混入。
3層　10YR4/6　褐色土主体　ローム大塊50%混入。

SK26・27
1層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム中塊20%混入。
2層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム粒10%・ローム大塊10%混入。
3層　10YR5/6　黄褐色土主体　ローム層。暗褐色土(10YR3/3)30%混入。
4層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム中粒15%混入。しまりあり。
5層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム中粒10%・ローム小塊10%混入。
6層　10YR5/8　黄褐色土主体　ローム層。しまりややあり。

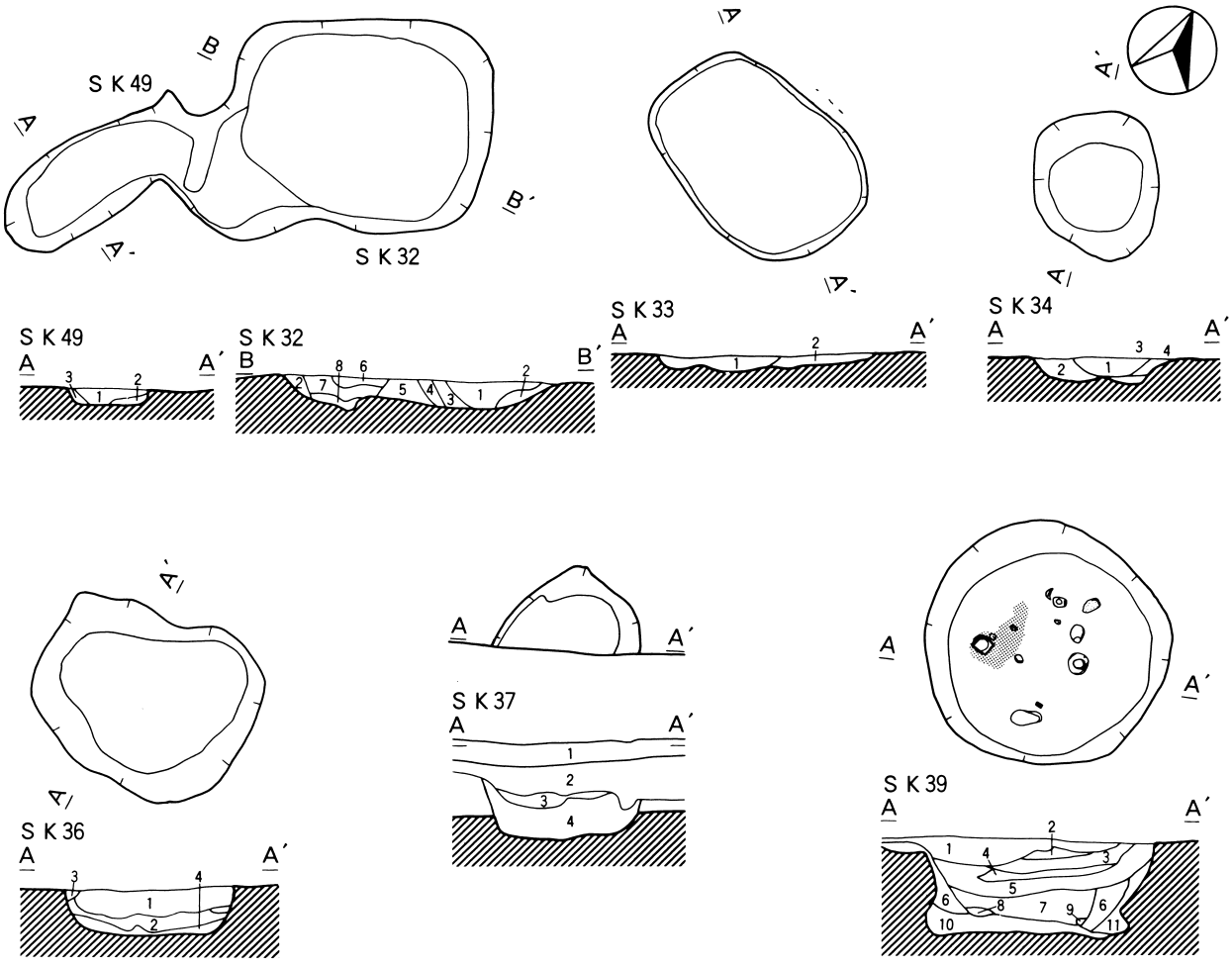
SK29
1層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム粒5%混入。
2層　10YR4/4　褐色土主体　ローム粒7%混入。
3層　10YR5/8　黄褐色土主体　ローム層。
4層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム粒2%混入。
5層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム中粒5%混入。

SK30
1層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム粒15%・炭化物粒1%混入。
2層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム粒10%・炭化物中粒5%混入。
3層　10YR4/4　褐色土主体　黒褐色土(10YR2/3)30%混入。
　　ローム中粒30%混入。
4層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム中粒10%・炭化物粒1%混入。
5層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム中粒30%・炭化物粒2%混入。
6層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム中粒10%・ローム大塊40%混入。

SK31
1層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム粒5%混入。
2層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム粒3%混入。
3層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム粒5%混入。
4層　10YR6/6　明黄褐色土主体　黒褐色土(10YR2/3)30%混入。

1：50

第41図　C区第19～27. 29～31号土坑



SK32
1層　10YR4/4　褐色土主体　ローム粒10%混入。
2層　10YR5/8　黄褐色土主体　ローム層。しまりあり。
3層　10YR3/4暗褐色土主体　ローム粒5%・ローム小塊10%・炭化物粒1%混入。
4層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム中粒2%混入。
5層　10YR4/4　褐色土主体　ローム中塊20%混入。
6層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム粒5%混入。
7層　10YR4/4　褐色土主体　ローム粒5%・ローム小塊10%混入。
8層　10YR6/8　明黄褐色土主体　ローム層。しまり非常にあり。

SK49
1層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム中粒10%混入。
2層　10YR5/8　黄褐色土主体　ローム層。
3層　10YR4/6　褐色土主体　ローム粒7%混入。

SK33
1層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム中粒20%混入。
2層　10YR6/8　明黄褐色土主体　黒褐色土(10YR2/3)30%混入。

SK34
1層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム中粒5%・炭化物中粒1%混入。
2層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム粒5%混入。
3層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム小塊40%混入。
4層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム粒10%・ローム大粒20%混入。

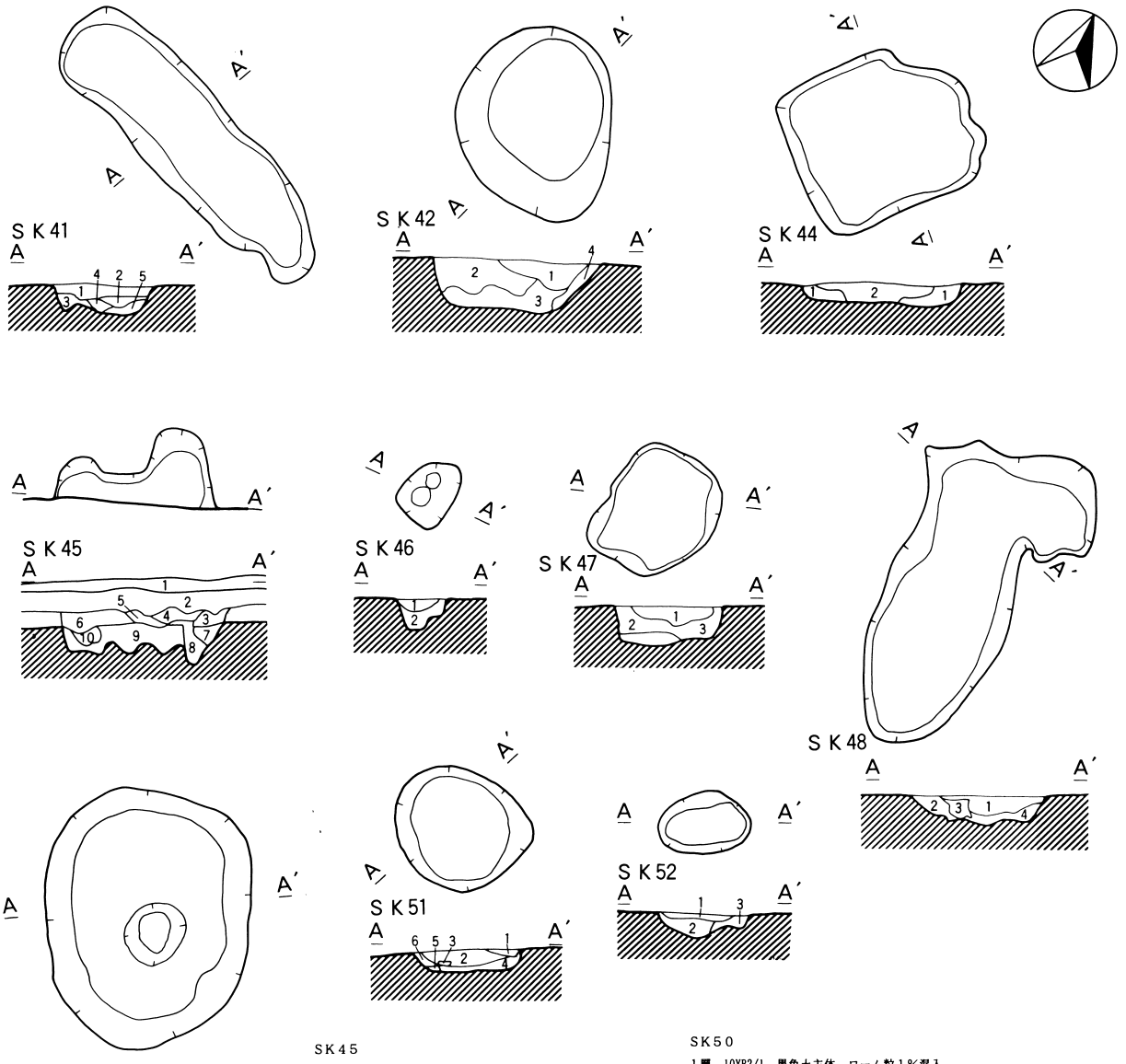
SK36
1層　10YR4/4　褐色土主体　ローム中粒10%・ローム中塊20%混入。
2層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム中塊15%混入。
3層　10YR4/4　褐色土主体　ローム粒5%混入。
4層　10YR6/6　明黄褐色土主体　ローム層。

SK37
1層　10YR5/6　黄褐色土主体　黒褐色土(10YR2/3)20%混入。
2層　10YR2/1　黒色土主体　ローム粒10%混入。
3層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム大粒15%混入。
4層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム中粒10%・ローム中塊20%混入。

SK39
1層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム粒1%・小礫15%混入。
2層　10YR5/4　にぶい黄褐色砂土主体　小礫40%混入。
3層　10YR4/4　褐色土主体　ローム大粒10%・小礫2%混入。
4層　10YR4/4　褐色砂土主体　小礫10%混入。
5層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム粒5%・ローム大粒5%混入。
6層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム中塊30%混入。粘性ややあり。
7層　10YR4/4　褐色土主体　ローム小塊15%・炭化物中粒1%混入。
8層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム中粒10%・炭化物小塊15%・焼土30%・火山灰1%混入。
9層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム粒5%・炭化物大粒10%・焼土中粒2%混入。
10層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム粒5%・ローム大塊10%・7・10層界に火山灰10%混入。
11層　10YR4/4　褐色土主体　ローム小塊40%混入。

1：50

第42図　C区第32～34. 36. 37. 39. 49号土坑



SK45
1層　表土
2層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム粒5%混入。
3層　10YR4/4　褐色土主体　ローム中塊10%混入。
4層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム中粒15%混入。
5層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム中粒20%混入。
6層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム中粒10%混入。
7層　10YR5/6　黄褐色土主体　ローム層。しまりあり。
8層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム中粒20%混入。
9層　10YR5/6　黄褐色土主体　ローム層。褐色土(10YR4/4)15%混入。
10層　10YR6/6　明黄褐色土主体　ローム層。

SK50
1層　10YR2/1　黒色土主体　ローム粒1%混入。
2層　10YR4/4　褐色土主体　黒色土(10YR2/1)20%混入。ローム粒2%混入。
3層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム粒2%混入。
4層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム粒5%混入。

SK51
1層　10YR2/3　黒褐色土主体　褐色土(10YR4/4)40%混入。ローム粒10%混入。
2層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム粒5%混入。
3層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム粒3%混入。
4層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム粒5%混入。ローム下部に30%混入。
5層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム粒5%・ローム大粒20%混入。
6層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム粒5%混入。

SK41
1層　10YR6/2　灰黄褐色土主体　ローム粒5%混入。
2層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム中塊1%混入。
3層　10YR4/3　にぶい黄褐色土主体　ローム大塊30%混入。
4層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム小塊20%混入。
5層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム粒20%混入。

SK46
1層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム中塊40%混入。
2層　10YR5/6　黄褐色土主体　ローム層。

SK52
1層　10YR1.7/1　黒色土主体　ローム粒1%混入。
2層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム粒30%混入。
3層　10YR2/3　黒褐色土主体　暗褐色土(10YR3/4)20%混入。ローム粒10%混入。

SK42
1層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム中粒10%・ローム大塊10%混入。
2層　10YR4/4　褐色土主体　ローム粒5%混入。
3層　10YR5/6　黄褐色土主体　ローム層。褐色土(10YR4/4)20%混入。
4層　10YR5/8　黄褐色土主体　ローム層。褐色土(10YR4/4)30%混入。

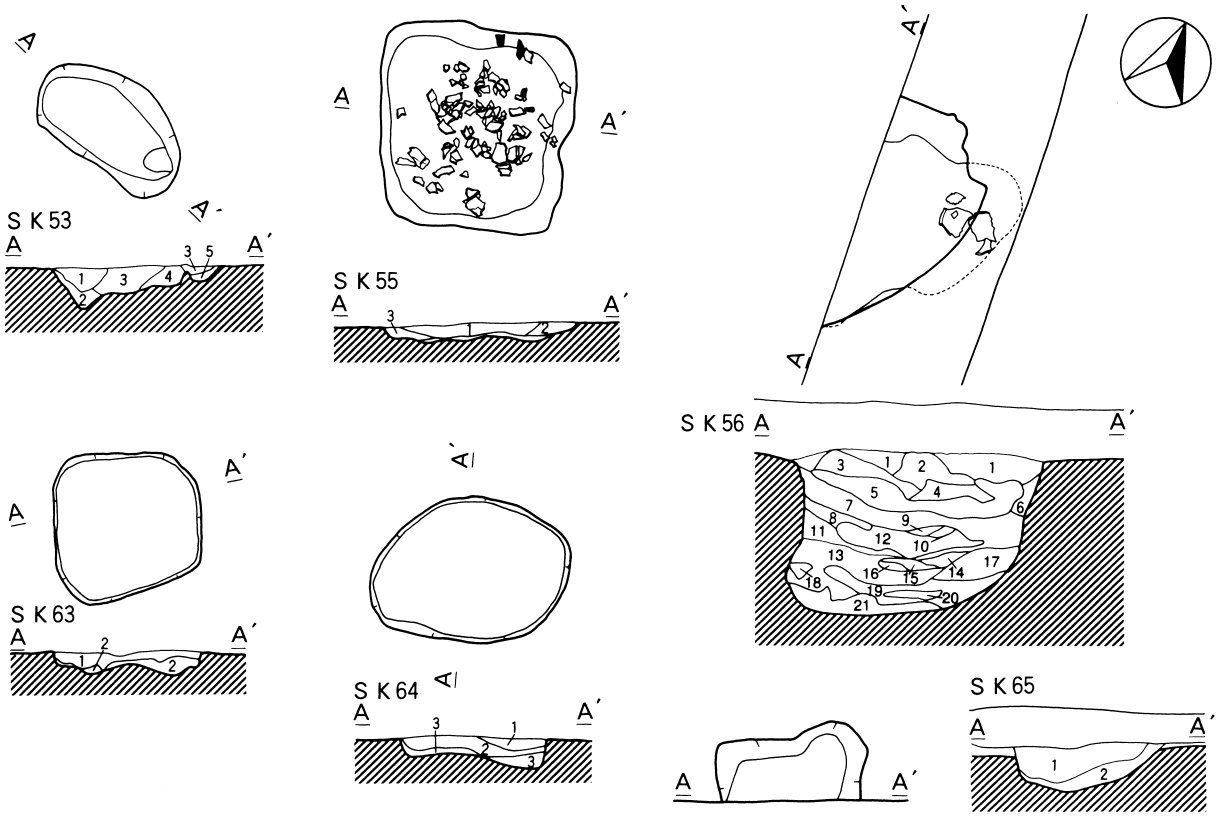
SK47
1層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム粒5%・ローム小塊5%・炭化物粒1%混入。
2層　10YR4/4　褐色土主体　ローム小塊30%混入。
3層　10YR5/6　黄褐色土主体　ローム層。

SK44
1層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム粒10%混入。
2層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム大塊50%混入。しまり非常にあり。

SK48
1層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム中粒10%・ローム中塊10%・軽石大塊10%混入。
り。
2層　10YR5/8　黄褐色土主体　ローム層。軽石中粒5%混入。
3層　10YR4/4　褐色土主体　ローム中粒15%混入。
4層　10YR4/4　褐色土主体　ローム中粒10%・ローム中塊20%混入。

1：50

第43図　C区第41．42．44～48．50～52号土坑



SK53
1層　10YR1.7/1　黒色土主体　ローム中粒5%混入。
2層　10YR4/6　褐色土主体
3層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム大粒20%・暗褐色土(10YR3/3)10%混入。
4層　10YR4/4　褐色土主体　暗褐色土(10YR3/3)20%混入。
5層　10YR1.7/1　黒色土主体　ローム粒1%混入。

SK55
1層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム粒10%・ローム小塊10%混入。
2層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム粒30%混入。
3層　10YR2/1　黒色土主体　ローム粒10%・炭化物粒30%混入。遺物を含む。

SK63
1層　10YR2/1　黒色土主体　ローム小塊(10YR8/6)5%混入。
2層　10YR8/8　黄橙色土主体　灰黄褐色土(10YR5/2)10%混入。

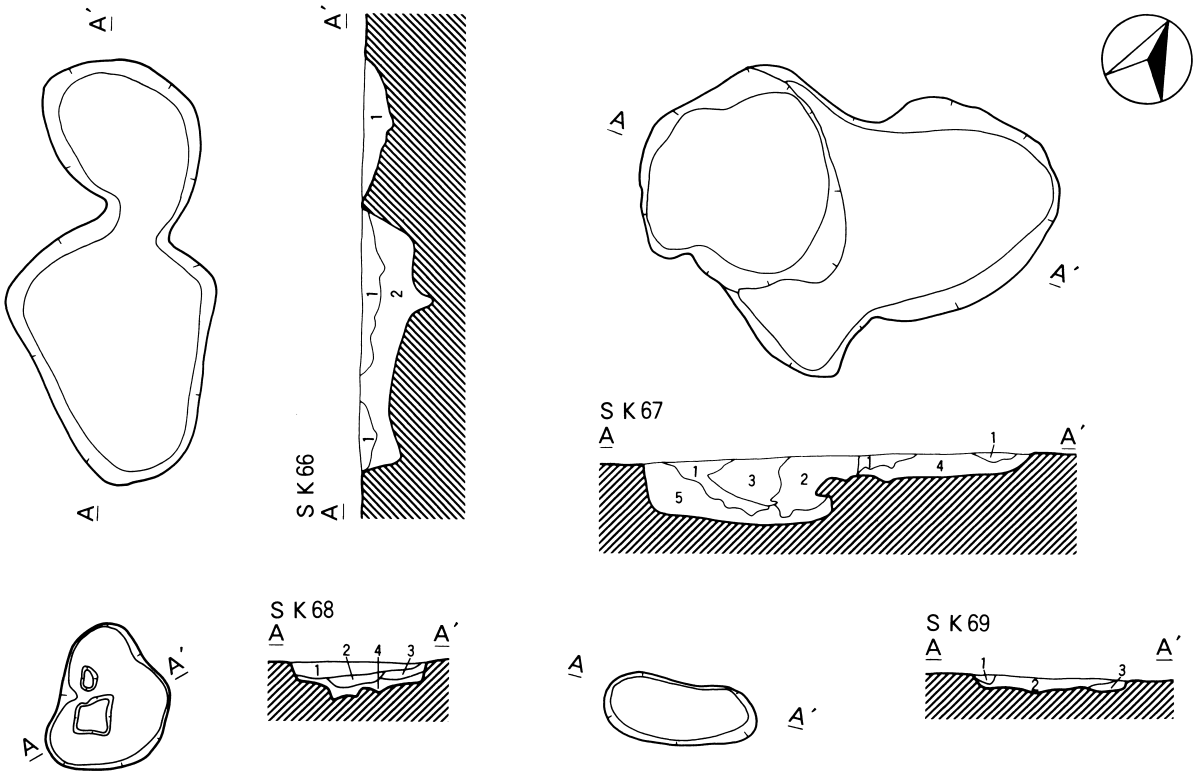
SK64
1層　10YR2/1　黒色土主体　ローム粒1%混入。
2層　10YR5/4　にぶい黄褐色土主体　ローム中塊(10YR7/6)30%混入。
3層　10YR5/4　にぶい黄褐色土主体

SK65
1層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム大塊(10YR4/3)10%・ローム中塊(10YR8/2)5%混入。
2層　10YR6/8　明黄褐色土主体　褐灰色土(10YR4/1)5%混入。

SK56
1層　10YR5/3　にぶい黄褐色土主体　ローム大塊(10YR8/8)5%・ローム中塊(10YR7/8)5%・ローム小塊(10YR7/6)5%混入。
2層　10YR5/2　灰黄褐色土主体　ローム中塊(10YR7/6)5%・ローム小塊(10YR8/6)5%・灰白色(10YR8/2)10%混入。
3層　10YR5/2　灰黄褐色土主体　ローム中塊(10YR6/8)30%・黒褐色土(10YR3/1)中塊5%混入。
4層　10YR5/3　にぶい黄褐色土主体　ローム中塊(10YR8/6)10%・木炭5%混入。
5層　10YR8/3　浅黄橙色土主体　木炭10%・黄橙色土(10YR8/6)中塊30%混入。
6層　10YR6/4　にぶい黄橙色土主体
7層　10YR5/2　灰黄褐色土主体　黄橙色土(10YR6/8)中塊10%・浅黄橙色土(10YR8/4)中塊10%・灰白色土(10YR8/1)小塊5%混入。
8層　10YR7/4　にぶい黄橙色土主体　灰黄褐色土(10YR6/2)30%混入。
9層　2.5Y8/8　黄色土主体
10層　10YR4/1　褐灰色土主体
11層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム粒(10YR8/2)5%混入。
12層　10YR2/1　黒色土主体　明黄褐色土(10YR7/6)20%・明褐色土(7.5YR5/6)10%混入。
13層　10YR8/8　黄橙色土主体
14層　10YR3/1　黒褐色土主体　浅黄橙色土(10YR8/3)5%混入。
15層　2.5YR4/3　にぶい赤褐色土主体　明黄褐色土(10YR6/8)30%・灰白色土(10YR7/1)10%混入。
16層　10YR4/3　にぶい黄褐色土主体
17層　10YR5/8　黄褐色土主体　黒褐色土(10YR2/3)20%混入。
18層　10YR3/3　暗褐色土主体　明赤褐色土(2.5YR5/6)40%混入。
19層　10YR2/1　黒色土主体
20層　10YR7/4　にぶい黄橙色土主体
21層　10YR6/4　にぶい黄橙色土主体　褐灰色土(10YR4/1)30%混入。

1：50

第44図　C区第53. 55. 56. 63～65号土坑



SK66
1層　10YR6/3　にぶい黄橙色土主体　褐灰色土(10YR4/1)10%混入。
2層　10YR7/8　黄橙色土主体　黒色土(10YR2/1)10%混入。

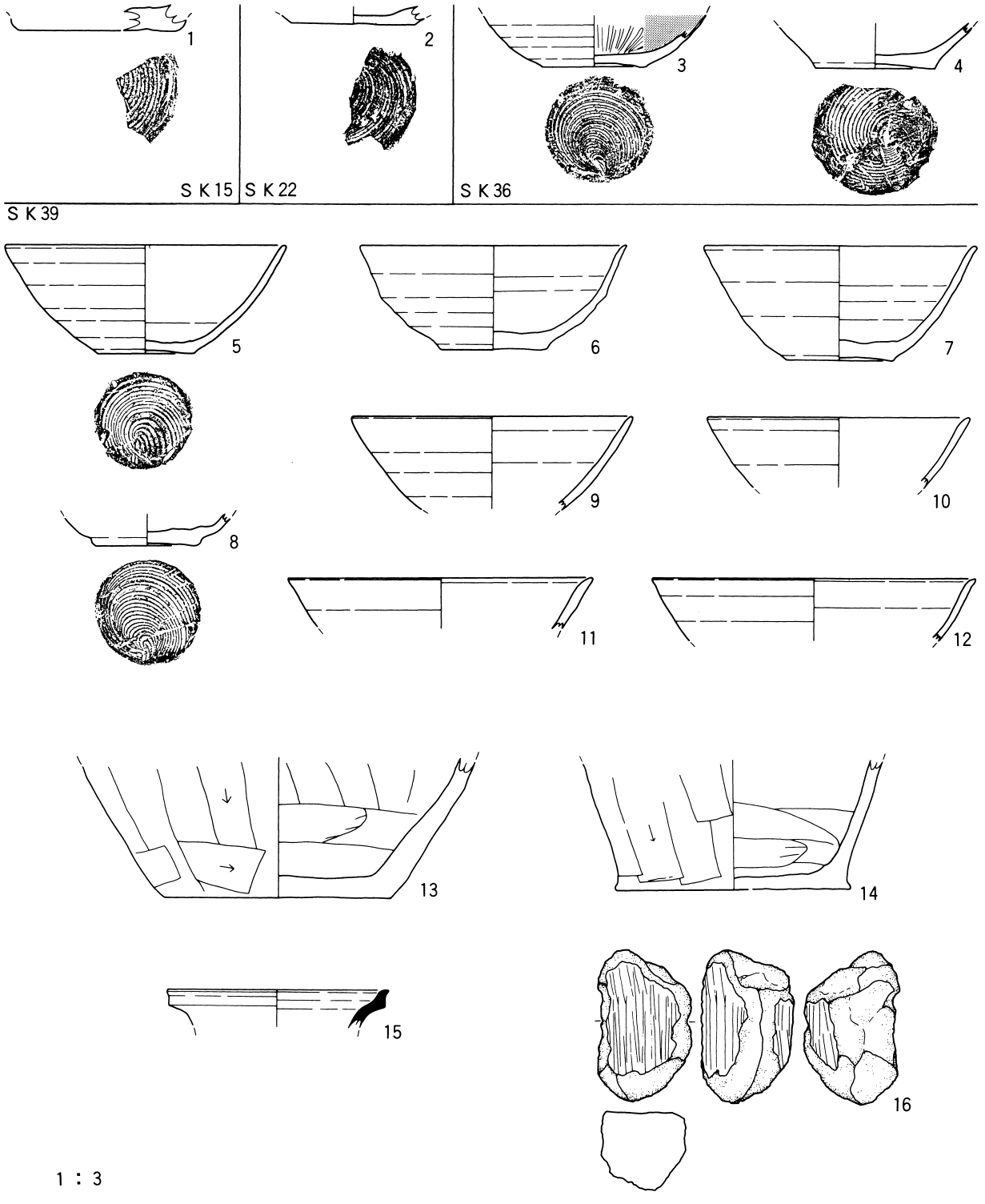
SK67
1層　10YR3/2　黒褐色土主体　ローム中塊(10YR8/3)10%混入。
2層　10YR4/1　褐灰色土主体　灰白色土(10YR8/1)30%・明黄褐色土(10YR6/6)中塊10%混入。
3層　10YR8/6　黄橙色土主体
4層　10YR5/3　にぶい黄褐色土主体　ローム大塊(10YR8/1)5%・褐灰色土(10YR4/1)5%・ローム小塊(10YR5/8)5%混入。
5層　10YR7/4　にぶい黄橙色土主体

SK68
1層　10YR2/3　黒褐色土主体　ローム中粒10%混入。
2層　10YR4/6　褐色土主体　暗褐色土(10YR3/4)5%混入。
3層　10YR3/4　暗褐色土主体　ローム小塊5%・ローム粒10%混入。
4層　10YR6/6　明黄褐色土主体　ローム層。

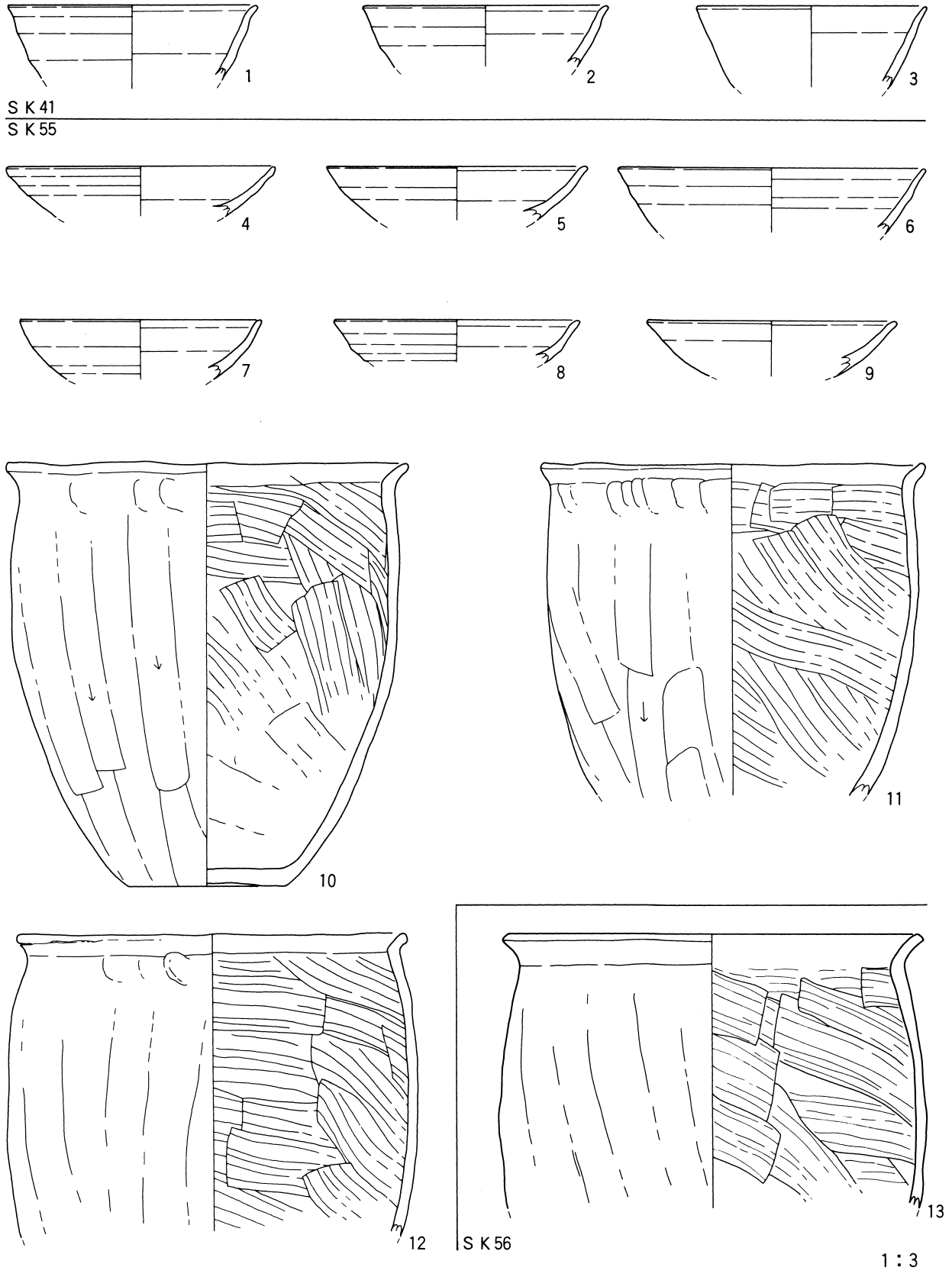
SK69
1層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム粒5%混入。
2層　10YR3/3　暗褐色土主体　ローム中粒20%・炭化物粒1%混入。
3層　10YR6/6　明黄褐色土主体　暗褐色土(10YR3/3)10%混入。

1：50

第45図　C区第66～69号土坑



第46図　C区土坑（SK15. 22. 36. 39）出土遺物



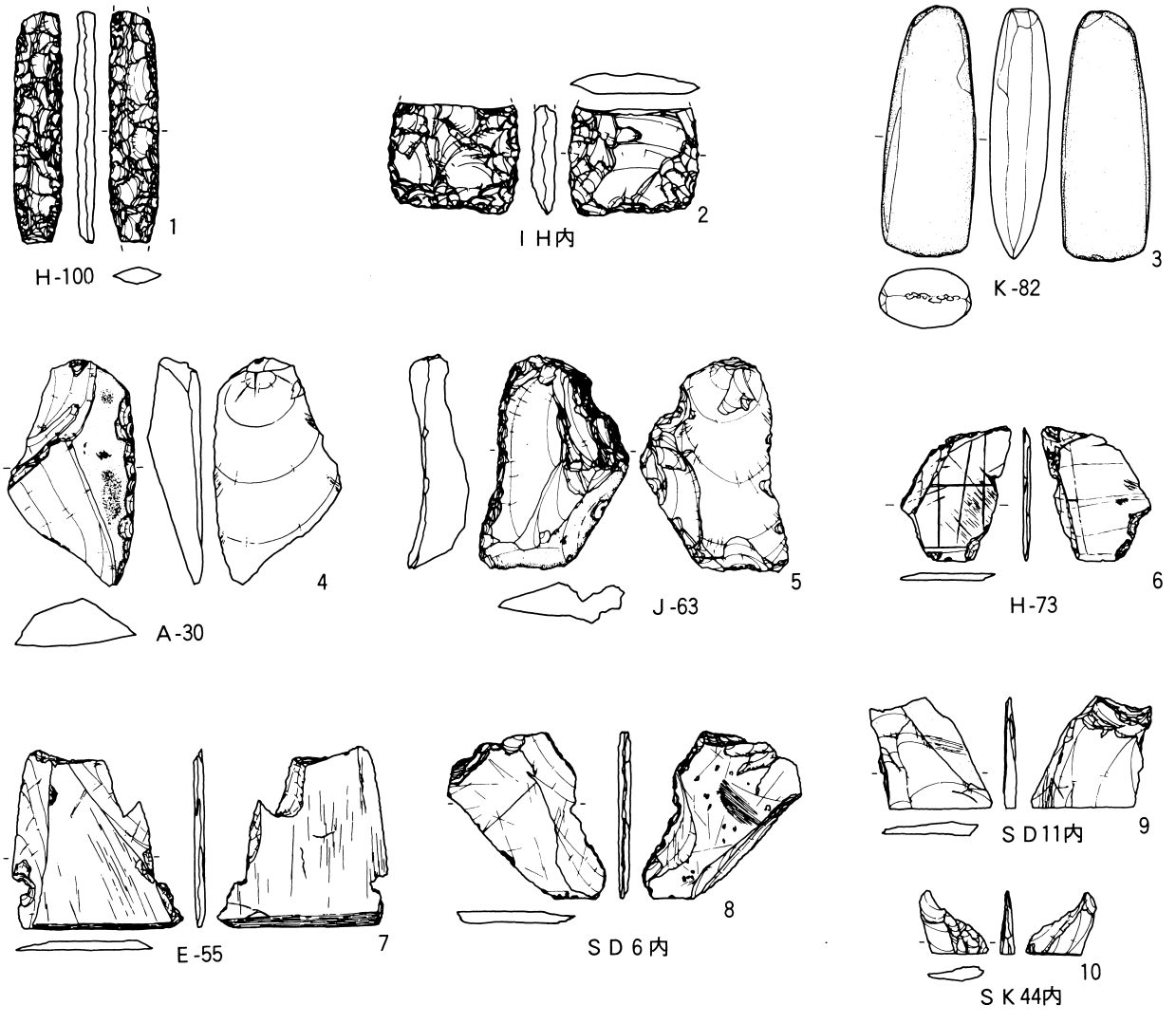
第47図　C区土坑（S K 41. 55. 56）出土遺物

第３節　縄文時代の遺構と遺物

Ｃ区の縄文時代は石器が出土したのみである。定型的な石器が少なく、土器や遺構も確認されていないので、それぞれの石器の帰属時期を推定するのは困難であるが、１は形態的に草創期のものである可能性も考えられる。６～10は不明な点が多く、他時期のものである可能性も否定できない。以下個々について概略を記す。

１は両面加工の柳葉形の尖頭器である。両端は折れにより欠損しているが、基部を作出しているのがわかる。珪質頁岩製。２は両面加工の打製石斧で基部側を大きく欠損している。珪質頁岩製。３は全面研磨された磨製石斧で、刃部に使用に伴うものと思われる刃こぼれが観察される。砂岩製。４、５は削器で、共に縦長剥片を素材とし、一側縁に二次加工が施されている。珪質頁岩製。６～10は方向性を持った擦痕が認められるので、持ち砥石または磨製石斧の擦り切り具と思われるが不明確である。全て粘板岩製。

（川口　潤）



１：３

第48図　Ｃ区遺構外出土石器

第4節　その他の時代の遺構と遺物

平安時代以外の遺構は出土遺物も少なく、時代を特定するのは困難であったが、以下に示した各遺構は、覆土の状況等から平安時代以降のものと推定される。特に木の小枝が敷きつめられている溝は、その特徴から暗渠の中でも粗朶（そだ）暗渠の範疇に属するものと思われるため、近世以降の遺構であろうと推定される。

この他にも平安期以外の時代の遺構が含まれている可能性は残されるが、時期決定の決め手に欠ける。

第1号溝

［位置］　B－26からH－35グリッドにかけて確認されている。

［重複］　第2号溝跡と重複していたと思われるが、重複部分に攪乱があるため直接新旧関係を読み取ることはできない。覆土の状態等から類推すると本溝跡の方が新しいものと思われる。

［平面形・規模］　両端が調査区外にかかるため全貌は不詳であるが、幅は約60cm、確認面からの深さは約30cmである。北から南へ緩く傾斜する。主軸方向はS－107度－Eである。

［遺物］　出土していない。

第3号溝

［位置］　D－39からH－37グリッドにかけて確認されている。

［重複］　なし。

［平面形・規模］　両端は調査区外にかかるため全貌は不詳であるが、確認面での計測値は幅約50cm、深さ約20cmである。溝の高低差は明確には看取されない。主軸方向はS－7度－Eである。

［遺物］　本溝跡に伴うものと判断される遺物は出土していない。

第4号溝

［位置］　E－47からG－50グリッドにかけて確認されている。

［重複］　第5号溝跡と重複している。明瞭な切り合い関係はなく、ほぼ同時期のものと推定されることから、重複というよりは合流していたものと思われる。

［平面形・規模］　確認面での計測値は幅約60～90cm、深さ20～30cmである。溝は北から南へ緩く傾斜している。主軸方向はS－100度－Eである。

［遺物］　土師器小片が2点出土しているが、混入によるものと思われる。

［その他］　粗朶暗渠と思われる。

第5号溝

［位置］　F－52からJ－50グリッドにかけて確認されている。

［重複］　第4号溝跡と重複しているが先述のように同時期のものと思われる。また、調査区境界付近での確認であるため不明瞭であるが、第6号溝跡とも重複していたようである。両者の関係も同時

期と推定される。

［平面形・規模］　確認面での計測値は幅約60～90cm、深さ20～30cmである。溝は北から南へ緩く傾斜している。主軸方向はS－3度－Wである。

［遺物］　出土していない。

［その他］　粗朶暗渠と思われる。

第6号溝

［位置］　F－52からK－56グリッドにかけて確認されている。

［重複］　調査区境界付近であるため不明瞭であるが第5号溝跡と重複していたようである。また、調査区外であるため推定の域を出ないが、覆土の状況等から第7号溝跡とも合流していた可能性が高い。これらは全て同時期と思われる。

［平面形・規模］　確認面での計測値は幅約60～90cm、深さ20～30cmである。溝は北から南へ緩く傾斜している。主軸方向はS－107度－Eである。

［遺物］　出土していない。

［その他］粗朶暗渠と思われる。

第7号溝

［位置］　G－59からK－57グリッドにかけて確認されている。

［重複］　第8号溝跡と重複しているが同時期のものと推定される。先述のように調査区外で第7号溝跡と重複していた可能性も高い。

［平面形・規模］　確認面での計測値は幅約60～100cm、深さ30cm前後である。溝は北から南へ緩く傾斜している。主軸方向はS－6度－Wである。

［遺物］　出土していない。

［その他］粗朶暗渠と思われる。

第8号溝

［位置］　J－58からK－60グリッドにかけて確認されている。

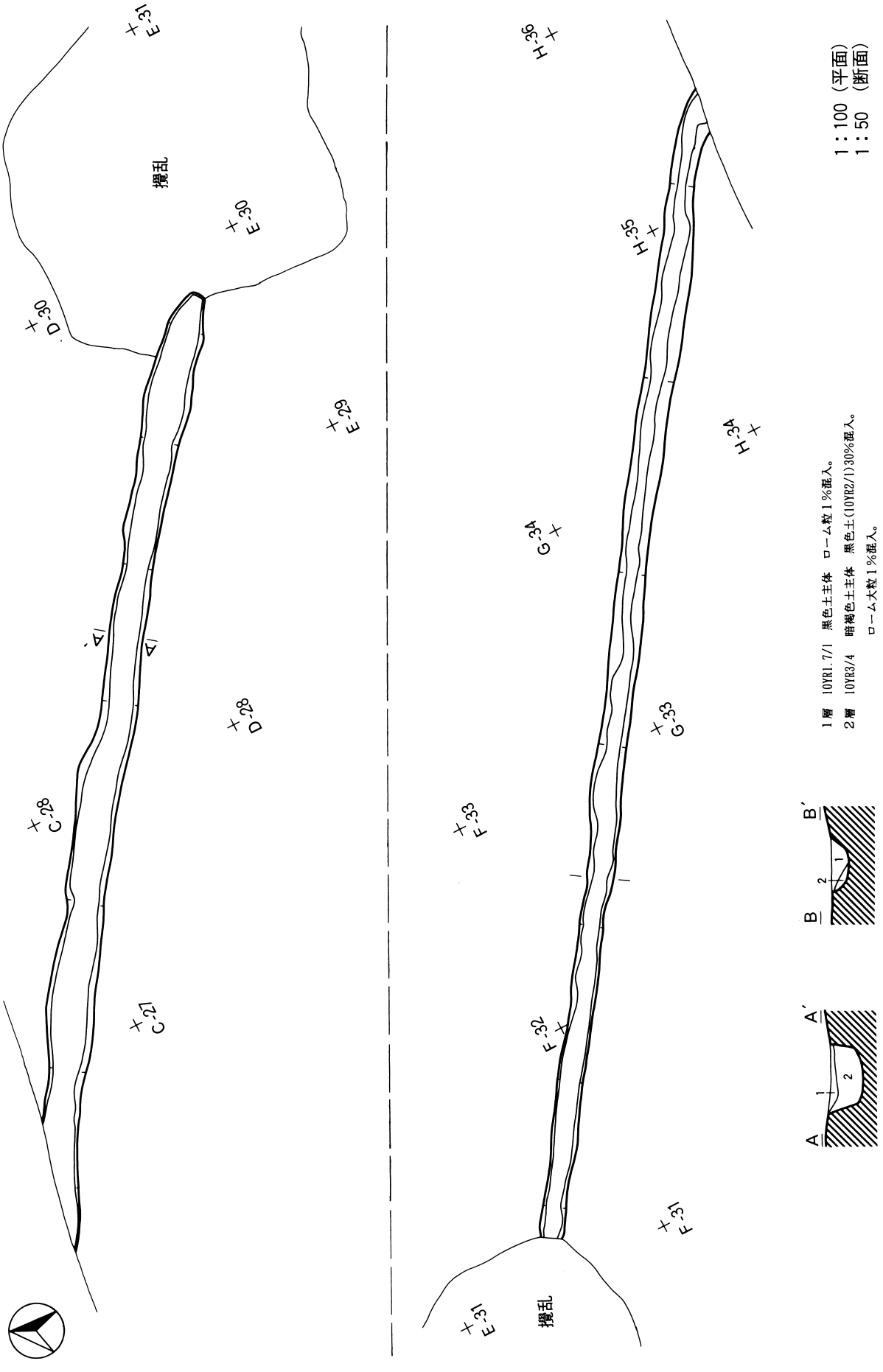
［重複］　第7号溝跡と第9号溝跡の間で確認されており、西端は第7号溝跡に、東端は第9号溝跡に重複している。全て同時期のものと推定される。第9号溝跡との合流部には土坑状の掘り込みが看取される。

［平面形・規模］　確認面での計測値は幅約60～100cm、深さ20cm前後である。溝は西から東へ緩く傾斜している。主軸方向はS－89度－Eである。

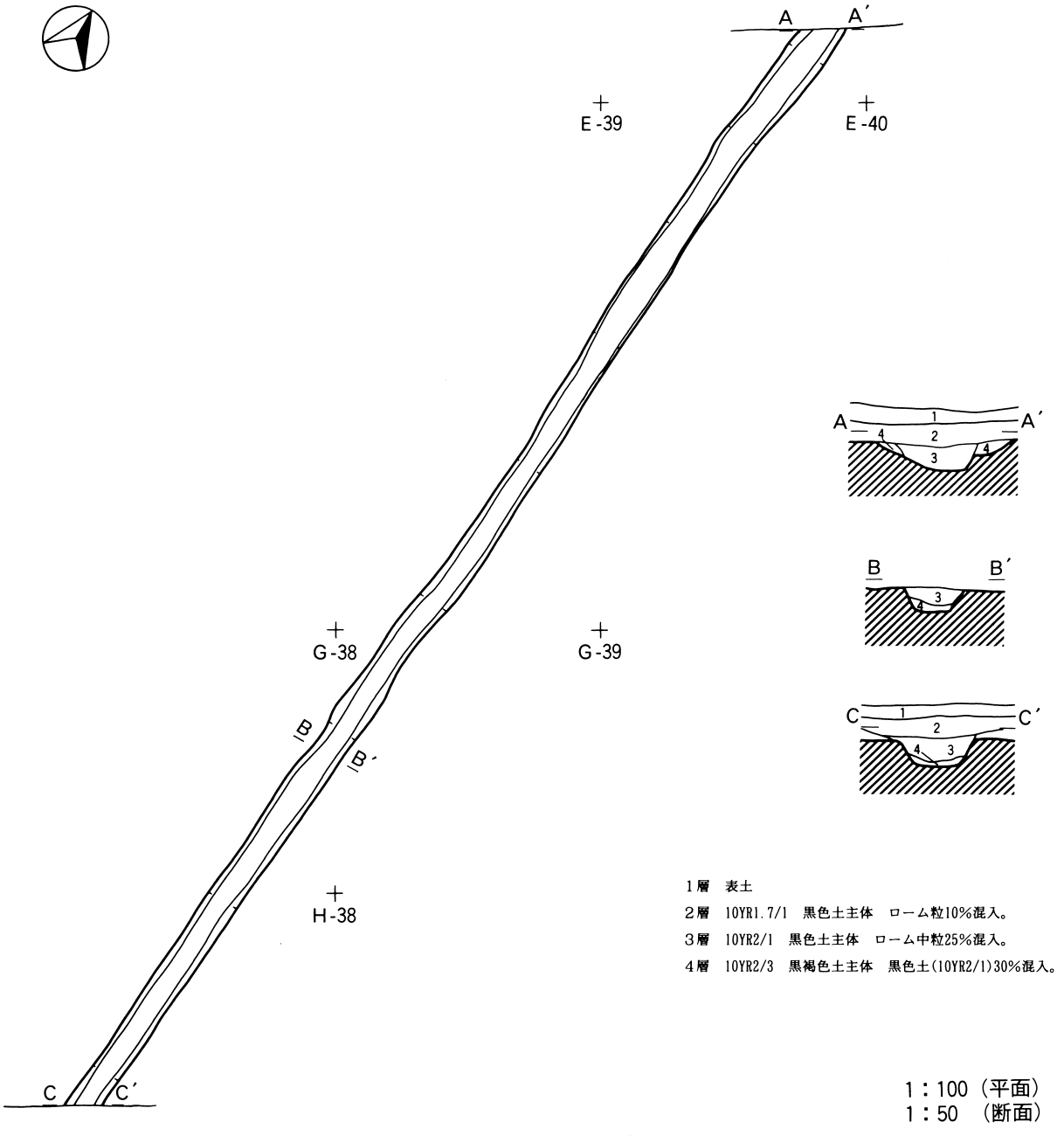
［遺物］　本溝跡に伴うものと判断される遺物は確認されていない。

［その他］粗朶暗渠と思われる。

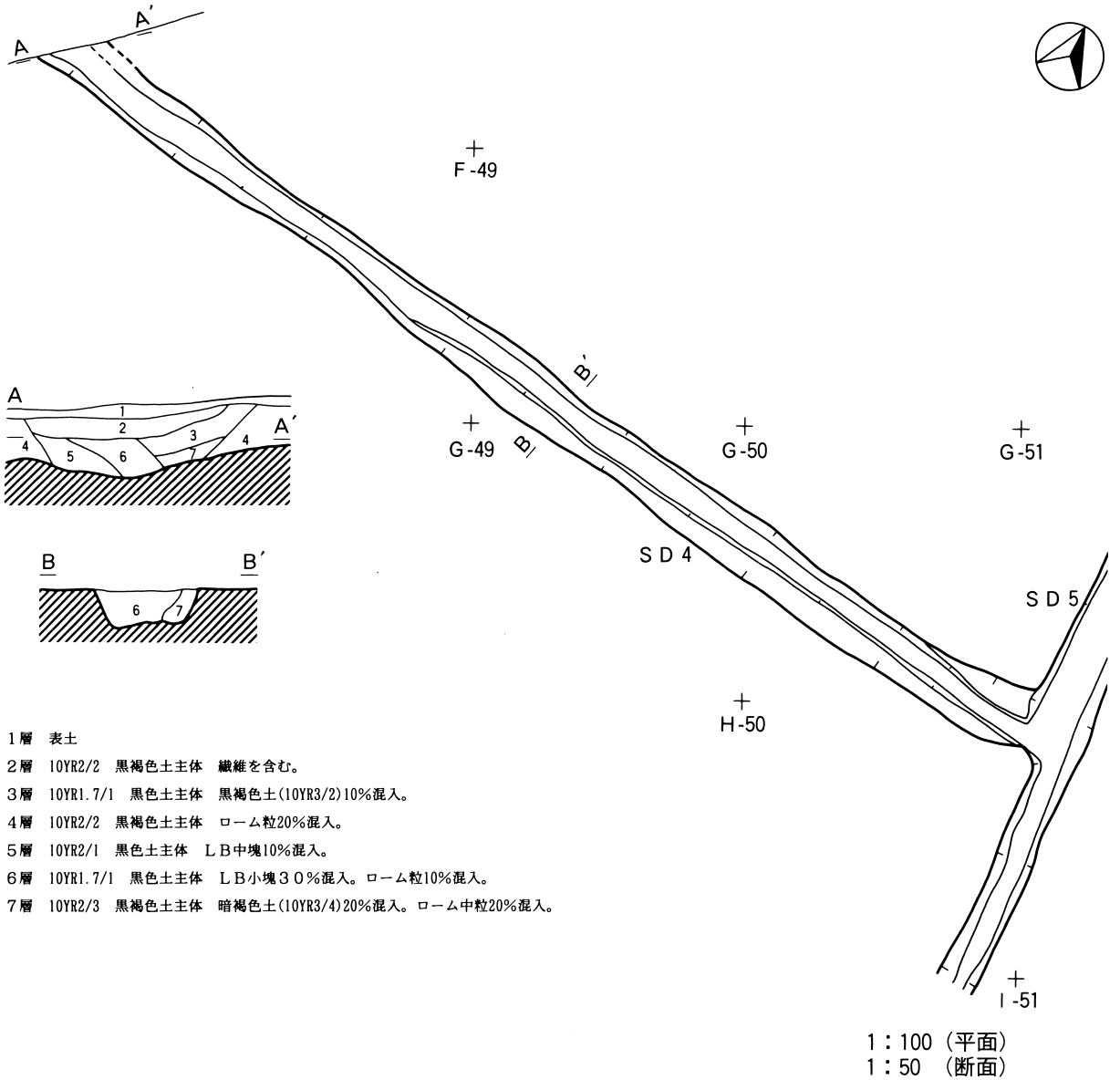
(川口　潤・七戸将光)



第49図 C区第1号溝跡



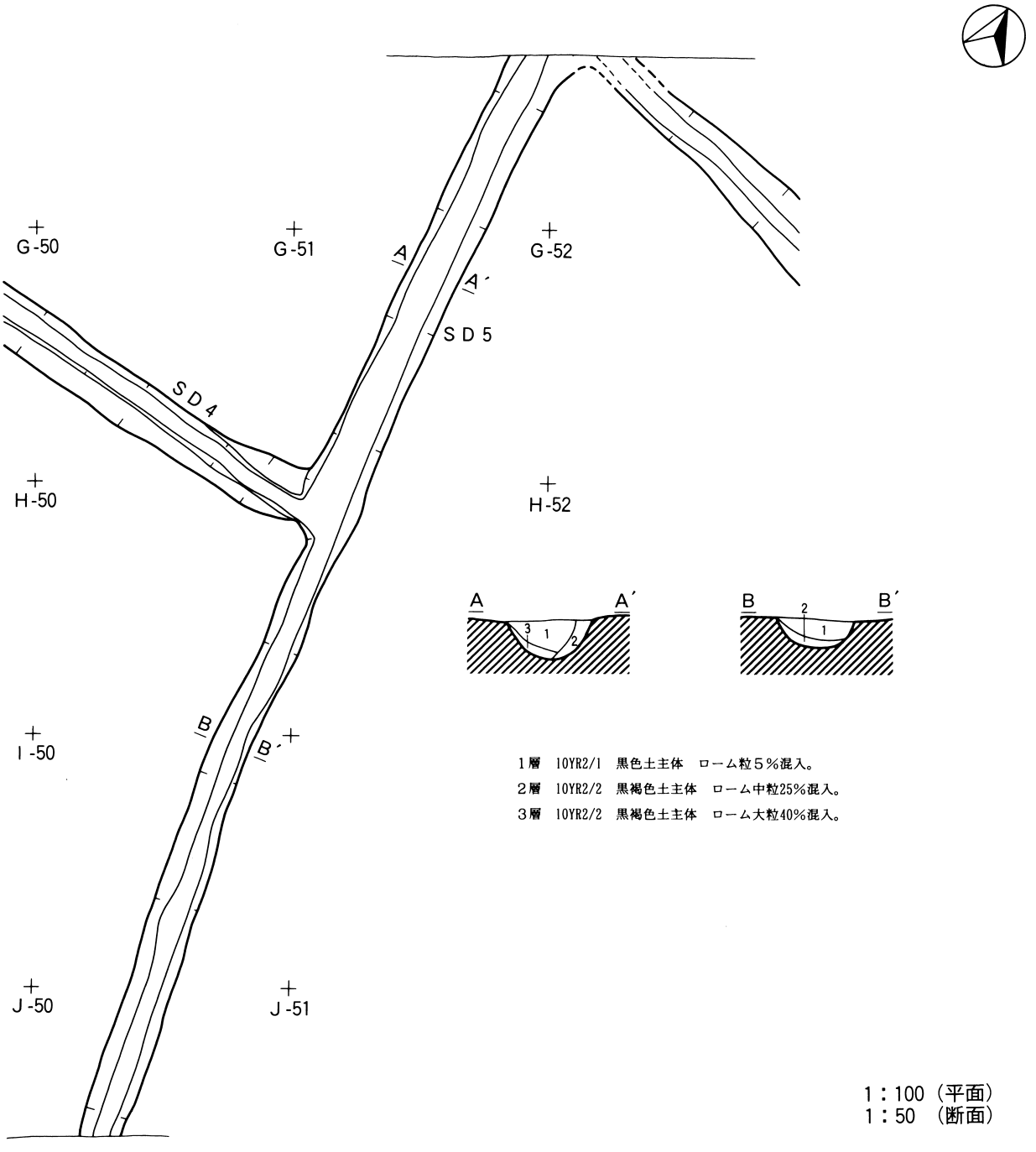
第50図　C区第3号溝跡



1層　表土
2層　10YR2/2　黒褐色土主体　繊維を含む。
3層　10YR1.7/1　黒色土主体　黒褐色土(10YR3/2)10%混入。
4層　10YR2/2　黒褐色土主体　ローム粒20%混入。
5層　10YR2/1　黒色土主体　ＬＢ中塊10%混入。
6層　10YR1.7/1　黒色土主体　ＬＢ小塊３０%混入。ローム粒10%混入。
7層　10YR2/3　黒褐色土主体　暗褐色土(10YR3/4)20%混入。ローム中粒20%混入。

1：100（平面）
1：50　（断面）

第51図　C区第４号溝跡



第52図　C区第5号溝跡